

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（199）

国分高等学校校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

も と お さ と い せ き

# 本御内遺跡 V

（霧島市国分）

2019年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター



遺跡遠景（錦江湾と桜島を望む）

## 序 文

この報告書は、国分高校校舎改築事業に伴って、平成29年度に実施した霧島市国分に所在する本御内遺跡の発掘調査の記録です。

本御内遺跡は国分平野の北東部に位置しており、大隅国分寺跡や国分新城（舞鶴城）跡を含むなど、古くから大隅国の中心地であったことが知られています。

今回の調査は第一グラウンド南側の国分新城（舞鶴城）跡内で行われました。弥生時代～古代においては多量の遺物が出土し、中世では遺物と共に、溝や土塁で防御を固めた武家屋敷跡が出土しました。これは、この地が古代以前から中世まで幅広く活用され、大隅国の中心地として繁栄していたことを示します。また、武家屋敷跡の検出は県内で初めてのことであり、中世の南九州を考える際の貴重な資料を提供してくれました。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する関心とご理解をいただくとともに、文化財の普及・啓発の一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたり御協力をいただいた、県教育庁学校施設課、県立国分高等学校、霧島市教育委員会、関係各機関及び発掘調査・整理作業に従事された方々に厚くお礼を申し上げます。

平成31年3月

鹿児島県立埋蔵文化財センター  
所 長 堂 込 秀 人

# 報 告 書 抄 録

ふりがな	もとおさといせき ご
書名	本御内遺跡 V
副書名	国分高等学校校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シリーズ番号	199
編著者名	藤島 伸一郎 福菌 慶明
編集機関	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-48-5811
発行年月日	西暦2019年3月

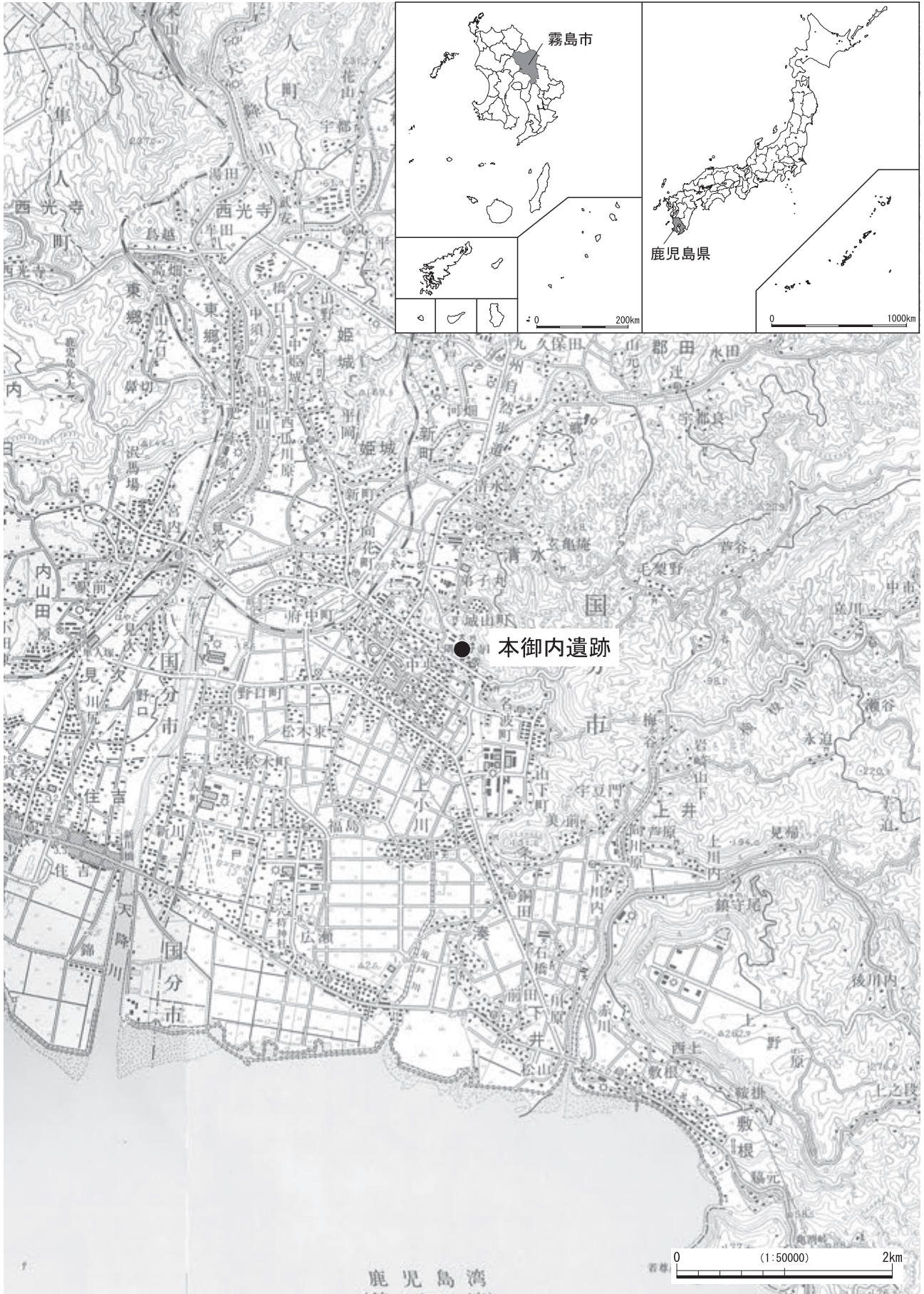
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	発掘原因
		市町村	遺跡 番号					
もとおさといせき 本御内遺跡	かごしまけん 鹿児島県 きりしまし 霧島市 こくぶんちゅう 国分中央 にちょうめ 二丁目	46218	218-66 (旧10-66)	31. 73989	131. 77441	確認調査 20160601 ～ 20160629  発掘調査 20171009 ～ 20180223	3,400	国分高等学校校舎改築事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
本御内遺跡	散布地 城館跡	縄文時代 弥生時代 古墳時代 古代 中世 近世 近代	竪穴建物 溝状遺構 溝状遺構 溝状遺構 土塁状遺構 掘立柱建物跡 カマド 大型土坑 開渠 石列遺構 土坑墓 校舎跡	打製石斧，磨製石斧 入佐式・黒川式 山ノ口式 松木菌式・中津野式 東九州系土器 東原式 土師器，須恵器，布 目瓦，越州窯系青磁， 緑釉陶器，白磁 土師器，青磁，白磁， 染付，中国陶器，滑 石製品，茶釜，播鉢， 板碑，石塔，石臼， 茶臼，鉄製品  陶磁器・陶器	

遺跡の概要

近世初頭に築城された国分新城(舞鶴城)跡に位置する，縄文時代から近代に至る複合遺跡である。弥生～古墳時代の遺物は極めて多い。古代では，多くの布目瓦と共に緑釉陶器や越州窯青磁も出土しており，国分寺や国府との強い関連が窺える。中世においては，多くの遺物と共に，土塁状遺構に囲まれた武家屋敷と考えられる建物が出土した。これは県内で初めての事例であり，貴重な成果である。





本御内遺跡位置図

# 例言

- 1 本書は国分高等学校校舎改築事業に伴う本御内遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は鹿児島県霧島市国分中央2丁目に所在する。
- 3 発掘調査は、鹿児島県学校施設課の依頼を受け、鹿児島県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査は平成29年度に実施し、整理・報告書作成作業は平成30年度に鹿児島県立埋蔵文化財センターで実施した。
- 5 掲載遺物番号は通し番号とし、本文、挿図、表、図版の番号は一致する。
- 6 遺物注記等で用いた記号は「MO」である。
- 7 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 8 本書で用いたレベル数値は海拔絶対高である。
- 9 本書で使用した方位はすべて真北である。
- 10 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、調査担当者が行った。また、空中写真の撮影は(有)スカイサーベイに委託した。

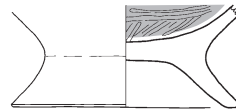
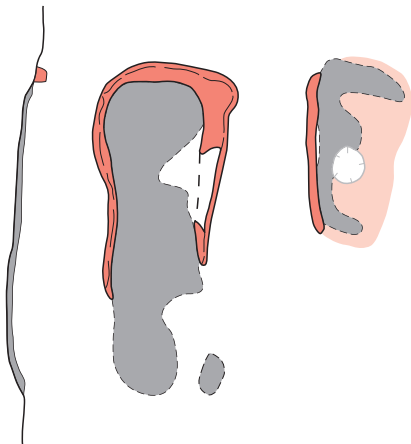
- 11 遺構図等の作成・トレースは(株)イビソクに委託し、修正・編集を福菌慶明が整理作業員の協力を得て行った。
- 12 出土遺物の実測・トレースは、藤島伸一郎が整理作業員の協力を得て行った。
- 13 出土遺物の写真撮影は、(公財)埋蔵文化財調査センターの吉岡康弘・西園勝彦が行った。
- 14 本書に係る自然科学分析の炭素年代測定は(株)加速器分析研究所・(株)パレオ・ラボに委託した。
- 15 本書の編集は藤島・福菌が担当し、執筆の分担は次のとおりである。

第1～3章	藤島・福菌
第4章	文頭に記載
第5章	藤島
- 16 本書に係る出土遺物及び実測図、写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示活用を図る予定である。

# 凡例

- 1 本書で用いるカマド遺構の表現方法は以下のとおりである。(下図参照)
- 2 本書で用いた土器・土師器・陶磁器の表現は次のとおりである。(右図参照)
- 3 本書に用いた遺構の略号は次のとおりである。「SD」溝状遺構 「SK」土坑 「SP」ピット

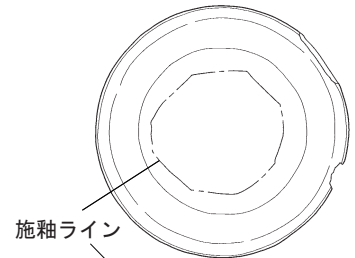
■ 炉壁   ■ 炭化物   ■ 焼土



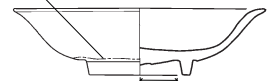
黒色土器・黒色部分



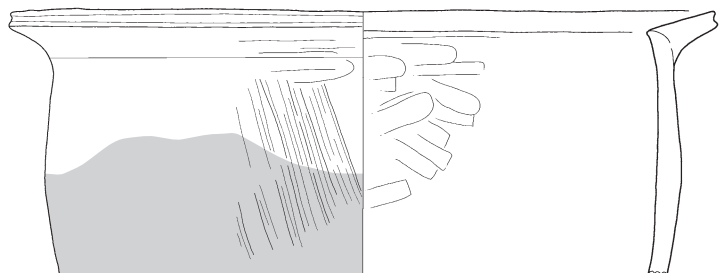
赤色顔料・赤色部分



施釉ライン



高台内・畳付等



煤・炭化物

# 目 次

巻頭図版  
序文  
報告書抄録  
遺跡位置図  
例言・凡例

## 第I章 発掘調査の経過

第1節 調査に至るまでの経緯	1
第2節 確認調査	1
第3節 本調査	1
第4節 整理・報告書作成	2

## 第II章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 現在までの調査	6

## 第III章 調査の方法と成果

第1節 調査の方法	7
第2節 層序	7
第3節 層序の比較	8
第4節 調査の成果	11

## 第IV章 自然科学分析

第1節 委託炭化物の出土位置	71
第2節 放射性炭素年代測定(パレオ・ラボ)	71
第3節 放射性炭素年代測定(加速器分析研究所)	74

## 第V章 総括

第1節 縄文時代	77
第2節 弥生・古墳時代	77
第3節 古代	77
第4節 中世	77
第5節 近世	78
第6節 課題及びまとめ	78

写真図版	81
------	----



## 挿図目次

### 本御内遺跡位置図

第1図	試掘トレンチ位置図	1
第2図	周辺遺跡位置図	4
第3図	本御内遺跡 現在までの調査範囲	6
第4図	グリッド配置図及び調査範囲	7
第5図	過年度調査区及び周辺遺跡との層序比較	8
第6図	トレンチ配置図及び土層断面図	9
第7図	トレンチ内土層断面図	10
第8図	縄文時代出土遺物	11
第9図	弥生・古墳時代遺構配置図	12
第10図	竪穴建物及び出土遺物	13
第11図	炭化物集中区1・溝状遺構1号及び出土遺物	14
第12図	弥生時代出土遺物(甕・壺)	15
第13図	弥生時代出土遺物(甕)	16
第14図	弥生時代出土遺物(甕・壺)	17
第15図	古墳時代出土遺物(甕)	18
第16図	古墳時代出土遺物(甕・蓋)	19
第17図	弥生時代出土遺物(壺)	20
第18図	弥生・古墳時代出土遺物(壺・線刻土器)	21
第19図	古墳時代出土遺物(高坏・鉢)	22
第20図	古墳時代出土遺物(ミニチュア土器他)	23
第21図	古代遺構配置図	24
第22図	溝状遺構2・3号	25
第23図	古代出土遺物(土師器・坏・埴・皿)	27
第24図	古代出土遺物(土師器・青磁等)	28
第25図	古代出土遺物(須恵器坏・皿・蓋・壺・甕)	29
第26図	古代出土遺物(須恵器甕)	30
第27図	古代出土遺物(平瓦)	31
第28図	古代出土遺物(丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦)	32
第29図	中世遺構配置図(1期)	33
第30図	大型土坑1・2号	34
第31図	大型土坑3・4号	36
第32図	大型土坑2～9号及び炭化物集中区位置図	36
第33図	溝状遺構4・5号平面図	37
第34図	溝状遺構4・5号断面図	38
第35図	溝状遺構6・7号及び土坑1～3号平面図	39
第36図	溝状遺構6・7号断面図	40
第37図	鍛冶遺構及び出土遺物	42
第38図	溝状遺構8号	42
第39図	カマド1～4号	43
第40図	カマド5～9号	44
第41図	掘立柱建物跡1号	45
第42図	掘立柱建物跡2号	46
第43図	掘立柱建物跡3号①	47
第44図	掘立柱建物跡3号②	48
第45図	中世遺構配置図(2期)	49
第46図	Ⅲ層コンタ図	50
第47図	石列遺構・炭化物集中区6及び出土遺物	51
第48図	開渠	52
第49図	溝状遺構9号	52

第50図	土坑墓1～3号及び出土遺物	53
第51図	中世出土遺物(土師器・白磁・染付)	55
第52図	中世出土遺物(青磁)	56
第53図	中世出土遺物(中国陶器・須恵器等)	57
第54図	中世出土遺物(備前播鉢)	58
第55図	中世出土遺物(播鉢)	59
第56図	中世出土遺物(釜類)	60
第57図	中世出土遺物(石臼)	61
第58図	中世出土遺物(茶臼・板碑・石塔)	62
第59図	中世出土遺物(滑石製石鍋・刀子・貨幣)	63
第60図	近世遺物	63
第61図	高等女学校寄宿舎跡	64
第62図	昭和8年頃の校舎配置図	64
第63図	時代不明遺物	64
第64図	炭化物委託分位置図	71
第65図	古代溝の推定	77
第66図	中世推定図	79
第67図	舞鶴城絵図と現在までの調査区	80

## 図版目次

巻頭図版	遺跡遠景(錦江湾と桜島を望む)	
写真図版1	遺跡上空より	81
写真図版2	土層及び弥生時代・古代の遺構	82
写真図版3	古墳時代遺物出土状況・大型土坑	83
写真図版4	溝状遺構及び出土遺物①	84
写真図版5	溝状遺構及び出土遺物②	85
写真図版6	掘立柱建物跡	86
写真図版7	カマド	87
写真図版8	Ⅲ層上面出土遺構	88
写真図版9	弥生・古墳時代出土遺物	89
写真図版10	縄文～古墳時代出土遺物	90
写真図版11	古墳時代・古代出土遺物	91
写真図版12	古代出土遺物	92
写真図版13	古代・中世出土遺物	93
写真図版14	中世出土遺物	94
写真図版15	中世出土遺物	95
写真図版16	中世・近世・時代不明出土遺物	96

## 表目次

第1表	周辺遺跡地名表	5
第2表	基本層序	7
第3表	瓦分類表	32
第4表	縄文～古墳時代土器観察表	65
第5表	土師器観察表	66
第6表	須恵器観察表	66
第7表	陶磁器等観察表	67
第8表	古代瓦観察表	68
第9表	石・鉄製品その他観察表	68
第10表	号名対応表	68
第11表	遺物集計表①	69
第12表	遺物集計表②	70



# 第 I 章 発掘調査の経過

## 第 1 節 調査に至るまでの経緯

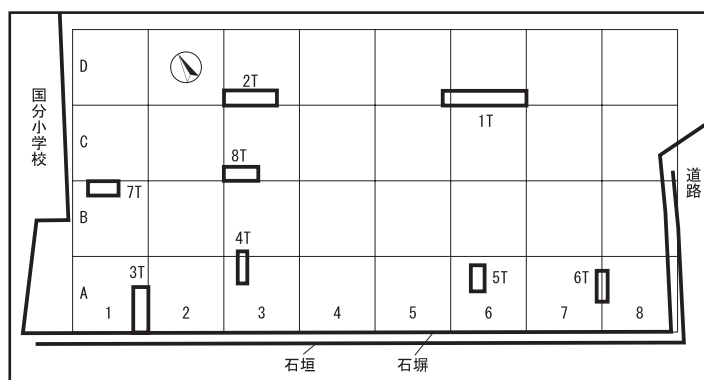
鹿児島県教育委員会は、文化財の保護・活用を図るため、各開発関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取扱いについて協議し、諸開発との調整を図っている。

この事前協議制に基づき鹿児島県教育庁学校施設課（以下、学校施設課）は、鹿児島県立国分高等学校改築事業の実施に先立ち事業対象区域における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下、文化財課）に照会した。事業対象区域は、周知の埋蔵文化財包蔵地である本御内遺跡内であることから、遺跡の取扱いについて学校施設課・国分高等学校・文化財課・県立埋蔵文化財センター（以下、埋文センター）の四者で協議を行った。協議の結果、対象区域内の遺跡の範囲と性格を把握するために、確認調査を行うこととした。

## 第 2 節 確認調査

確認調査は、埋文センターが国分高等学校の協力を得て平成28年6月1日（水）～平成28年6月29日（水）（実働16日）に実施した。国土座標など、基準となる杭が無かったため、昭和63年度の平田信芳教諭による調査を参考に、国分小学校境界と南側石塀を基準としてグリッドを設定した。そして校舎建築予定箇所に、グリッドに沿った8箇所のトレンチを設定した。また高校正門南側の駐車場内に新弓道場を建設するのに伴い、1箇所のトレンチを設定した。合計9箇所のトレンチ、表面積150㎡の調査を行った。

調査において、第一グラウンド南側の1～8トレンチでは、西側を中心にプールによる攪乱が1～2m下まで続いていること、北西側が最も旧地形が高く、南東に向かい低くなり、城の造成土と考えられる混合土がその上を覆っていること、その下に古墳時代等の包含層が残る、古代・中世等の遺物も多く遺存していることが確認された。駐車場内の9トレンチでは、近現代と思われる水田跡のみで、遺物は確認できなかった。調査体制については、以下のとおりである。



### 調査体制

事業主体	鹿児島県教育委員会（文化財課）
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所	長 福山 徳治
調査企画	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	次長兼調査課長 前迫 亮一
	総務課長 高田 浩
	第一調査係長 大久保浩二
調査担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	文化財主事 藤島伸一郎
	文化財主事 樋之口隆志
事務担当	鹿児島県立埋蔵文化財センター
	主幹兼総務係長 脇野 幸一
	主 事 丸野 将輝

## 第 3 節 本調査

確認調査の結果を受け、再協議を行い、その結果、平成29年度に第一グラウンド南側の校舎建築予定地において、本調査を実施することとなった。

調査期間は平成29年10月2日（月）～平成30年3月15日（木）（実働96日）で、対象面積は表面積約1,800㎡、延べ面積3,400㎡、調査体制及び経過は以下のとおりである。なお、ピット・溝等、遺構の多くを（株）イビソクに実測委託した。

### 1 調査体制

事業主体	鹿児島県教育委員会（学校施設課）
調査主体	鹿児島県教育委員会
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター
所	長 堂込 秀人



第 1 図 試掘トレンチ位置図

調査企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
 次長兼調査課長 大久保浩二  
 総務課長 高田 浩  
 第二調査係長 宗岡 克英  
 調査担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
 文化財主事 中村幸一郎  
 文化財主事 藤島伸一郎  
 事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
 総務係長 草水美穂子  
 主査 新穂 秀貴

## 2 調査の経過

発掘調査の経過については、日誌抄を月ごとに集約して記載する。

10月2日～10月27日

- ・オリエンテーション・環境整備
- ・表土及び攪乱土掘り下げ
- ・A・B-2～4区 II～V層調査
- ・C-2・3区 精査及びII～V層調査
- ・A・B-5～8区 高等女学校建物基礎部分調査
- ・竪穴建物・大型土坑調査
- ・写真撮影、土層断面実測、遺物取り上げ

11月1日～11月28日

- ・A・B-2～4区 III層コンタ図作成
- ・B・C-2～4区 III層コンタ図作成、V～VI層調査
- ・竪穴建物・大型土坑・掘立柱建物跡調査
- ・写真撮影、土層断面実測、遺構実測・遺物取り上げ

12月1日～12月26日

- ・A・B-2～4区 III～V層調査
- ・B・C-2～6区 II～V層調査
- ・カマド・溝状遺構・掘立柱建物跡・大型土坑調査
- ・写真撮影、遺構実測・遺物取り上げ

1月5日～1月30日

- ・A・B-2～5区 VI層調査
- ・B・C-2～6区 V・VI層調査
- ・カマド・溝状遺構・掘立柱建物跡・大型土坑調査
- ・写真撮影、遺構実測・遺物取り上げ
- ・国分高校1・2年生全クラス、3年日本史選択者、教職員遺跡見学
- ・航空写真撮影

2月1日～2月28日

- ・B・C-2～6区 V・VI層上面遺構調査
- ・カマド・溝状遺構・大型土坑調査
- ・写真撮影、遺構実測、片付け・埋め戻し

3月2日～3月15日

- ・調査区埋め戻し・整地

## 第4節 整理・報告書作成

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、平成30年4月2日～平成31年2月22日にかけて鹿児島県立埋蔵文化財センターで行った。

整理・報告書作成作業に関する調査体制や経過は以下のとおりである。

### 1 作成体制（平成30年度）

事業主体 鹿児島県教育委員会（学校施設課）

作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 堂込 秀人

作成企画 鹿児島県立埋蔵文化財センター

次長兼調査課長 大久保浩二

総務課長 高田 浩

第一調査係長 中村 和美

作成担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

文化財主事 福菌 慶明

文化財主事 藤島伸一郎

事務担当 鹿児島県立埋蔵文化財センター

総務係長 草水美穂子

主査 丸野 将輝

作成指導 鹿児島女子短期大学

教授 竹中 正巳

鹿児島大学埋蔵文化財調査センター

センター長 中村 直子

※竹中教授の指導は平成29年度

### 2 整理作業の経過

整理作業の経過については、月ごとに集約して記載する。

4月 遺物水洗い・接合、図面整理、遺構図修正トレース、放射性炭素年代測定委託

5月 遺物水洗い・注記・接合・分類・実測、土層断面図作成、遺構図修正トレース、原稿執筆

6月 遺物注記・接合・分類・実測・拓本・トレース、遺構図修正・トレース、写真分類、原稿執筆

7月 遺物実測・拓本・トレース、原稿執筆、写真レイアウト、観察表作成

8月 遺物実測・拓本・トレース、原稿執筆、観察表作成、原稿執筆・写真レイアウト、放射性炭素年代測定納品

9月 遺物写真撮影、原稿執筆、レイアウト図作成

10月 レイアウト修正、原稿執筆

11月 入札・遺物収納

12月・1月 原稿チェック

2月 報告書印刷、納入

## 第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

本御内遺跡は鹿児島県霧島市国分中央に所在する。霧島市は鹿児島県のほぼ中央、大隅半島と薩摩半島の交点部分に位置し、南部は鹿児島湾（錦江湾）、北部は新燃岳や韓国岳に代表される霧島連山が広がる。霧島の山々から流れる河川によって造られた沖積平野である国分平野は、平地が少ない県内において屈指の広さである。

本遺跡は、この国分平野の北東部端、沖積平野内微高地に位置する。西南側は天降川・手籠川流域にかけ水田が広がり、北東側は山裾に接し、標高192mの城山を中心とした、浸食を受けたシラス台地が広がっている。山地に接するため、平成5年の災害に代表されるように、豪雨時等にはたびたび土石流による影響を受けていたことが以前の調査によって確認されている。

前方に平野、後方に山地が広がるその地形を生かし、近世初頭には舞鶴城が築城されている。また北西約400mの地点には大隅国分寺跡、北東約300mの地点には妻山元遺跡が所在するなど、遺跡が密に立地する地域でもある。

### 第2節 歴史的環境

本御内遺跡が所在する霧島市国分では、約100の遺跡が確認されている。ここでは、調査が行われた本御内遺跡周辺の遺跡について概略を述べる。

縄文時代早期の遺跡として、平椀式土器の標識遺跡となっている平椀貝塚がある。また、南東側の台地上には上野原遺跡があり、52基の竪穴住居跡を中心に、39基の集石や16基の連穴土坑などの遺構が確認されている。後期や晩期では、大隅国分寺跡や妻山元遺跡において遺物包含層が確認されている。遺構の検出例はみられない。

弥生時代の遺跡として、上述した上野原遺跡があり、山ノロ式土器や竪穴住居跡、掘立柱建物跡が検出されている。また、気色の杜遺跡等では、遺物の散布が確認されている。

古墳時代の遺跡として、本御内遺跡の北東部に城山山頂遺跡がある。43基の住居跡やピット等の遺構と共に、布留式土器と成川式土器が共伴して出土しており、畿内との関係が指摘されている。また妻山元遺跡では、後期の竪穴住居跡13基、土坑13基、溝状遺構7基が検出されており、特に住居から鍛冶跡が出土しており、この時期には製鉄が行われていたと考えられる。亀ノ甲遺跡は4基の土坑墓と考えられる遺構から鉄剣、鉄鏃、鉄刀、土師器、須恵器等が出土している。工事中の発見により詳

細は不明ながら、三累環頭大刀が出土するなど有力者の墓と想定される。

古代では、遺跡西側に大隅国分寺跡がある。礎石等の遺構は検出されていないが、布目瓦等が大量に出土し、柱跡や溝跡が検出されている。なお、国分寺の東側の範囲は現在の国分小学校の西側付近と推定されている。また、大隅国分跡では墨書土器や土師器・須恵器、緑釉陶器が出土しており、近接する気色の杜遺跡においても、大量の土師器や布目瓦、墨書土器が出土している。

中世の遺跡として、大隅正八幡宮（鹿児島神宮）の四社家である桑幡氏・留守氏・最勝寺氏・沢氏の館跡があり、それぞれの館を取り囲む堀跡や土塁が検出されている。特に留守氏の館跡では土塁が現存しており、現在も見ることができる。遺物としては、土師器の他に、中国やタイ・ベトナム、高麗などの海外からの輸入陶磁器が出土している。また一部の墓地の調査も行われており、沢家墓地では、墓地を取り囲むように並べられた板碑が残っている。大隅正八幡宮の別当寺である弥勒院跡では、池・溝・柱穴などの遺構や土師器や海外からの輸入陶磁器、中世陶器などが出土している。

また、中世末から近世の遺跡として、霧島市隼人の富隈城と本御内遺跡内における国分新城（舞鶴城）跡がある。著名な戦国大名である島津義久は、中世末から近世初頭にかけて富隈城及び国分新城に居城しており、晩年を過ごしている。これまでの調査において、富隈城では礎石等や陶磁器が、国分新城では石垣跡や瓦等が出土している。

### 参考文献

- 国分市教育委員会1985『妻山元遺跡』
- 国分市教育委員会1985『城山山頂遺跡』
- 隼人町教育委員会1999『富隈城跡Ⅲ』
- 隼人町教育委員会2001『留守氏館跡』
- 隼人町教育委員会2003『桑幡氏館跡』
- 霧島市教育委員会2005『大隅国分寺跡』
- 霧島市教育委員会2011『大隅正八幡宮関連遺跡群』
- 霧島市教育委員会2011『最勝寺氏館跡』
- 霧島市教育委員会2012『宗円坊屋敷跡』
- 霧島市教育委員会2014『気色の杜遺跡2』
- 霧島市教育委員会2015『園田遺跡』
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター1997『本御内遺跡Ⅲ』
- 鹿児島県教育委員会2005『先史・古代の鹿児島 資料編』





第2図 周辺遺跡位置図



第1表 周辺遺跡地名表

	遺跡名	所在地	時代	地形	備考
1	本御内	国分中央二丁目	縄文～近世	平地	鹿児島県立国分高校郷土研究クラブ 1988 『本御内遺跡(国分舞鶴城跡)』 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1994 『本御内遺跡(舞鶴城跡)』 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1995 『本御内遺跡』 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1997 『本御内遺跡Ⅲ』 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002 『本御内遺跡』
2	遠寿寺跡	国分中央一丁目	奈良, 平安	平地	
3	国指定史跡 大隅国分寺跡	国分中央一丁目	奈良, 平安	平地	国分市教育委員会 1981 『大隅国分寺跡確認調査事業報告』 国分市教育委員会 2005 『大隅国分寺跡』 霧島市教育委員会 2010 『大隅国分寺跡-遺構編-』 霧島市教育委員会 2011 『大隅国分寺跡-遺物編-』
4	鼻連山城跡	国分中央一丁目	中世	丘陵	
5	大隅国府跡	国分府中町	奈良, 平安	平地	国分市教育委員会 1990 『国府(小路)遺跡』 霧島市教育委員会 2011 『大隅国府跡』
6	亀ノ甲土坑	国分府中町亀ノ甲	古墳	平地	河口貞徳 1988 「亀ノ甲遺跡」『日本の古代遺跡 38 鹿児島』
7	府中館跡	国分府中町中園	中世	平地	
8	岡見山	国分府中塚脇	弥生, 古代～近世	平地	
9	気色の杜	国分府中天神坊	弥生	平地	霧島市教育委員会 2011 『気色の杜遺跡1』 霧島市教育委員会 2014 『気色の杜遺跡2』
10	智尾岡	国分清水弟子丸乳尾	弥生(後)	台地	
11	城山山頂	国分上小川新城	縄文, 古墳, 中世～近現代	山地	国分市教育委員会 1985 『城山山頂遺跡』
12	妻山元	国分中央二丁目	縄文(晩), 古墳, 中世(室町以降)	平地	国分市教育委員会 1985 『妻山元遺跡』 国分市教育委員会 2003 『大隅国分寺関連遺跡Ⅷ・Ⅹ 妻山元遺跡・大平遺跡』
13	大平	国分上小川・名波町	弥生	緩斜面	国分市教育委員会 2003 『大隅国分寺関連遺跡Ⅷ・Ⅹ 妻山元遺跡・大平遺跡』
14	園田	国分上小川園田	弥生(後), 古墳	平地	霧島市教育委員会 2015 『園田遺跡』
15	宇豆峯塁跡	国分上井宇豆門	中世	丘陵	
16	桶脇	国分上井桶脇	古墳	丘陵	
17	中園貝塚	国分上井一条	縄文(早)	平地	
18	平楯	国分上井	縄文(前)	平地	
19	上井城跡	国分上井一条	中世	山地	
20	瀧竜院跡	国分上井宇都	奈良, 平安	平地	
21	砂ヶ町	国分湊砂ヶ町	古墳	河川	
22	国丸	国分湊国丸	古墳	河川	
23	下井城跡	国分下井	中世	平地	
24	上野原	国分上之段他	縄文, 弥生, 古墳, 中世, 近代	台地	鹿児島県立埋蔵文化財センター 2000 『上野原遺跡第10地点第1～3分冊』 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2001 『上野原遺跡第10地点 第4～10分冊』

### 第3節 現在までの調査

これまで、県立国分高等学校の施設の建て替え等に伴い実施されており、平成4年度には体育館建て替えに伴う市道付け替え部分の調査(第1次調査)、平成5年には体育館部分の調査(第2次調査)、平成6年には理科校舎部分の調査(第3次調査)、平成8年にはプール建設用地の調査(第4次調査A)及び弓道場予定地の調査(第4次調査B)、平成13年度には浄化槽設置部分の調査(第5次調査A～C)が行われている。また、これらに先行して昭和63年度に、平田信芳氏を中心に第1グラウンド部分の確認調査(A～D)が行われている。以後、これまでの調査を時代に記す。

#### 1 縄文時代

縄文時代の遺構は出土していない。遺物は、早期の土器が第1次調査区において1点、後期の土器が第4次調査区Aで1点、晩期の土器が第4次調査区Bで1点出土している。石器も数点の出土にとどまる。

#### 2 弥生時代

第2次調査区より、竪穴住居跡1軒とその周辺から青銅製の破鏡1点と東九州の安国寺式土器や山ノ口式土器が出土している。破鏡は方格T字鏡の破片に紐を通す穴が開けられている。弥生時代の鏡の出土は県内で数例しかない。また第4次調査区Aからは、前期1点、中期3点の土器が出土している。第5次調査区Aからは5点、第4

次調査区Bからは1点、中期の山ノ口式土器が出土している。

#### 3 古墳時代

全ての調査において、最も遺物の出土量が多い時代である。第2次調査区から、土坑4基と南北に広がる溝状遺構が、第5次調査区Aから南北に連なる溝状遺構が2条検出されている。また溝内から完形のものを含め、多くの土器が出土している。第4次調査区Bにおいては、多量の土器が出土している。

#### 4 古代

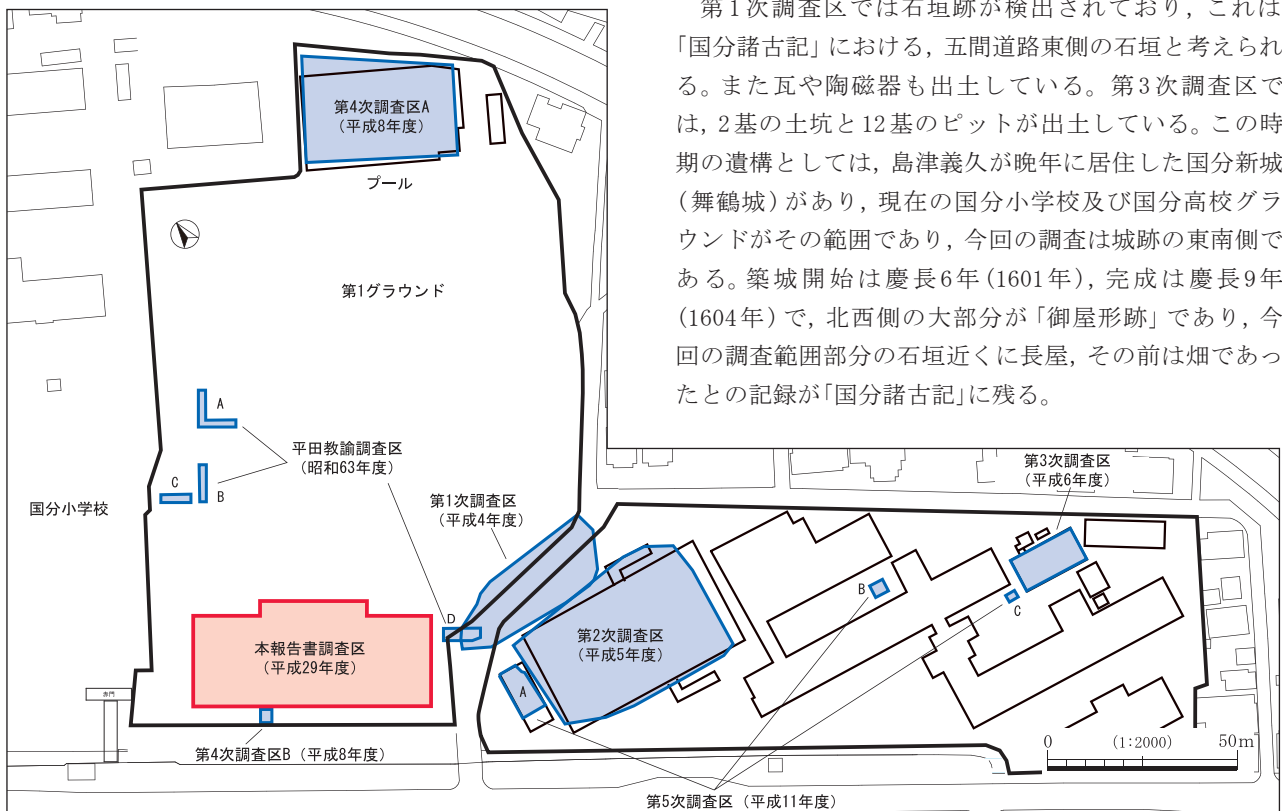
第1次調査区において、土師器・須恵器・布目瓦・緑釉陶器・内黒土師器など多くの遺物と共に、東西方向に伸びる溝が1条出土している。第2次調査区においては、ピットや土坑が検出されている。第5次調査区Cから水田遺構やそれに伴う足跡が検出されている。第4次調査区Bでは土師器や須恵器、布目瓦など多くの遺物が出土している。

#### 5 中世

第1次調査区においては、数列に重なる溝が、第2次調査区では水田遺構が検出されている。またそれに伴い多くの青白磁や滑石製石鍋・土師器等が出土している。第3次調査区においては畦畔を伴う水田遺構が検出されており、青花等の陶磁器も出土している。

#### 6 近世

第1次調査区では石垣跡が検出されており、これは「国分諸古記」における、五間道路東側の石垣と考えられる。また瓦や陶磁器も出土している。第3次調査区では、2基の土坑と12基のピットが出土している。この時期の遺構としては、島津義久が晩年に居住した国分新城(舞鶴城)があり、現在の国分小学校及び国分高校グラウンドがその範囲であり、今回の調査は城跡の東南側である。築城開始は慶長6年(1601年)、完成は慶長9年(1604年)で、北西側の大部分が「御屋形跡」であり、今回の調査範囲部分の石垣近くに長屋、その前は畑であったとの記録が「国分諸古記」に残る。



第3図 本御内遺跡 現在までの調査範囲

## 第三章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

#### 1 発掘調査の方法

調査区の設定は、確認調査時と同じく、石塚の西南角を起点としてグリッドを設定した。グリッド名は東側へ10mごとに1～8、北側へ10mごとにA～Dの記号を使用した。標高の基準は、高校前歩道上の2級基準点国分No.5（標高9.726m）を利用した。

調査範囲については、平成29年度における基本設計で示された校舎建築範囲である、石塚から南側を5m離れた箇所から東西63m、南北24mの範囲に設定を行った。ただし基本設計の段階であり、今後範囲が変更される可能性がある。なお、確認調査時と本調査時において基本設計範囲が異なるため、一部のトレンチは本調査範囲外に位置する。

調査の方法は、重機により表土やプール移設に伴う攪乱土などを剥いだ後、鋤簾やねじり鎌による人力掘削で遺構・遺物の検出を行った。近世・近代時のものと考えられる埋め立て土（II層土）については、遺構の有無を確認しつつ、重機と人力を併用して掘削を行った。

調査深度については、校舎の基礎が達するグラウンドより1.3m下の標高10.4mまでを基本とし、それ以下はIII層を除去した面における遺構の検出及び一部調査にとどめた。また、調査区内南側のA・B-5～7区においては、確認調査において標高10.4m以下まで近世・近代の埋

め立て土が続くため、近代遺構の調査までとした。なお、グラウンド入口付近のB・C-7・8区については、進入路のため調査を控えた。

出土遺物については、大型土坑や堅穴状遺構は点上げを行い、溝状遺構内の遺物はグリッドや深度ごとに一括で取り上げた。

#### 2 整理作業の方法

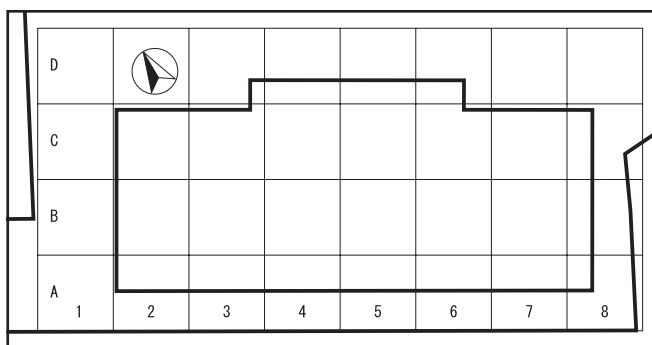
注記は、注記記号「MO」を頭に、包含層資料は続けて「区」「層」「遺物番号もしくは一括」の順に記入した。遺構内資料は注記記号及び「区」の後に遺構記号を用いて遺構番号を記し、その後に「遺物番号もしくは一括」を記入した。遺物の選別は、層や遺構ごとに、時代や形式別で分類し、数や分布状況の把握に努めた。また、希少なものと数が多い中で代表例となるものは接合・実測を行った。

遺物の掲載に関して、そのほとんどが造成土であるII・III層土内及び溝状遺構・大型土坑内から出土しており、それらは埋め戻し時に各時代のものが混合したと判断されるため、堅穴遺構や石列遺構から出土した遺物など、時代認定に関わる遺物は遺構と共に、それ以外は各時代一括で記載した。

なお、カマド及び溝状遺構の号名は、整理作業時に時代順に付け直しており、第10表にその対比を示す。なお注記は発掘作業における号名で記入している。また、遺物は溝状遺構や大型土坑などの遺構ごと、II～VI層はグリッドごとに数を集計し、第11・12表に記載した。

### 第2節 層序

本御内遺跡の地形は河川堆積や山間部からの土石流によって形成されたと考えられ、層位は大変複雑である。また近世初頭における舞鶴城の建築、現在に続く近代からの学校建設により攪乱を受けた部分が多い。よって層位の把握は困難であったが、前回までの調査と妻山元遺跡など近隣の遺跡との層位比較により分類した。本遺跡の基本層序を第2表に示す。



第4図 グリッド配置図及び調査範囲

第2表 基本層序

層	色調等	時代	包含層・特徴	層厚(cm)
I a	砂利・真砂土等	現代	グラウンド整地土及び表土。	10～20
I b	混合土(現代遺物含む)		プール等、現代の攪乱土(コンクリート等含む)。	10～200
II	混合土(近代・近世遺物含む)	近世～近代	舞鶴城の造成土及び近代以降の攪乱土及び造設土。確実な近代層はII a。	0～200
III	緑褐色土・黒褐色土	中世(16c頃)	中世(16c頃)の造成土。	20～40
IV	黒色土	古代～中世	古代～中世の包含層。溝間の土層状に残された部分のみ残存。	0～20
V	茶褐色土(赤褐色土)	弥生～古墳	弥生・古墳時代の包含層。C-2～4区を中心に残存。	20～40
VI	黄褐色土	弥生～古墳	砂層部分含む場所あり。上部や砂層で遺物が出土。	60～100
VII	黒褐色土		パミス多く含む。上部ほど明るい色調。	30～40
VIII	乳黄色土		砂や礫が多く入る。	20～30
IX	黒褐色土		VII層よりやや薄い色調。	20～30
X	白砂質土		シラスの2次堆積土。	20～

I層は現代の造成土で、Ia層はグラウンド整地土や表土、Ib層はゴミ捨て場やプール移設等による埋め立て土である。II層は近代の学校建設や近世の城造成時に埋め立てられたと考えられる混合土である。埋土中の遺物のほとんどが古墳～中世の遺物であり、近代及び近世の遺物は極めて少なく、近代と近世の明瞭な区別は困難であった。近世の城造成後に数回の攪乱を受けたと考えられる。ただし、確実に近代と判断できるものはIIaと示している。III層はB・C-3・4区を中心とした箇所に見られる約30cm程度の厚さで造成された埋土で、緑褐色主体、一部黒褐色の色調を呈する。北西側から南東側にやや下るように造成され、遺物より、上面は15世紀頃と判断される。III層が残存している部分は、第46図のコンタ図において示している。IV層は黒色土で、古代・中世の包含層であり、一部古墳も含む。中世における地形の改変によりその多くは破壊されており、南北に並列する溝状遺構に挟まれた土塁状遺構部分の頂部にのみ残存する。V層はパミスを多く含む茶褐色土で、弥生・古墳時代の包含層である。東側ではやや赤色が強くなる。VI層は黄褐色土で、60～100cmと厚く堆積しており、場所によって砂層や青灰色土、赤色の鉄分等が堆積した部分がみられ、河川氾濫等の影響を受けたとみられる。上部及び砂層では、弥生・古墳時代の土器が出土する箇所がある。堆積が比較的安定し、判別し易い箇所では、黄色の強い上部部分をVIa、白色の強い下部部分をVIbと記載した。VII層は黒褐色土で、パミスを多く含み、上部ほど黒色が強い。他遺跡との比較から、縄文時代晩期の包含層の可能性はある。VIII層は乳黄色土で、砂状もしくは1cm強の礫が混合している。IX層は黒褐色土で、VIII層土と良く似ているが比較的明るくやや薄い。X層は白砂質土で、シラスの2次堆積土と考えられる。

### 第3節 層序の比較

層序の決定に際し、本遺跡の過去の調査区及び周辺遺跡における包含層や層位関係、層序の色等を参考とし、その対比を図化したのが第5図である。包含層として確

認されたものには同色で記している。周辺遺跡の位置は第2図を、過去の調査区は第3図を参照されたい。

まず縄文後期及び晩期の包含層については、本遺跡における今報告書調査区の約300m西側に所在する大隅国分寺跡のIX層や、約500m東側の城山山頂遺跡のVI層において確認されている。本遺跡においては層からの出土例は無いが、平田教諭によって行われた調査区において、VII層が比定されている。

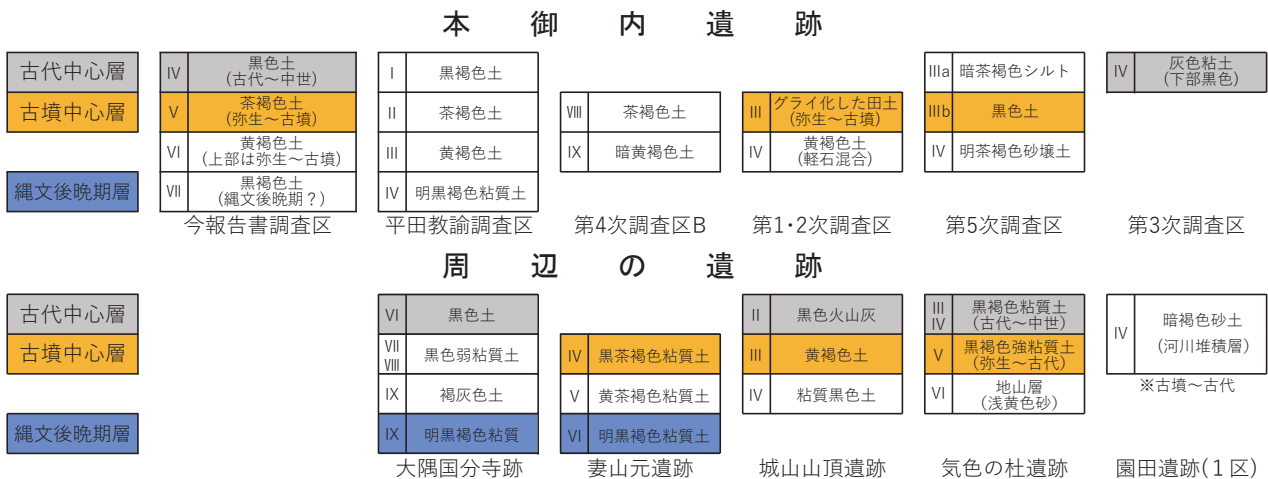
弥生時代の包含層を明確に記載している近隣遺跡は無いが、古墳時代に近くと推定される。古墳時代の包含層は多くの遺跡で検出されており、おおよそ茶褐色土・黒色土であり、城山山頂遺跡などより、黄褐色土も一部含むと推定される。また園田遺跡では古墳～古代における層を河川による堆積としており、今年度の調査区東側では同様と考えられる部分が見受けられる。

古代の包含層は、第3次調査区における黒色土(IV層)において、土師器や瓦等の古代遺物が出土している。大隅国分寺跡や城山山頂遺跡でも黒色土と報告されている。

中世の包含層は、第3次調査区の上面において中世の遺構が検出されている。今報告書調査区のIV層上部でも中世の遺物がみられ、黒色土の上部付近が包含層と推定される。



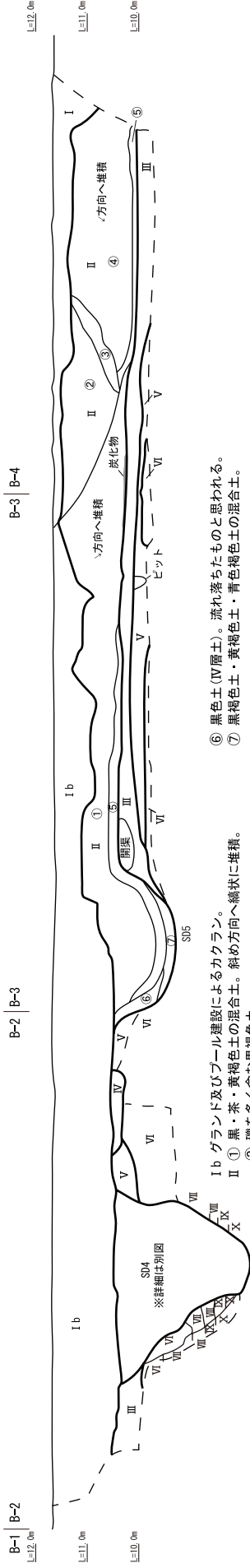
国分高校見学



第5図 過年度調査区及び周辺遺跡との層序比較



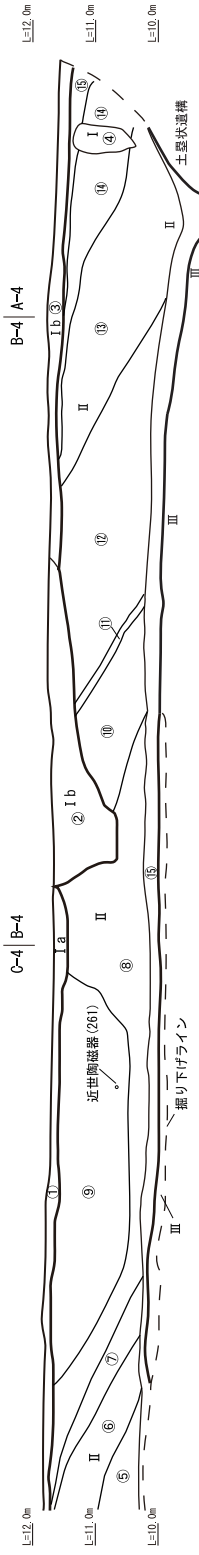
① B2～B4区北側土層断面



- ⑥ 黒色土 (W層土)。流れ落ちたものと思われる。
- ⑦ 黒褐色土・黄褐色土・青色褐色土の混合土。

- I b グランド及びプール建設によるカクラン。
- II ① 黒・茶・黄褐色土の混合土。斜め方向へ織状に堆積。  
 ② 礫を多く含む黒褐色土。  
 ③ 10cm大の礫を80%含む褐色土。  
 ④ 黒・茶・黄褐色土の混合土。①より薄い。斜め方向に織状に堆積。  
 ⑤ 黒・紫色土の混合土。10cm大の礫を30%含む。

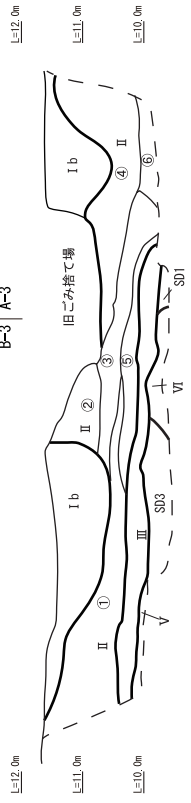
② A4～C4区東側土層断面



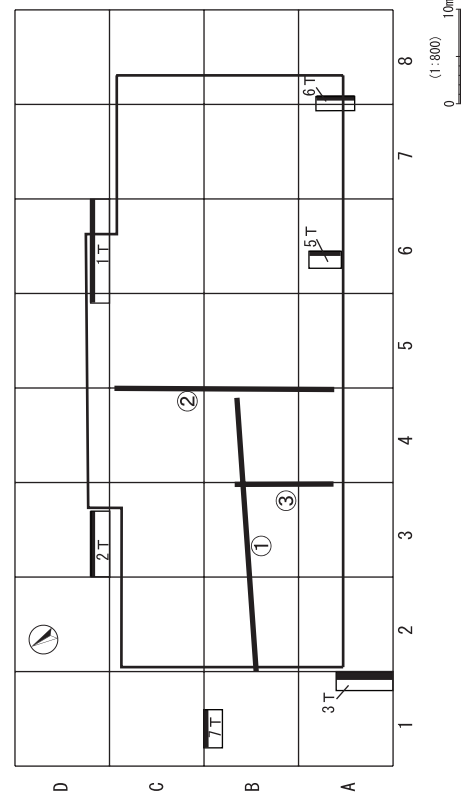
- I 現代
- ① グランド敷設土。
  - ② 削溝敷設時のカクラン。
  - ③ 旧校舎によるカクラン。
  - ④ 昭和期のゴミ捨て場跡。
- II 近代・近世 ※全て埋め立て用の混合土
- ⑤ 緑褐色土・黄褐色土。
  - ⑥ 緑褐色土・黄褐色土 (少量)。
  - ⑦ 緑褐色土・白褐色土。
  - ⑧ 緑褐色土・黄褐色土 (⑥より少ない)。
  - ⑨ 濃い茶褐色土。
  - ⑩ 黒褐色土・緑褐色土。

- III 中世
- ⑪ 黒褐色土。
  - ⑫ 黒褐色土・茶褐色土・黄褐色土。
  - ⑬ 黒褐色土 (多め)・茶褐色土・黄褐色土。
  - ⑭ 黒褐色土・茶褐色土・黄褐色土 (織含)。
  - ⑮ 暗い茶褐色土。礫を多く含む。

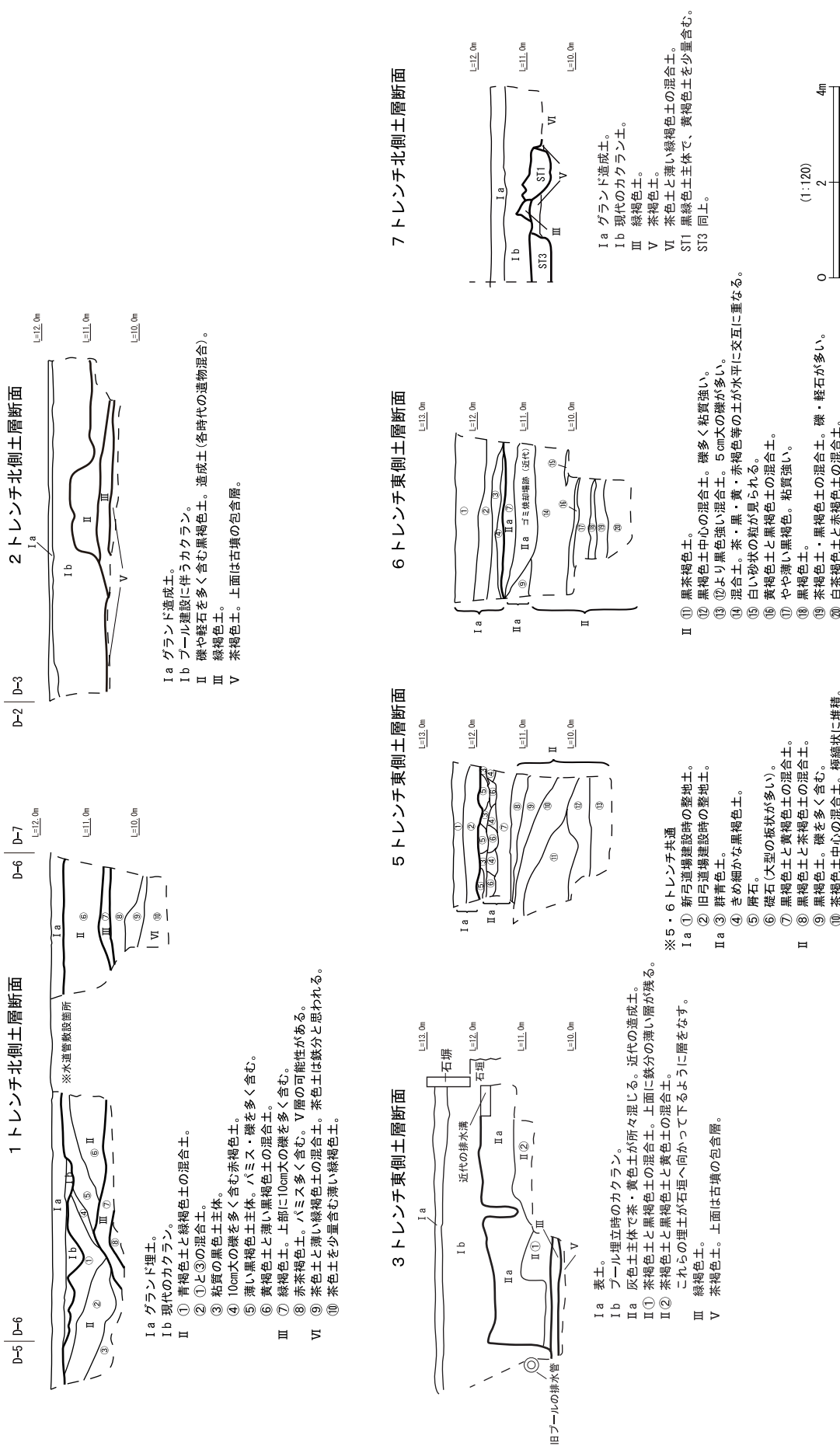
③ A3～B3区東側土層断面



- I b 現代のカクラン。
- II ① 黒褐色土・黄褐色土を含む赤褐色土。10cm大の礫を少量含む。  
 ② 黄褐色土。10cm大の礫を多く含む。  
 ③ 礫を多く含む黒褐色土。  
 ④ 白黄褐色土と薄い緑褐色土の混合土。ほぼ水平方向に堆積。  
 ⑤ 青乳白色土。上部に鉄分と思われる赤色土が厚らる。  
 ⑥ 黒褐色土と薄い緑褐色土の混合土。④と同じく水平に堆積。



第6図 トレンチ配置図及び土層断面図



第7図 トレンチ北側土層断面図

1 トレンチ北側土層断面

D-5 | D-6 | D-7 | D-6 | D-7  
 12.0m | 11.0m | 10.0m

Ia グランド埋土。  
 Ib 現代のカ克蘭。  
 II ① 青褐色土と緑褐色土の混合土。  
 ② ①と③の混合土。  
 ③ 粘質の黒色土主体。  
 ④ 10cm水の礫を多く含む赤褐色土。  
 ⑤ 薄い黒褐色土主体。ハミス・礫を多く含む。  
 ⑥ 黄褐色土と薄い黒褐色土の混合土。  
 ⑦ 緑褐色土。上部に10cm水の礫を多く含む。  
 ⑧ 赤茶褐色土。ハミス多く含む。V層の可能性がある。  
 ⑨ 茶色土と薄い緑褐色土の混合土。茶色土は鉄分と思われる。  
 ⑩ 茶色土を少量含む薄い緑褐色土。

※水道管敷設箇所

2 トレンチ北側土層断面

D-2 | D-3  
 12.0m | 11.0m | 10.0m

Ia グランド造成土。  
 Ib フール建設に伴うカ克蘭。  
 II 礫や軽石を多く含む黒褐色土。造成土(各時代の遺物混合)。  
 III 緑褐色土。  
 V 茶褐色土。上面は中填の包含層。

※5・6トレンチ共通

Ia ① 新弓道場建設時の整地土。  
 ② 旧弓道場建設時の整地土。  
 IIa ③ 群青色土。  
 ④ きめ細かな黒褐色土。  
 ⑤ 腐石。  
 ⑥ 礎石(大型の板状が多い)。  
 ⑦ 黒褐色土と黄褐色土の混合土。  
 ⑧ 黒褐色土と茶褐色土の混合土。  
 ⑨ 黒褐色土。礫を多く含む。  
 ⑩ 茶褐色土中心の混合土。極細状に堆積。

※④~⑥は高等女学校寄宿舎の基礎部分(第61図)。

3 トレンチ東側土層断面

D-5 | D-6 | D-7 | D-6 | D-7  
 13.0m | 12.0m | 11.0m | 10.0m

Ia 表土。  
 Ib フール立時のカ克蘭。  
 IIa 灰色土主体で茶・黄色土が所々混じる。近代の造成土。  
 II ① 茶褐色土と黒褐色土の混合土。上面に鉄分の薄い層が残る。  
 II ② 茶褐色土と黒褐色土と黄色土の混合土。  
 これらの埋土が石垣へ向かって下るように層をなす。  
 III 緑褐色土。  
 V 茶褐色土。上面は中填の包含層。

旧プールの排水管

4 トレンチ東側土層断面

D-7 | D-6 | D-7 | D-6 | D-7  
 12.0m | 11.0m | 10.0m

Ia ① 黒茶褐色土。  
 ② 黒褐色土中心の混合土。礫多く粘質強い。  
 ③ ⑦より黒色強い混合土。5cm大の礫が多い。  
 ④ 混合土。茶・黒・黄・赤褐色等の土が水平に交互に重なる。  
 ⑤ 白い砂状の粒が見られる。  
 ⑥ 黄褐色土と黒褐色土の混合土。  
 ⑦ やや薄い黒褐色。粘質強い。  
 ⑧ 黒褐色土。  
 ⑨ 茶褐色土・黒褐色土の混合土。礫・軽石が多い。  
 ⑩ 白茶褐色土と赤褐色土の混合土。

※4~⑥は高等女学校寄宿舎の基礎部分(第61図)。

5 トレンチ東側土層断面

D-6 | D-7 | D-6 | D-7  
 13.0m | 12.0m | 11.0m | 10.0m

Ia ① 黒茶褐色土。  
 ② 黒褐色土中心の混合土。礫多く粘質強い。  
 ③ ⑦より黒色強い混合土。5cm大の礫が多い。  
 ④ 混合土。茶・黒・黄・赤褐色等の土が水平に交互に重なる。  
 ⑤ 白い砂状の粒が見られる。  
 ⑥ 黄褐色土と黒褐色土の混合土。  
 ⑦ やや薄い黒褐色。粘質強い。  
 ⑧ 黒褐色土。  
 ⑨ 茶褐色土・黒褐色土の混合土。礫・軽石が多い。  
 ⑩ 白茶褐色土と赤褐色土の混合土。

※4~⑥は高等女学校寄宿舎の基礎部分(第61図)。

6 トレンチ東側土層断面

D-2 | D-3  
 13.0m | 12.0m | 11.0m | 10.0m

Ia ① 黒茶褐色土。  
 ② 黒褐色土中心の混合土。礫多く粘質強い。  
 ③ ⑦より黒色強い混合土。5cm大の礫が多い。  
 ④ 混合土。茶・黒・黄・赤褐色等の土が水平に交互に重なる。  
 ⑤ 白い砂状の粒が見られる。  
 ⑥ 黄褐色土と黒褐色土の混合土。  
 ⑦ やや薄い黒褐色。粘質強い。  
 ⑧ 黒褐色土。  
 ⑨ 茶褐色土・黒褐色土の混合土。礫・軽石が多い。  
 ⑩ 白茶褐色土と赤褐色土の混合土。

※4~⑥は高等女学校寄宿舎の基礎部分(第61図)。

7 トレンチ北側土層断面

D-2 | D-3  
 12.0m | 11.0m | 10.0m

Ia グランド造成土。  
 Ib 現代のカ克蘭土。  
 III 緑褐色土。  
 V 茶褐色土。  
 VI 茶色土と薄い緑褐色土の混合土。  
 ST1 黒褐色土主体で、黄褐色土を少量含む。  
 ST3 同上。

※4~⑥は高等女学校寄宿舎の基礎部分(第61図)。

## 第4節 調査の成果

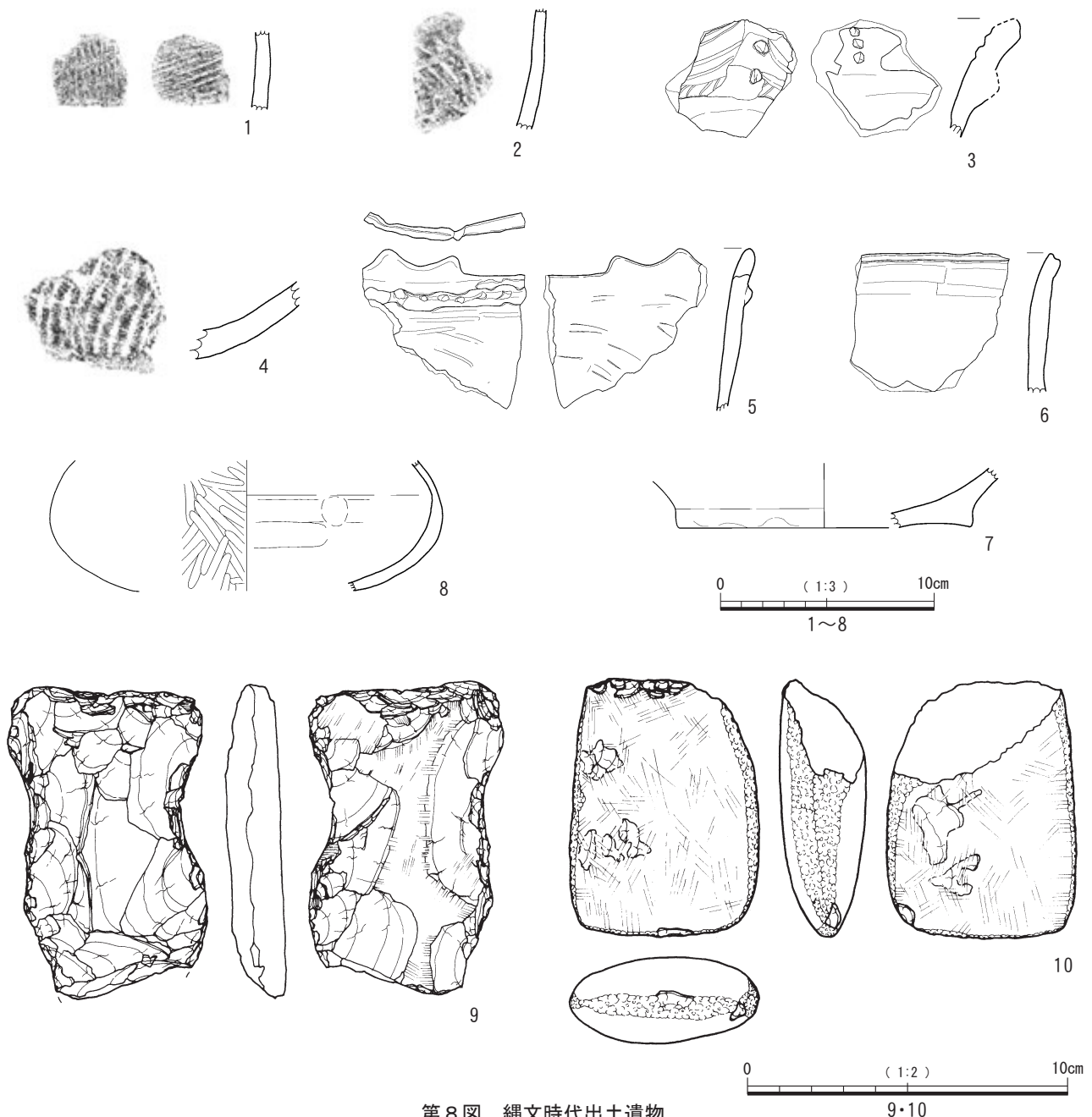
### 1 縄文時代の調査

#### (1) 調査の概要

出土した遺物は、前～後期の土器は少なく、晩期のものが80点程度である。包含層については妻山元遺跡との比較から、Ⅶ層が縄文時代後晩期の包含層と想定されるが、Ⅵ層での検出が一部みられたため、Ⅵ層が包含層の可能性がある。遺物の多くはⅡ・Ⅲ層など造成土中に入っており、中世の溝状遺構など、深い遺構の構築時に掘り上げられたと推定される。調査深度の関係上、Ⅵ層上面付近までの調査にとどめたこともあり、遺構は検出されていない。

#### (2) 遺物 (第8図)

出土した遺物のうち、土器8点、石器2点を図化した。1は内外面に、2は外面に貝殻条痕がみられ、1は早期、2は前期の土器と考えられる。3は厚みがある口縁部で、後期の市来式である。4～8は晩期の土器で、4は鉢、5～7は深鉢、8は浅鉢である。4は外面に組織痕が施文されており、5は口縁上部にリボン状の突起が付く。6はほぼ垂直に立ち上がる口縁部、7は胴部との間に段が付く底部で、二次焼成を受けている。8は胴部で、灰色を呈す。9は刃部を欠いた打製石斧である。10は基部を欠いた磨製石斧で、丁寧に研磨されている。



第8図 縄文時代出土遺物

## 2 弥生・古墳時代の調査

### (1) 調査の概要 (第9図)

遺物が2.5万点以上出土しており、弥生時代後期から古墳時代前期のものが主体である。V層からVI層上面が包含層と考えられ、C-2・3区及びB-5・6区付近のV層の残存状況が良い箇所では、潰れた状態の甕や壺が多く出土した。なお、古代・中世の溝状遺構内やII層内にはこの時代の遺物が多量に含まれている。また、B・C-2・3区の大型土坑状攪乱部は、周囲から崩れ落ちたIV・V層土が大量に入り込んでおり、その中に多くの弥生・古墳土器が入っていたため、攪乱を受ける前はかなり良好に残存していたことが窺える。また、確認調査における2トレンチ内では、現代の攪乱を受けた部分の下から、古墳時代の大型の甕が出土している。

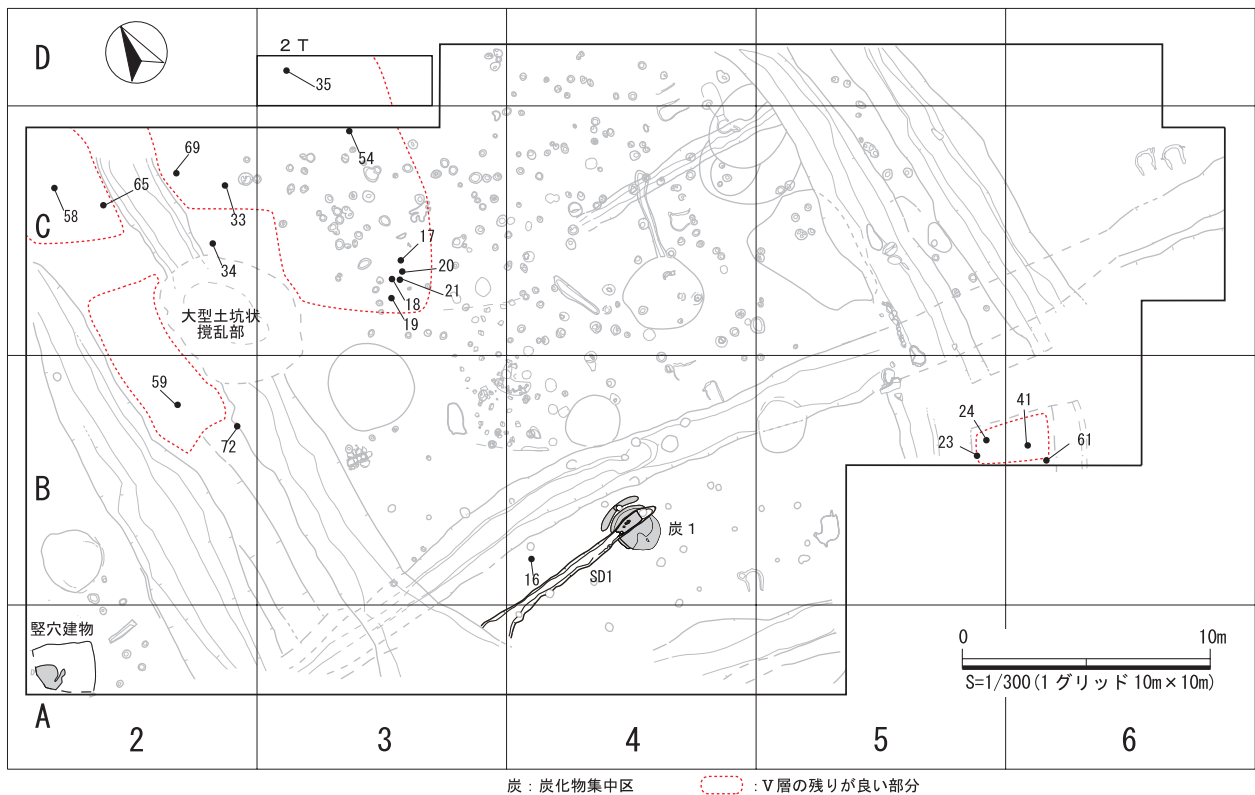
遺構は竪穴建物が1基、円形の炭化物集中区が1箇所、溝状遺構が1条検出された。

### (2) 遺構

#### 竪穴建物 (第10図)

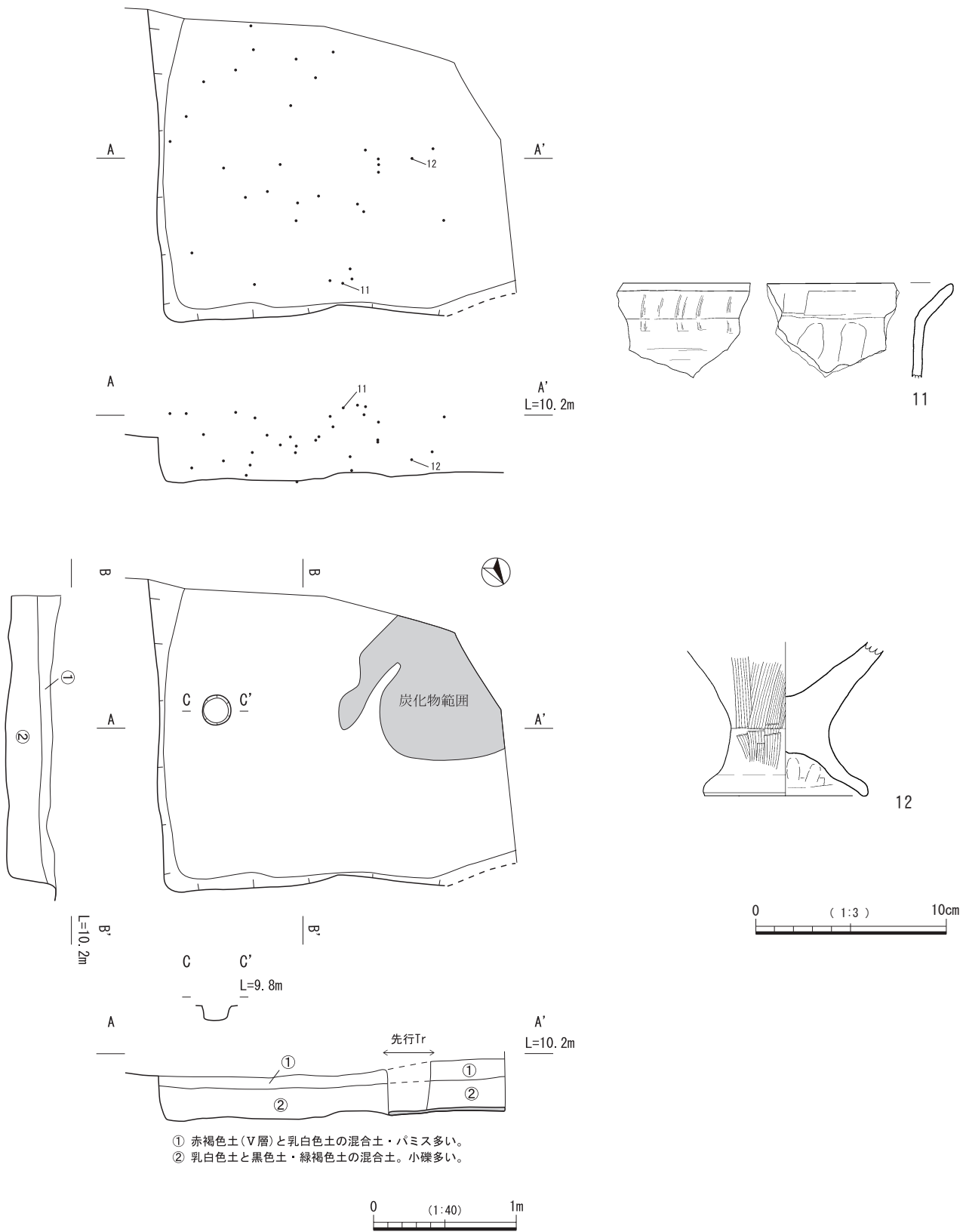
A-2区の調査区南西境において、III層土除去後のV・VI層土上面で検出された。西側は調査区外のため全体の規模は不明であるが、検出部分は長軸約2.2m、短軸約2mである。平面は方形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、ピットは1基のみ検出されており、埋土は埋土断面図中の②と同じである。炭化物は床面西側に1m四方以上の広い範囲に広がっており、AMS年代測定2σ暦年代範囲では49calAD-129calAD(90.1%)・28calAD-40calAD(5.3%)の結果が得られた。埋土内の遺物は、古墳時代前期頃のものが5点、両時代の区別が困難なものが25点あり、床面に近いものはすべて胴片で、弥生・古墳時代の判別が困難なものであった。よってここでは年代測定の結果を考慮し、弥生時代中～後期頃の遺構と考える。

遺物は2点を図化した。11は小型の甕の口縁部で、斜方向に外反している。12は甕の底部で、縦方向へ引いた刷毛目が明瞭に残り、内側は黒色である。



第9図 弥生・古墳時代遺構配置図



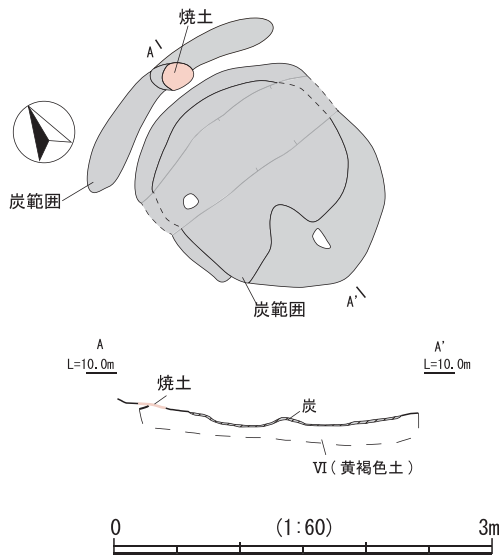


- ① 赤褐色土(V層)と乳白色土の混合土・バミス多い。
- ② 乳白色土と黒色土・緑褐色土の混合土。小礫多い。

第10図 竪穴建物及び出土遺物

B-4区 炭化物集中区1 (第11図)

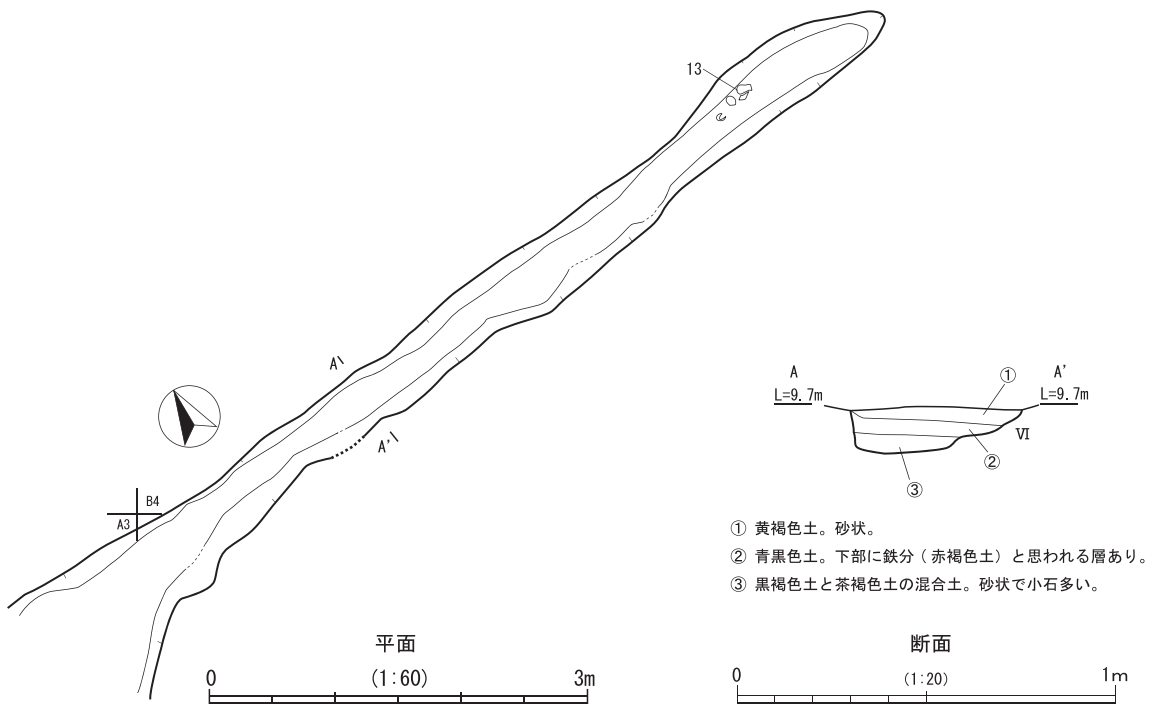
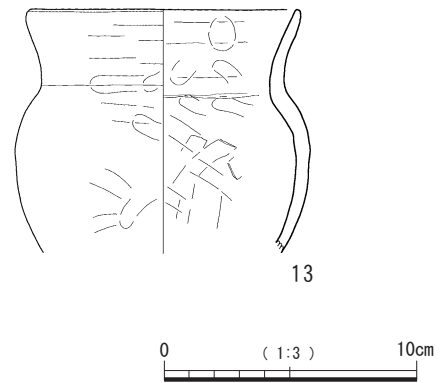
B-4区のV層とVI層の境目付近において検出された。円形部分とやや高い弧状の部分に分かれる。AMS年代測定2σ暦年代範囲において49calAD-139calAD(93.0%)・28calAD-40calAD(1.3%)の結果が得られており、竪穴建物と同じく弥生時代中～後期頃と考えられる。後世の削平を受け、床面部分のみ残存した遺構の可能性はある。



溝状遺構1号 (第11図)

B-4区において、III層除去後のV層上面付近において検出された。検出できた長さは8.4m、平均幅約40cm、最大幅150cmである。床面の高さより、流入した水は東から西に流れる。東側は炭化物集中区と重なっており、検出面からこれより新しい遺構と判断される。床面の遺物は3点出土し、古墳時代前期のものであることから、この時期の遺構と判断される。

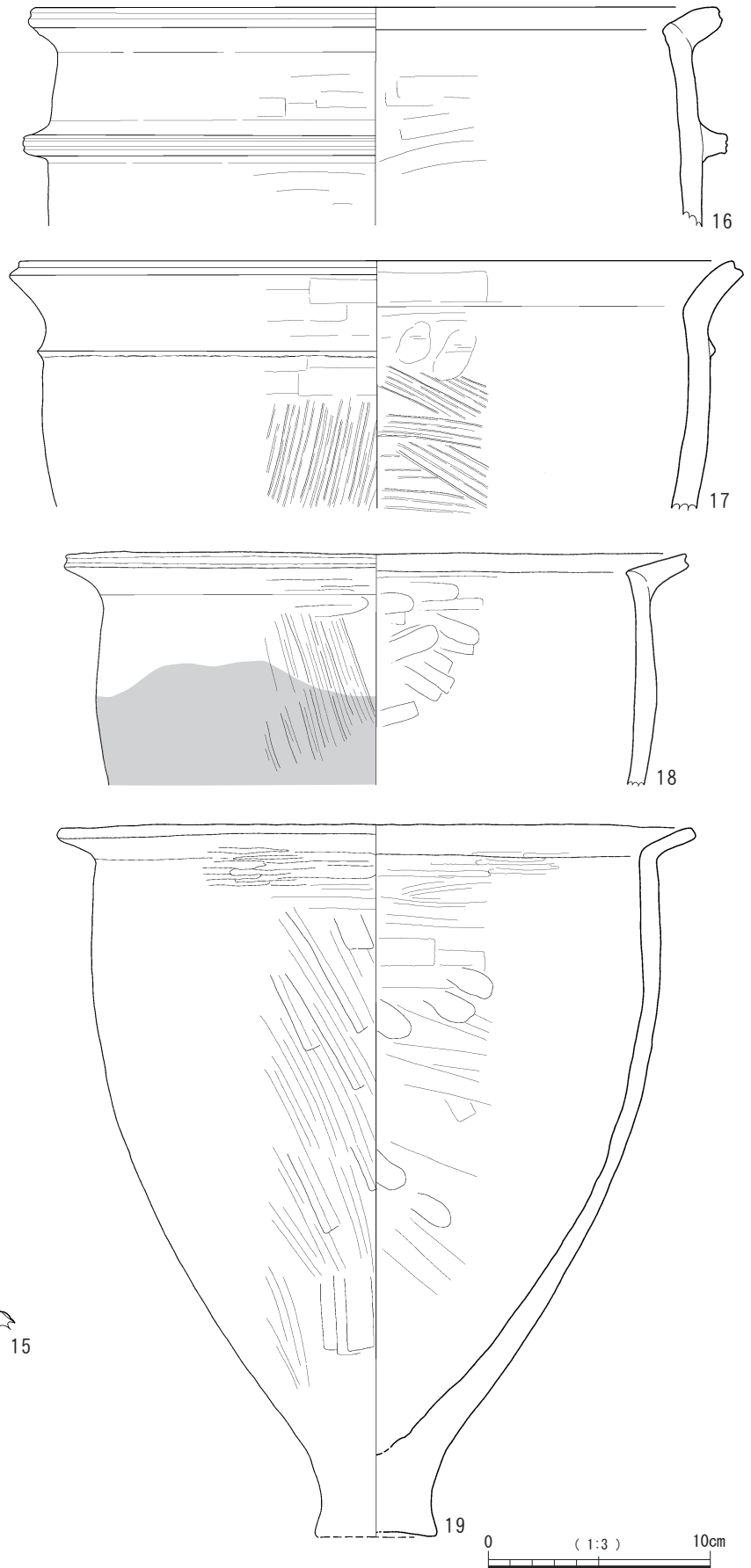
遺物は1点を図化した。13は口縁幅11cm程度の小型の甕で、口縁はゆるく外反し、胴部は膨らみを持つ。



第11図 炭化物集中区1・溝状遺構1号及び出土遺物

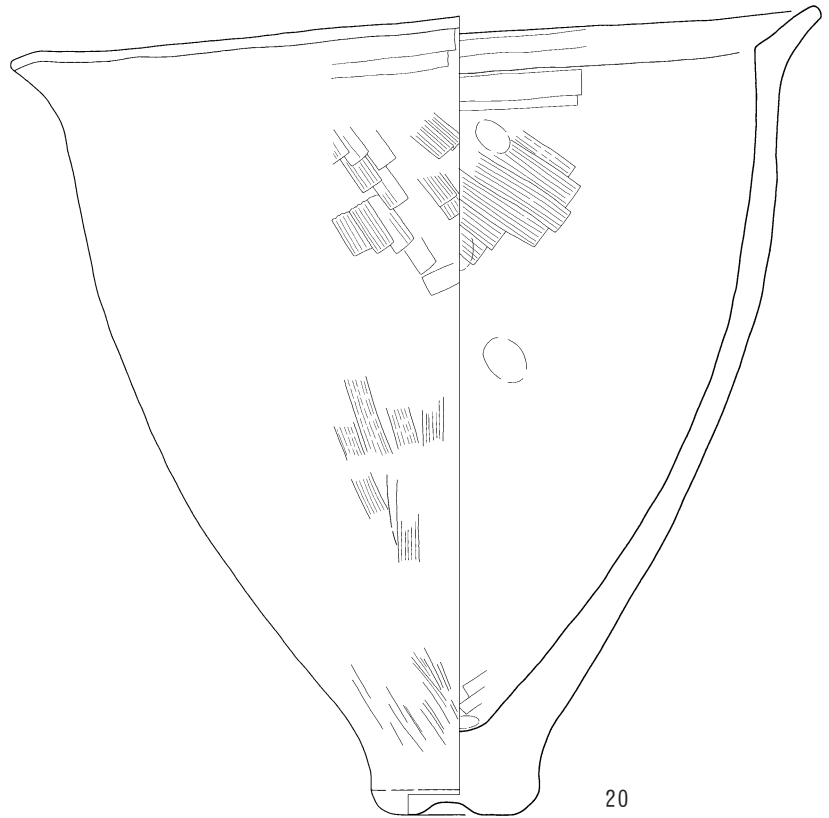
(3) 遺物 (第12～20図)

出土した遺物のうち、66点を図化した。14～16は弥生中期の山ノ口式土器であり、14は口縁部が外れた甕で、2条の三角突帯が残る。15は壺の肩部、残存部に突帯が7条残る。16は甕であり、突帯と口唇部は中央がやや凹んだM字状の断面である。17～25は弥生時代後期と考えられる甕である。17～21はC-3区のV層内において、近い箇所から出土している。17・18は断面M字状の口唇部である。17は幅6mm程度の三角突帯を1条持つ。18・19は胴部を刷毛目で仕上げた後、口縁部を貼り付け、横ナデで仕上げている。19・20は底面中央に凹みがみられ、19はほぼ直角に外反し、20・21は外反は緩やかだが、口縁部内面の屈曲部に明瞭な稜が付く。



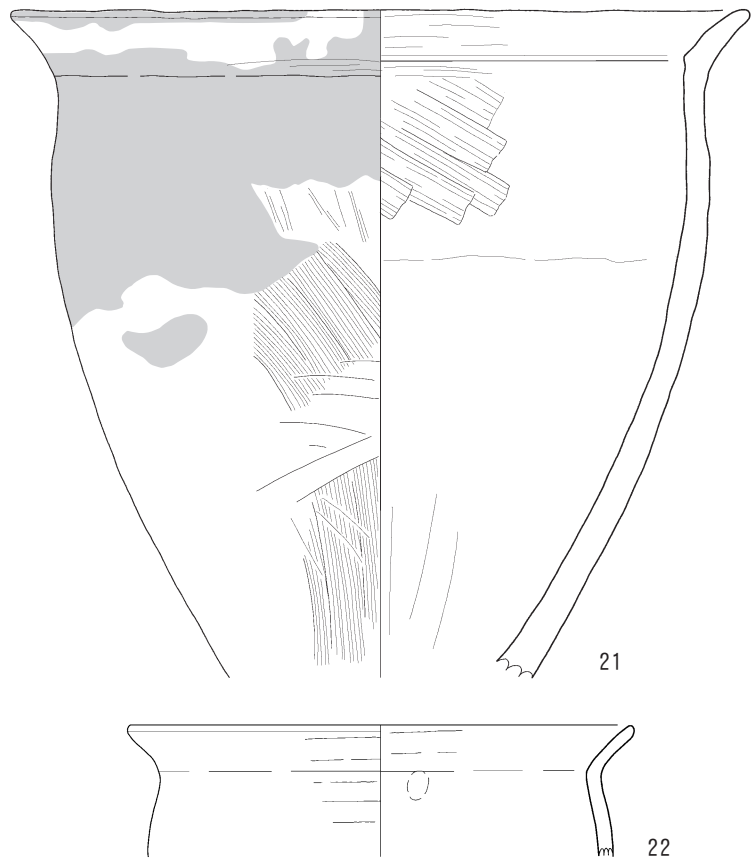
第12図 弥生時代出土遺物(甕・壺)





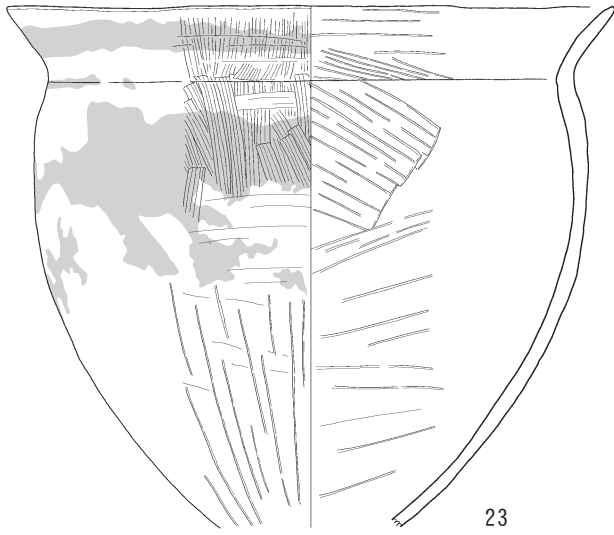
22は短い口縁部を持ち、横ナデの痕跡が残る。23は内外面に刷毛目の痕跡が明瞭で、他と比較し器形がやや薄い。なお、21・23は胴部上面から口縁部の外面に厚い炭化物が残存しており、煮炊き等に使用された可能性が高い。24は口縁部まで縦方向に刷毛目で調整後、口縁部境目に横ナデを施している。25は他のものと異なり、内面を削って仕上げている。

26～28は東九州系の特徴を持つ壺の一部である。26・27は櫛描波状文が描かれた二重口縁壺の口縁部である。26は5本、27は6本の櫛目が確認できる。28は壺の肩部で、櫛状の工具で上部は横方向、中～下部は横方向に反転させながら波状に施文している。29・30は免田式と思われる壺の頸部で、平行沈線文が施文されている。30は沈線文を施した後、上・中・下部に刻目を施している。



0 (1:3) 10cm

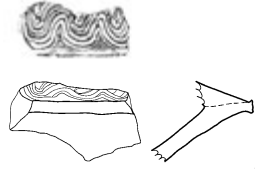
第13図 弥生時代出土遺物(甕)



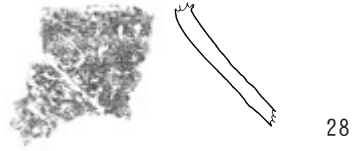
23



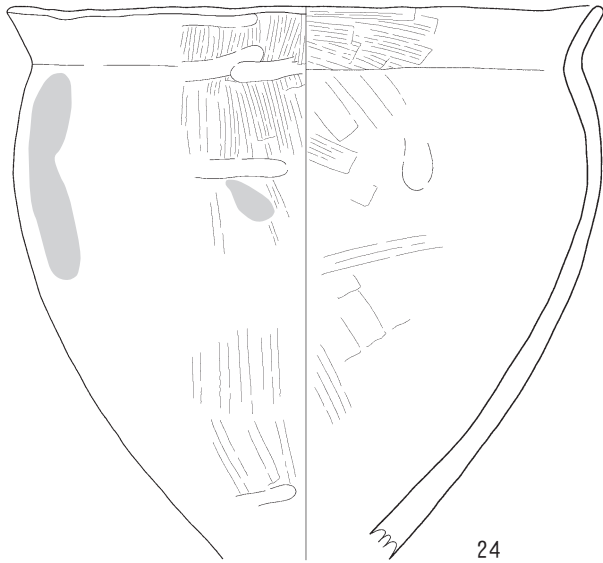
26



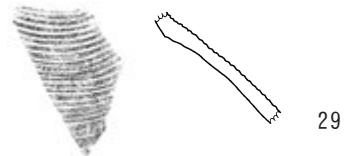
27



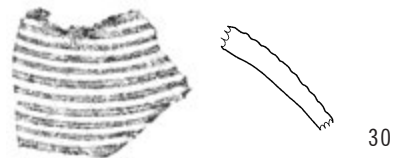
28



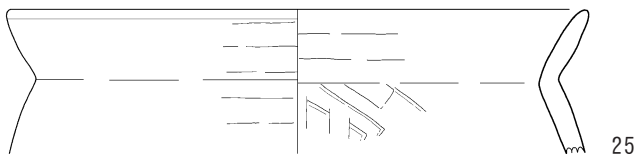
24



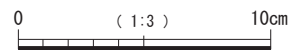
29



30



25



第14図 弥生時代出土遺物(甕・壺)

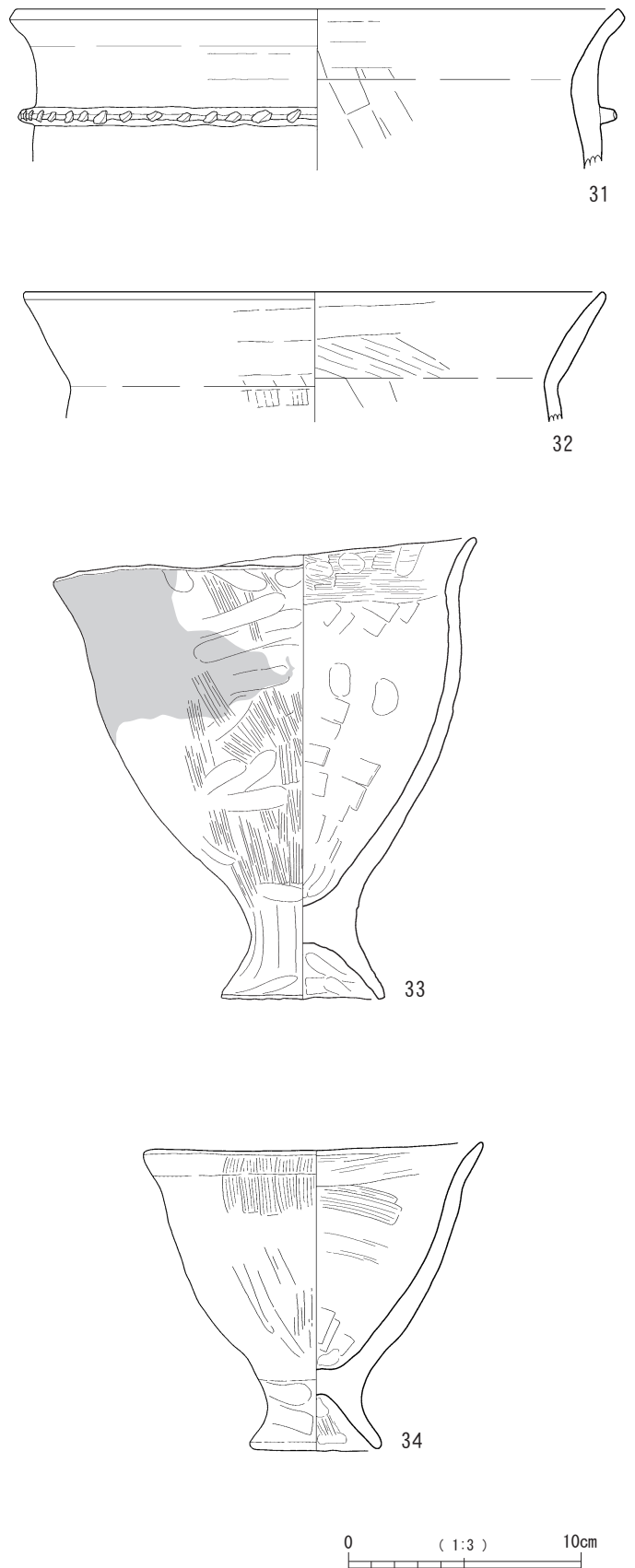
31～35は古墳時代初頭から前期段階の甕である。31は精選された胎土を用いた浅黄橙色の口縁部で、1条の突帯に約1cm間隔で、布で巻いた工具で斜めに刻み目を入れている。32は他と比較し長い口縁部を持つ。33・34はやや歪んだ器形の小型甕で、口縁部の屈曲は弱く、内外面に刷毛目がみられる。33は外面に煤状の炭化物が残る。35は器高が55cmの大甕で、東原式段階のものと考えられる。確認調査時のトレンチ内で出土し、横転し押しつぶされた状態で出土した。口縁部の屈曲は緩やかで、胴部との境に断面三角形の突帯を1条持ち、底面にわずかに凹みが見られる。36は幅約25cmの蓋で、身部は厚く、上面と口縁部内面に薄い煤状の痕跡が残る。

37～40は弥生時代後期頃の時期と考えられる壺である。37は突帯の上部に3本の緩い曲線を描く線刻がみられる。38は鶏卵状の体部で、緩い尖底をなす。39は頸部の内面に口縁部貼り付けの際の指押さえの後が明瞭に残る。40は頸部付近で、色調や胎土から、在地生産品ではない可能性がある。

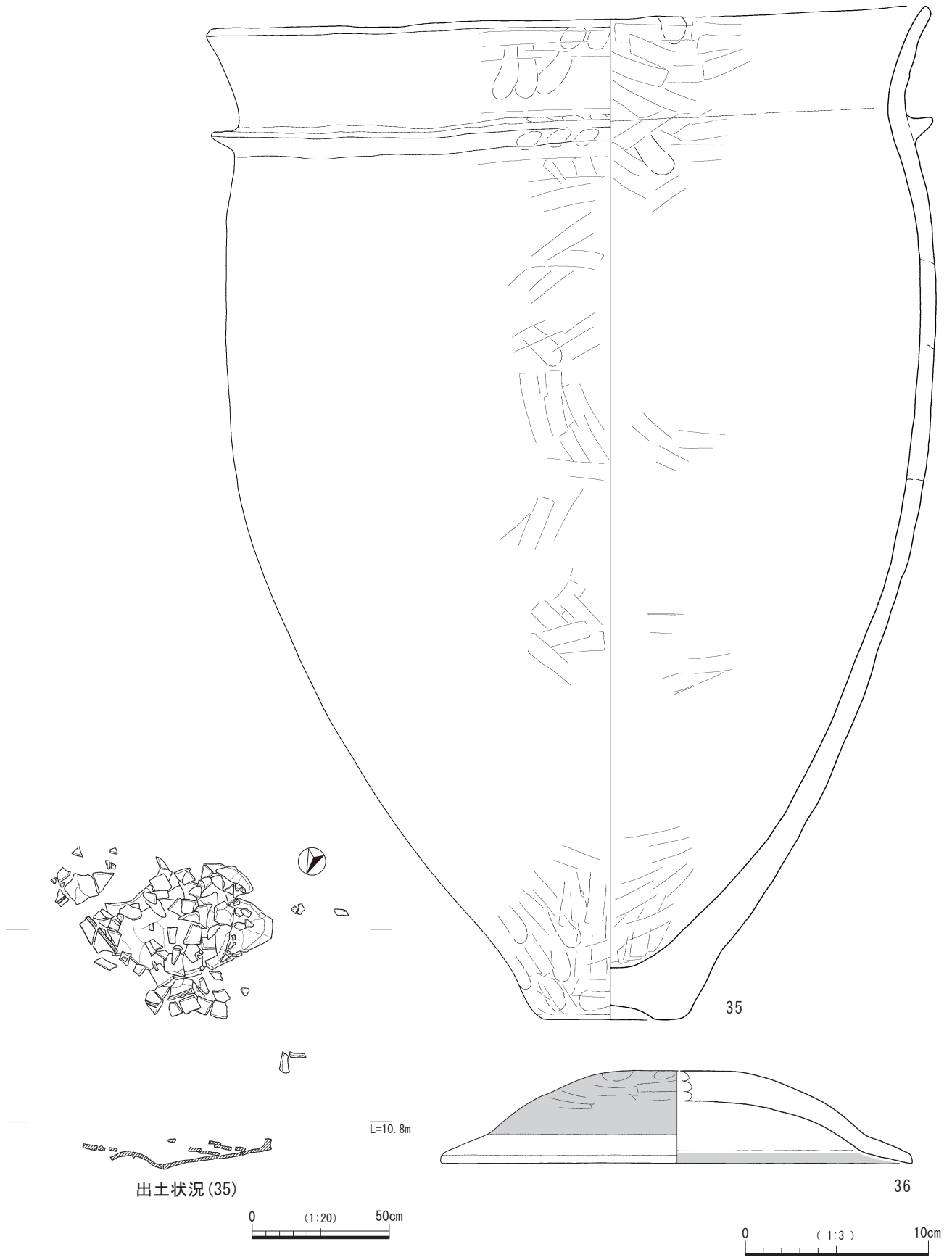
41～43は古墳時代前期頃と考えられる壺である。41は焼成が悪いためか摩耗が激しい。胴部の最大張り出し部分に1条の突帯があり、刻目が施されているが、布目は不明瞭である。42は小型壺で、半身を欠損している。1条の布目が残る刻目突帯の上部に、底部方向へ向け幅8mmの穿孔がなされている。突帯の貼付は弱く、欠損部が目立つ。43は大型壺で、赤褐色で器形は厚く重い。C-3区の大型土坑状攪乱部内で、V層土に埋もれた状態で検出されたことから、土層の崩落により攪乱部に入り込んだ可能性が高い。

44～49は外面に線刻が入った土器で、調整や色調から、古墳時代前期頃の壺か甕と思われる。44は巴型に似た文様が描かれている。45は弧状の沈線を横方向に4本引いており、動物の尾状のものを描いた可能性がある。46は残存部にV字型の沈線が残る。47は縦方向に波形に屈曲させながら8本の線が引かれている。48は底面に×状の印が描かれる。49は小型の壺の胴部と思われ、3本の並行する沈線文を横方向に引き、上下の線間に縦の文様を入れている。

50～53は高坏である。50は杯部で、口縁に向け屈曲して外反する付け根部分まで残存する。外面は粗い刷毛状の工具で横方向に施文した後、縦方向にやり直している。51は坏部と脚部が丁寧に接合され、外面を刷毛目で仕上げている。52は脚部で、半分程度残る2本の透かしが確認できる。透かしは、上から見てほぼ90度の位置にあり、高さは5mm程度異なる。53は口径約27cmと大型である。丁寧に磨いて仕上げられており、残存部から、52と同じように、脚部の4カ所に透かしが開けられていると考えられる。なお、直線状に向かい合う透かしは同じ高さで入れられており、対角の透かしはやや高さが異なる。

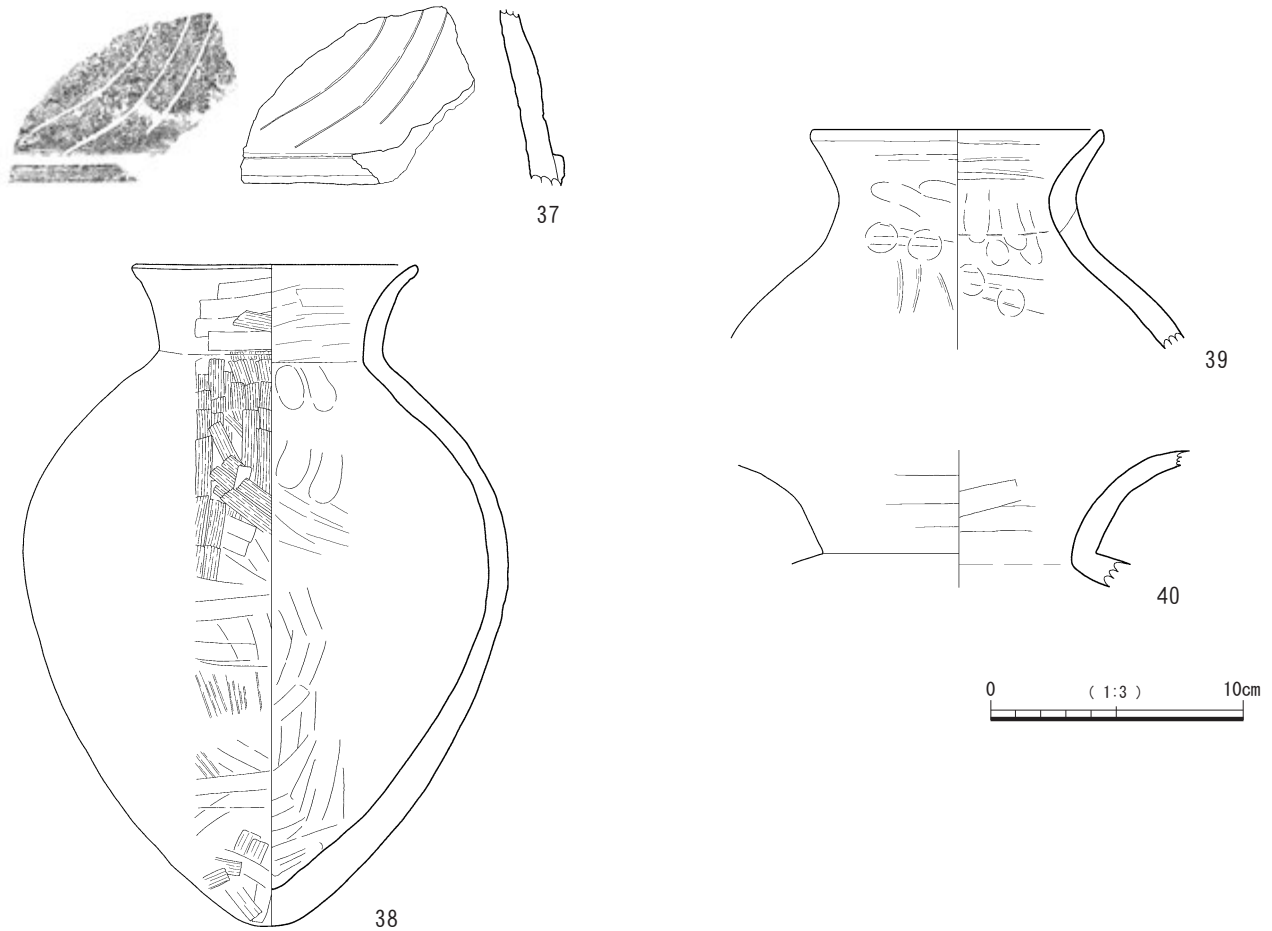


第15図 古墳時代出土遺物(甕)



第16図 古墳時代出土遺物(甕・蓋)





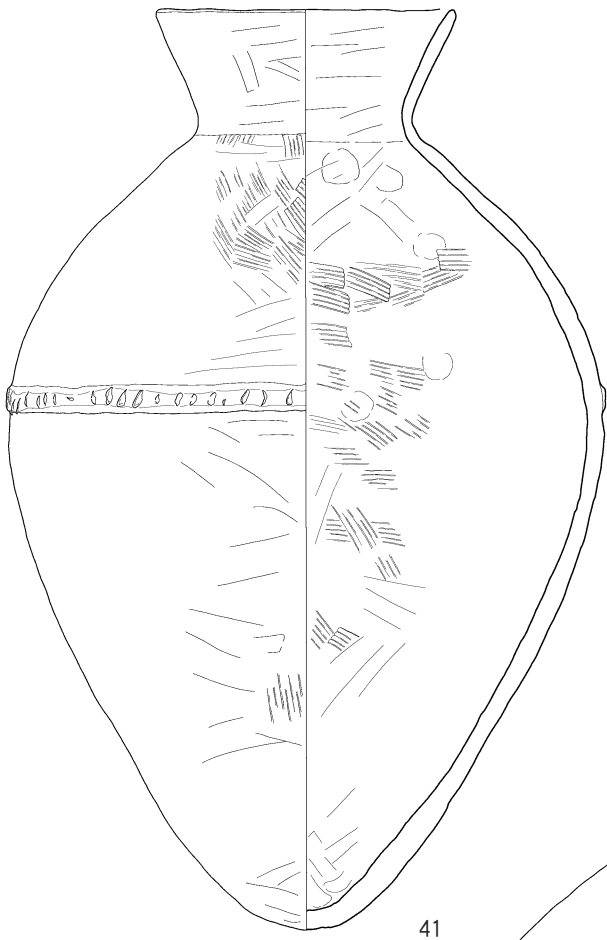
第17図 弥生時代出土遺物(壺)

54～60は鉢である。54は小型の脚付鉢で、脚端部が外反する。脚部に赤色部分があり、顔料の一部と推定される。55・56は約2cm程度の小型の底部を持つ鉢で、胴部は大きく開く。55は胎土に砂状の礫を多く混入している。56は底部が7mm程度とやや高く造られており、内部に赤色部分が残る。57・58は埴型で、57は口径約13cmに対し、底径が2.4cmと下部に向け狭まる。58は底径4.7cmと広く重厚な作りである。59は裏返った状態で検出され、広い底面から胴部がほぼ直角に立ち上がり、約1cmと極めて厚い作りである。60は底径約17cmの大型鉢の底部で、腰部から大きく開く器形である。

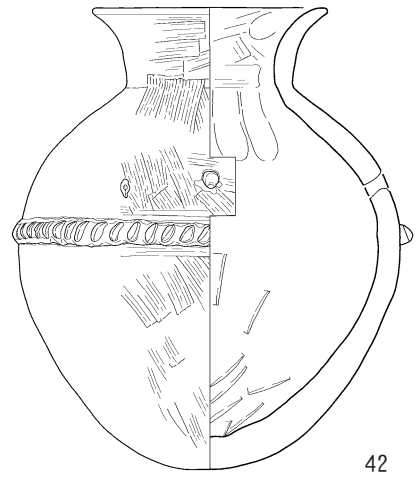
61～63は小型壺である。61は口縁部以外残存しており、胴部はそろばん玉の形状で、胴部最大径の箇所に斜方向に3mm程度の刻みを2mm間隔で入れている。62は胴部のみで、内側から指で押さえて張り出し部を作っている。63は精選された胎土を使用し、極めて薄手の作りである。直口する口縁部を持っており、古墳時代前半の搬入品と考えられる。

64～75はミニチュア土器である。64～66は底部丸形の鉢型で、器高が口径と同程度か低いものである。いずれも手捏ねで作られている。67は中央部が凹んだ1.5cm程度の小さな底部を持つもので、鉢状の形態であった可能性がある。68・69は器高が口径より高いもので、68は口縁部が内湾する。69は口縁部を指でつまんでまっすぐに立ち上げている。70は厚みがあるやや丸底の底部を持ち、指で上方向へ撫でて仕上げている。71・72は脚台付の甕で、71は器高が6.2cmと低く、口縁部が大きく開くもので、内面を丁寧に仕上げている。72は器高9.6cmで口縁部が強く内湾するものである。73・74は高坏である。73は脚部内面全てに黒斑がみられ、杯中央に穴を開け、粘土棒で脚部と接合した跡が残る。74は脚部のみで、やや内湾する漏斗を伏せた形状である。75は壺か甕の突帯部分で、刻目まで表現している。

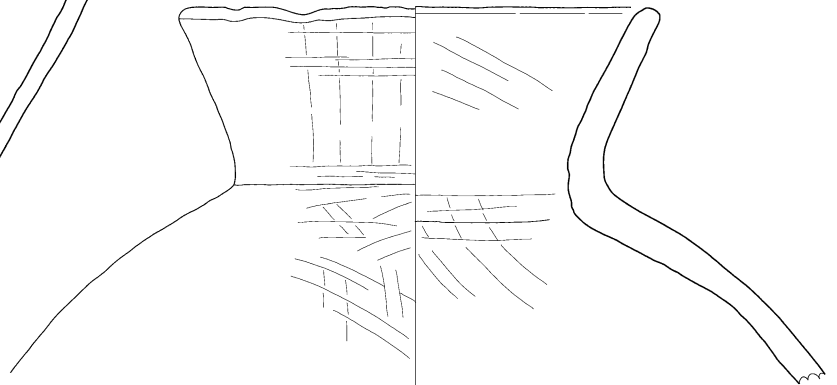
76は底部を加工して作られたメンコである。77・78は匙型土製品である。77は皿部で、端部は全て欠損している。79は石包丁で、長方形の形状で厚さ2mm程度である。全体が磨かれ、径4mmの穿孔が3カ所にみられる。



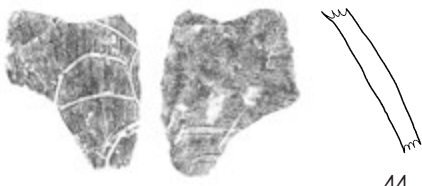
41



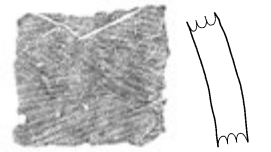
42



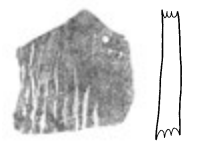
43



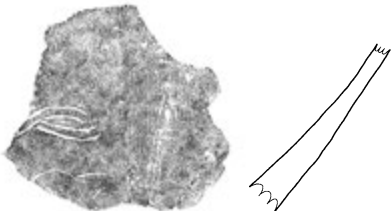
44



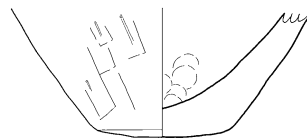
46



47



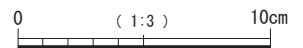
45



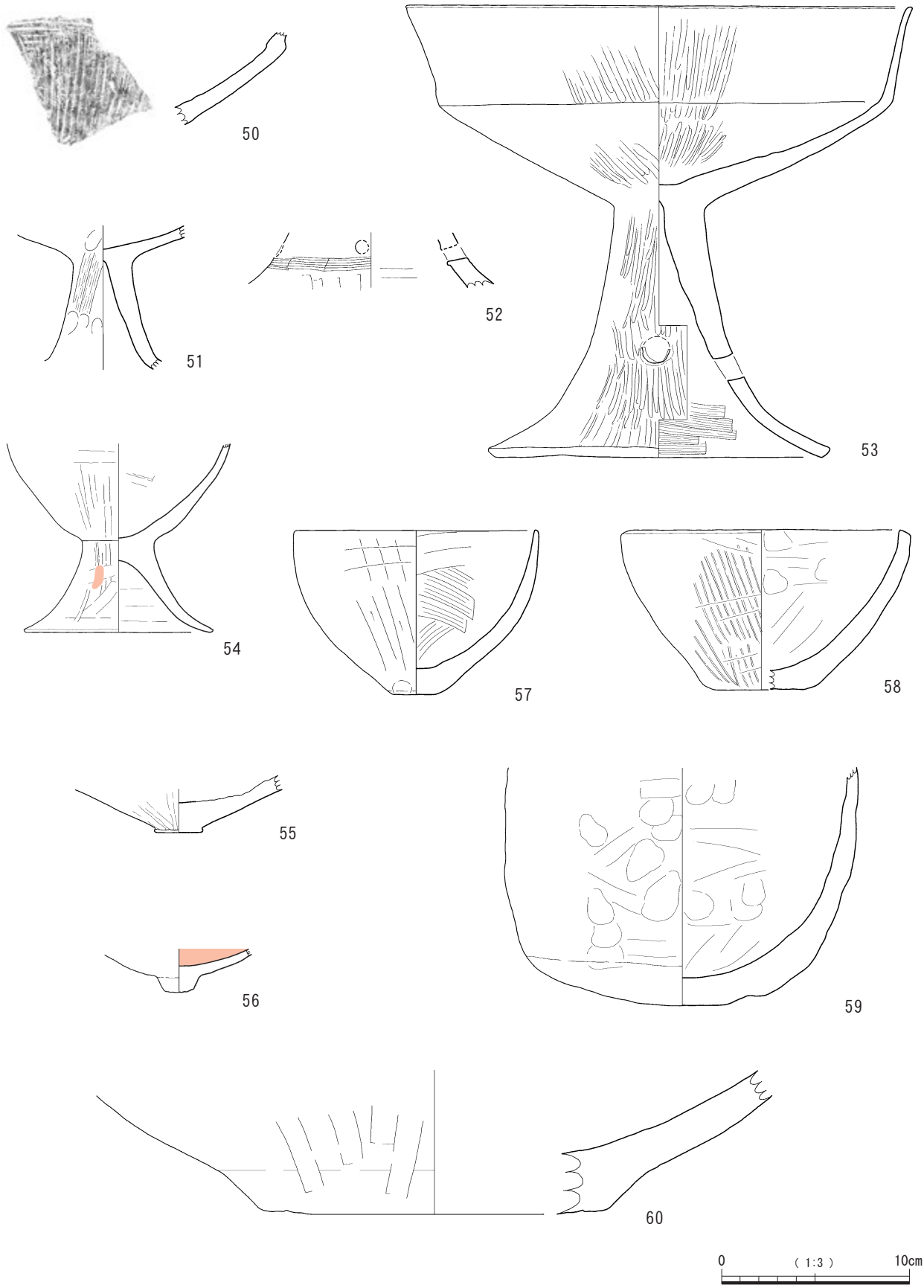
48



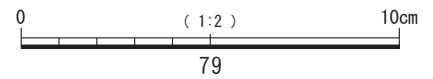
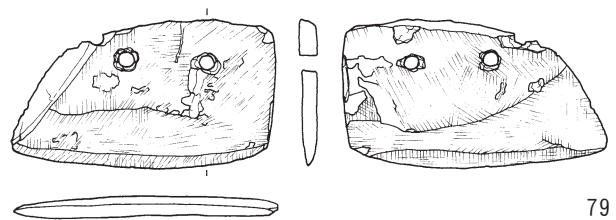
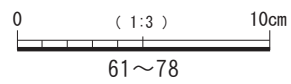
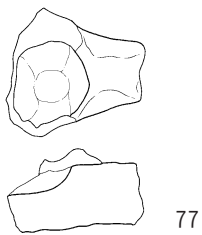
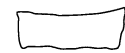
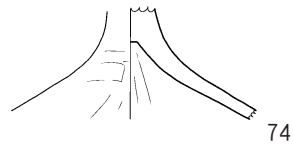
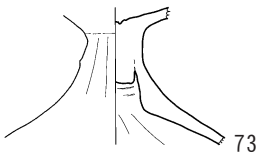
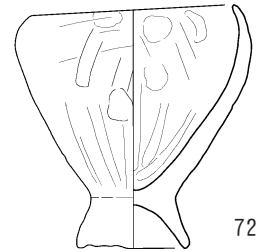
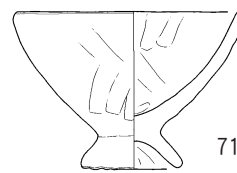
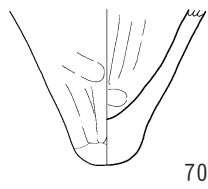
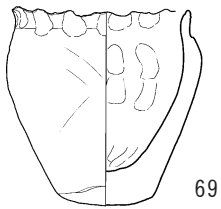
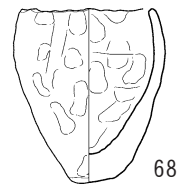
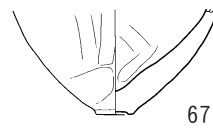
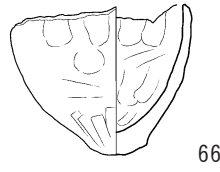
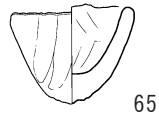
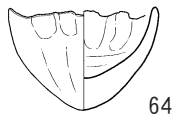
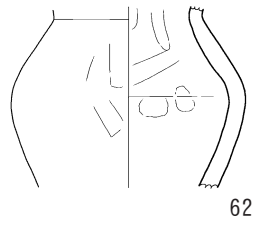
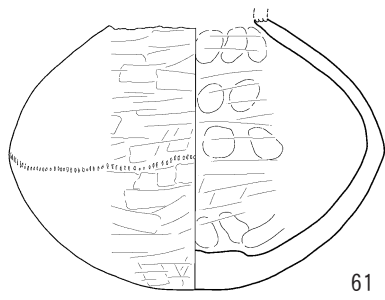
49



第18図 弥生・古墳時代出土遺物(壺・線刻土器)



第19図 古墳時代出土遺物(高坏・鉢)



第20図 古墳時代出土遺物(ミニチュア土器他)



### 3 古代の調査

#### (1) 調査の概要

遺構は、溝状遺構が2条検出された。中世等に大きく削平を受けているが、土師器や須恵器・布目瓦を中心とし、遺物量は多い。

須恵器について、甕を中心に多くの器種が出土しており、産地は中岳古窯産の可能性が高いものが2点あり、他は不明である。布目瓦は出土量が多く、近隣の大隅国分寺跡の報告書を参考にし分類を行った(第3表)。平瓦はタタキ目によって分類し、それぞれ最も残りが良いものを掲載した。なお闘斗瓦については、左右両端まで残り、確実に該当する1点を除き、全て平瓦に分類した。また、糸切り痕が残るもの、タタキ目が他のものとは逆に凹部にくるもの、丸瓦で最も残存状態の良いものも掲載した。軒瓦は出土したものは全て掲載した。

#### (2) 遺構

##### 溝状遺構2号(第22図)

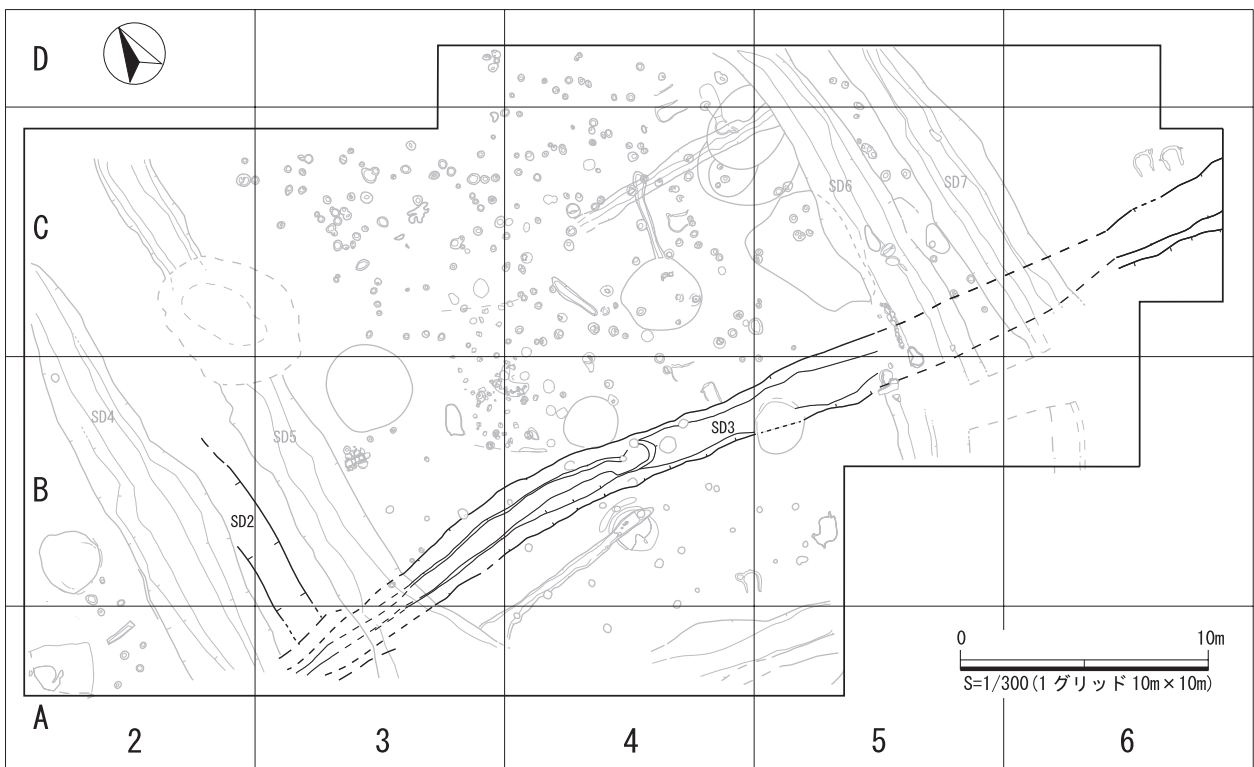
A・B・2・3区において、SD4・5間の土塁状遺構上で検出された。南北方向に向き、北側は上面に削平を受け残存していない。幅は約1.5mで、最も深い部分で約50cmである。溝状遺構3号と接する部分は確認トレンチが入ったため、切り合い関係は不明である。埋土はほとんどがIV層土で、古墳時代・古代の遺物が多い。

##### 溝状遺構3号(第22図)

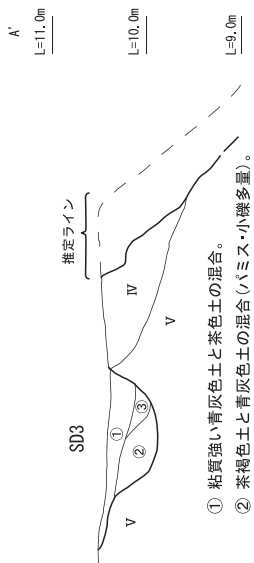
B-4区において、III層を除去した後のVI層上面で検出

された。調査区全体をほぼ東西方向に切るように広がり、検出分の長さは約40mである。溝内には古墳時代と古代を中心に遺物が大量に入っていた。中世の遺物は含まれておらず、9c後半～10c頃の土師器や緑釉陶器が床面にみられたため、この頃に作られた遺構と考えられる。溝の底面は、C-6区付近は高く、そこから西側は緩やかに下るため、流水は東から西方向へ流れる。中世の遺構である溝状遺構4・5号及び6・7号に切られており、それらの溝に挟まれた部分はIV層付近まで残存している。なお、溝状遺構5号及び6号に挟まれた中央部分は、V層下～VI層まで掘削を受けている。

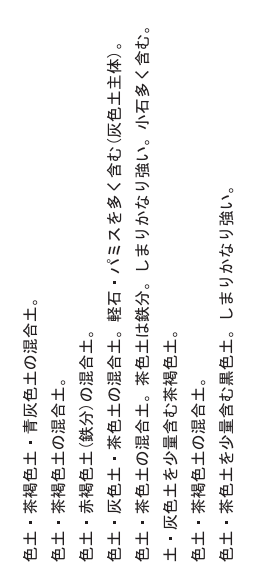
断面をみると、A断面付近はより高かったとみられ、上面に削平を受けている。溝の南側に土塁状に高まる部分があり、その南側は攪乱が大きく、溝があったかは不明である。B断面付近は中世において土塁状に残された部分であるため、残存状態が良く、本来の掘り込み面に近いと考えられるが、3.5m程度とかなり広いため、何らかの改変を受けた可能性がある。C断面では、③など赤色の鉄分と思われる部分がみられ、何回かにわたり底に土が堆積した様子が確認できる。D断面はB断面と同じく、中世の掘削を受けなかったため残存状態が良い。D断面の埋土状態から、断面における②は、溝状遺構4・5号とその間の土塁状遺構を造成する際に埋め戻された部分、③上面は、その際に溝状遺構3号の底面であった部分と考えられる。



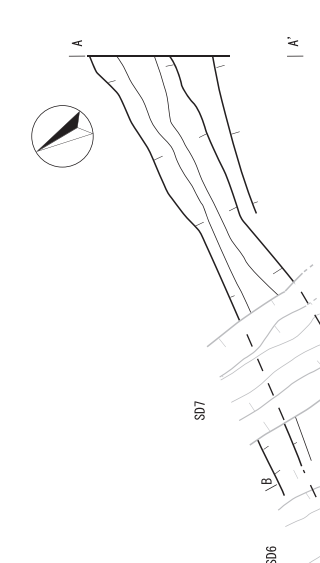
第21図 古代遺構配置図



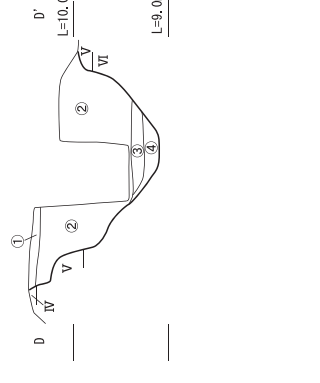
- ① 粘質強い青灰色土と茶色土の混合。
- ② 茶褐色土と青灰色土の混合(パミス・小礫多量)。
- ③ 砂を多く含む黒褐色土。



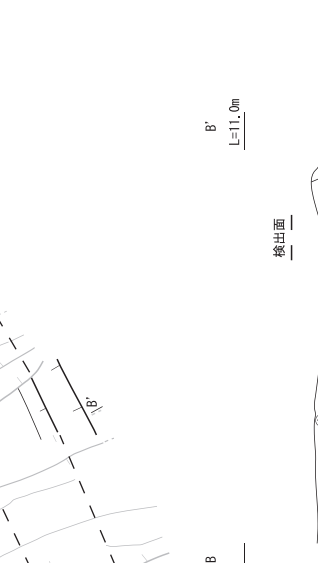
- ① 黒褐色土・茶褐色土・青灰色土の混合土。
- ② 黒褐色土・茶褐色土の混合土。
- ③ 青灰色土・赤褐色土(鉄分)の混合土。
- ④ 緑褐色土・灰色土・茶色土の混合土。軽石・パミスを多く含む(灰色土主体)。
- ⑤ 青灰色土・茶色土の混合土。茶色土は鉄分。しまりかなり強い。小石多く含む。
- ⑥ 黒色土・灰色土を少量含む茶褐色土。
- ⑦ 黒褐色土・茶褐色土の混合土。
- ⑧ 灰白色土・茶色土を少量含む黒色土。しまりかなり強い。



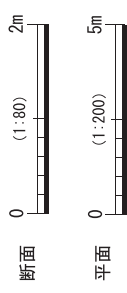
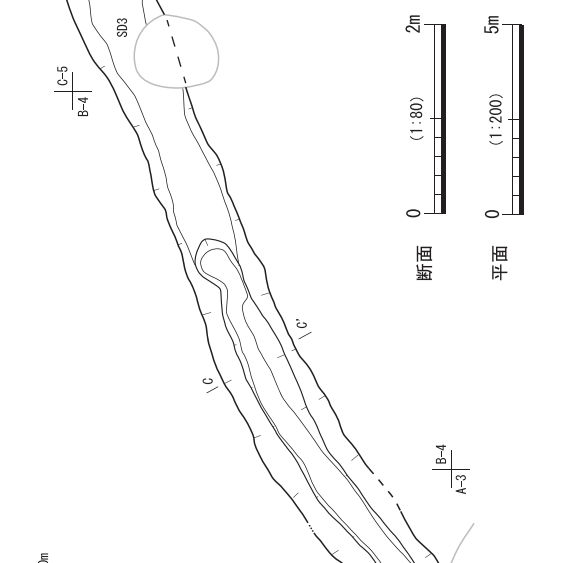
- ① 黒色土。パミス少量入る。
  - ② 黒褐色土。パミス多い。①より黒色薄い。
- ※①・②は、古墳・古代の遺物が多く、中世の遺物を少量含む。
- ③ 赤茶色土(鉄分)を多く含む灰色土。しまり強い。
  - ④ 灰色土。砂質。しまり強い。



- ① 黒色土パミス多い。
- ② 薄い黒褐色土。



- ① 黒色土。
- ② 濃い青灰色土と濃い茶色土の混合。
- ③ ②に一部こげ茶色の土を含む。
- ④ 黒褐色土・茶褐色土・濃い青灰色土の混合。



第22図 溝状遺構2・3号

### (3) 遺物

#### 土師器 (第23・24図)

80～118は土師器である。80～92は全てヘラ切りの坏であり、口縁の傾きによって分類した。80～82は口縁部へ向け逆三角形に開く器形のものである。80は器高が低く、底部に厚みがあり、外面の体部と口縁部間に段が付く。81は灰白色を呈し、搬入品の可能性がある。82は底面にヘラ切りの痕跡が明瞭に残る。83～85は口縁部がやや外反するものである。83は見込み部と底部外面が黒色である。84は溝状遺構3号の床面付近より完形で出土しており、約14cmと広い口径を持つ。85は内外面共に黄橙色の明るい色調を呈する。86～92は口縁に向けやや内湾する器形のもので、86～88は高台と胴部の境が明瞭で、胴部付近で弱く内湾する。89・90は口縁部がほぼ垂直に立ち上がる。91・92は口縁先端を強く曲げ、垂直方向に向けている。なお、84～88、92は円盤状の充実高台を持っている。

93～95は皿で、93は復元口径は約19cmと広い。94は橙色の色調で、口唇部が断面方形状となり外側に傾く。95は浅く、口縁先端が外反する。96・97は壺である。96は底径7.8cmで高台は低く、高台内全面に黒斑がみられる。97は底径が9.4cmで高台が長く、先端に向かい細くすぼまる。

98は坏か壺で、墨書が確認できるが、欠損部が多く、書かれている内容は不明である。

99～104は黒色土器A類である。99～103は壺で、いずれも体部を欠いている。99・100はやや長い高台を持つ。101～103は比較的短い高台であり、101は畳付部分が床面に平行である。104は皿、105は赤色高台を持つ壺で、いずれも遺跡内で出土数は少ない。

106～108は甕で、口縁部のみ残存している。106はほぼ直角に外反しており、内面ケズリの跡が明瞭である。107は内外面が磨かれており、光沢がある黒色を呈する。108は大きく外反し、外面に煤の痕跡がある。109は甕か甔の把手部分で、牛角状をなす。110・111は須恵器の模倣品で、110は壺の口縁部で内外面共に茶色を呈する。111は壺の底部で、精選された胎土が使用され、浅黄橙色の均一な色調である。112・113は高坏の脚部で、112は粘土紐を用い、坏部と接着した跡が残る。113は灰白色を呈している。

114・115は蓋で、114はつまみ部が外れている。115は上面の剥がれた痕跡から、直径6cm程度の大きいつまみ部であったと推定される。116は外面にタタキ目が残る土師器で、器種は不明である。タタキの凹部に赤色顔料が少量残る。117は焼塩土器の一部で、内面に布目跡が残る。118は円形で中央に穿孔があり、紡錘車と考えられる。

#### 白磁・緑釉陶器・青磁 (第24図)

119は大宰府分類の白磁碗I類に比定されるもので、小振りの上質の玉縁をもつ。

120・121は緑釉陶器で、120は灰白色の胎土に薄い緑釉がかかっており、防府・長門地域で産出された壺の一部と考えられる。121は濃緑の整った色調から、京都付近で生産された碗の口縁部と考えられる。

122～126は大宰府分類の越州窯系青磁碗I類(8世紀末～10世紀中頃)に比定されるものである。122は口縁部で、2次焼成を受けており発色が悪い。123・124は底部で、124は内面輪状に目付がみられ、高台内まで釉がかかる。125は2次焼成を受けており、外面の釉の多くが剥がれている。底面付近は無釉で赤褐色を呈する。126は底部内外面に目跡が残る。

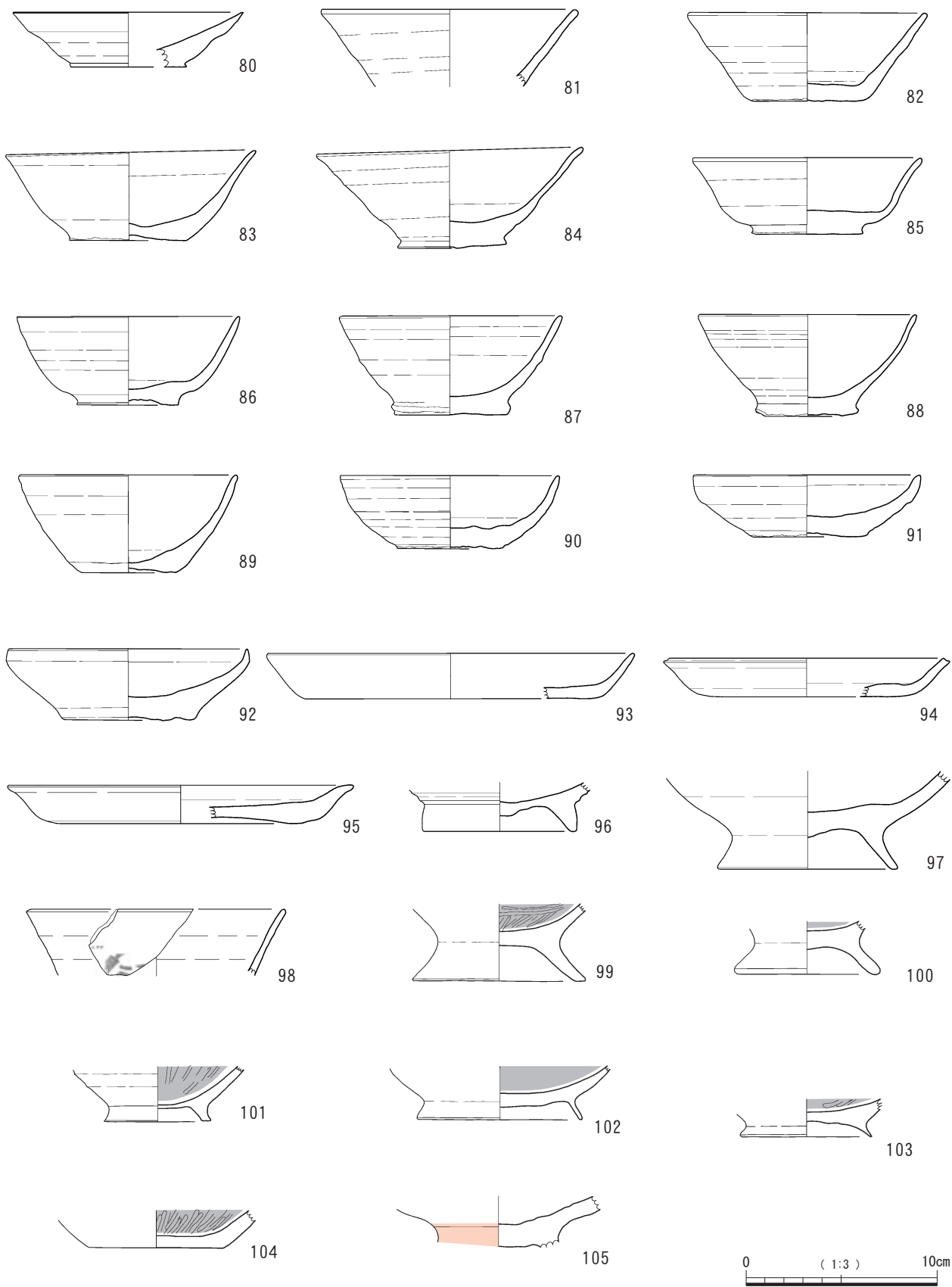
#### 須恵器 (第25・26図)

127～145は須恵器である。127～128は坏で、127は口縁部がほぼ直線状に立ち上がる。128は貼り付けの弱い脚台を持ち、口縁部はやや外反する。129・130は皿で、130は底部端が面取りされている。131・132は蓋で、131はつまみ部分が外れている。132は端部が下方方向に屈曲し、断面は方形状を呈する。133～138は壺である。133～135は口縁部で、133は端部がほぼ直角に外反する。134・135は二重口縁を持ち、134は口縁部は外反し、屈曲部外面に突帯を施す。135は外面にタタキの痕跡が残る。136は胴部に耳が付き、外面に格子目タタキが残る。137・138は底部で、137は厚めの脚台を持ち、138は自然釉がかかる。

139～141は甕の口縁部で、139は焼成が悪く、口縁部貼り付けの際に頸部内側を押さえた痕が残る。140は緩い屈曲部を持ち、二重口縁を成している。141は外面に並行タタキ、内面に円形で、平行に刻みをいれた当て具を使用している。142～145は甕の胴部で、142・143は外面が平行タタキ、144・145は格子目タタキである。

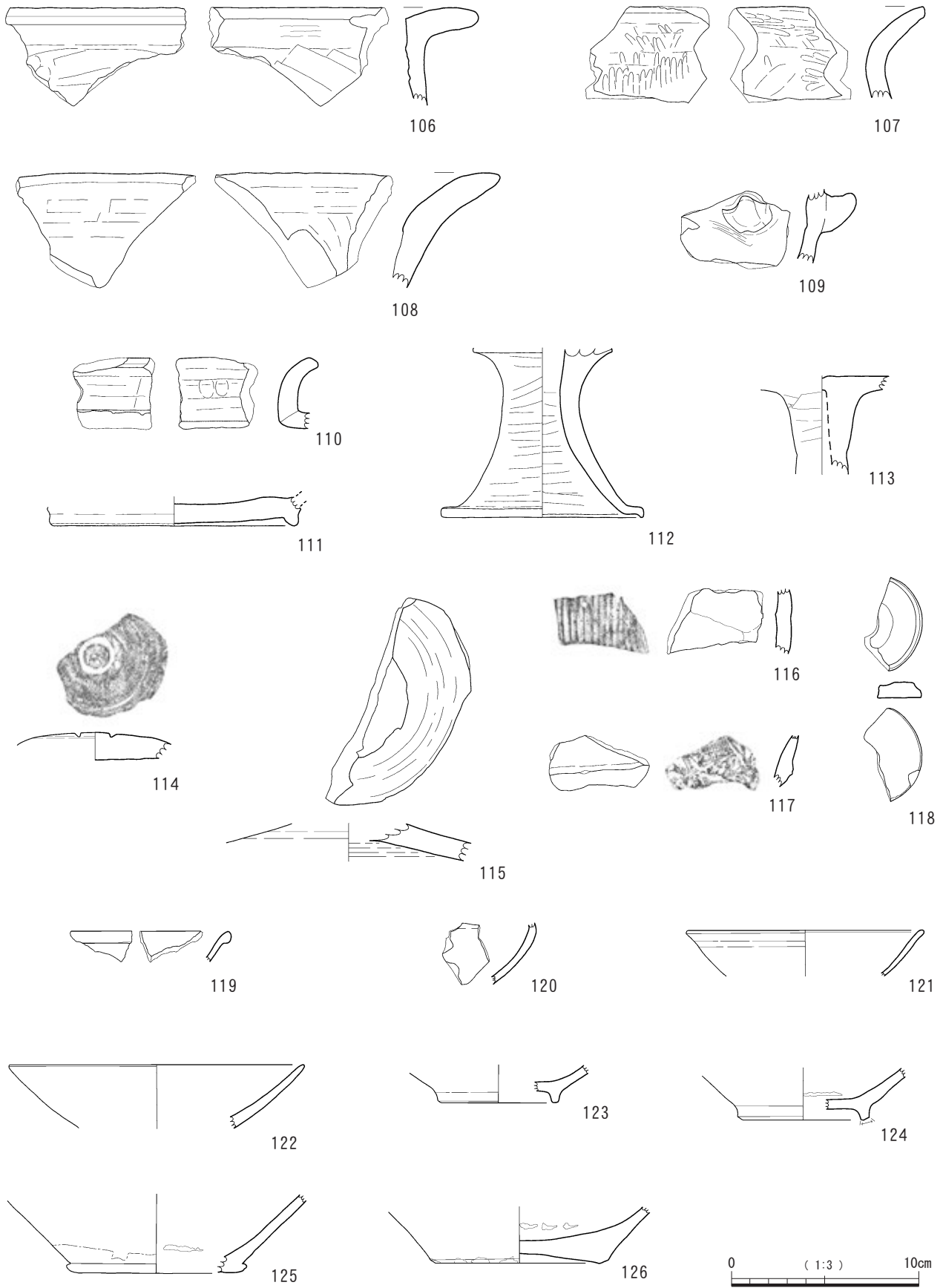
#### 瓦 (第27・28図)

146～162は平瓦もしくは熨斗瓦である。146～150が縄目タタキ、151～153が格子目タタキ、154～157が斜格子目タタキが施されたものである。多くが凹面に杵板痕が残る。板から剥がす際に着いたと見られるヘラ状の筋がみられ、側面近くは面取りがなされている。タタキ目は縄目と格子目に大別され、検出数は縄目タタキを施すものが圧倒的に多い。158はタタキをナゲ消されているもので、丸瓦に多いことから、総数は丸瓦を含んでいる可能性がある。これらは大隅国分寺分類の平瓦I類にあたるものがほとんどである。159・160は凹面にタタキが施されており、他のものと逆になる。これは大隅国分寺分類の平瓦IV類に当たるもので、小片のみで数は極めて少ない。なお、159の凸面は布目、160はナゲ消である。

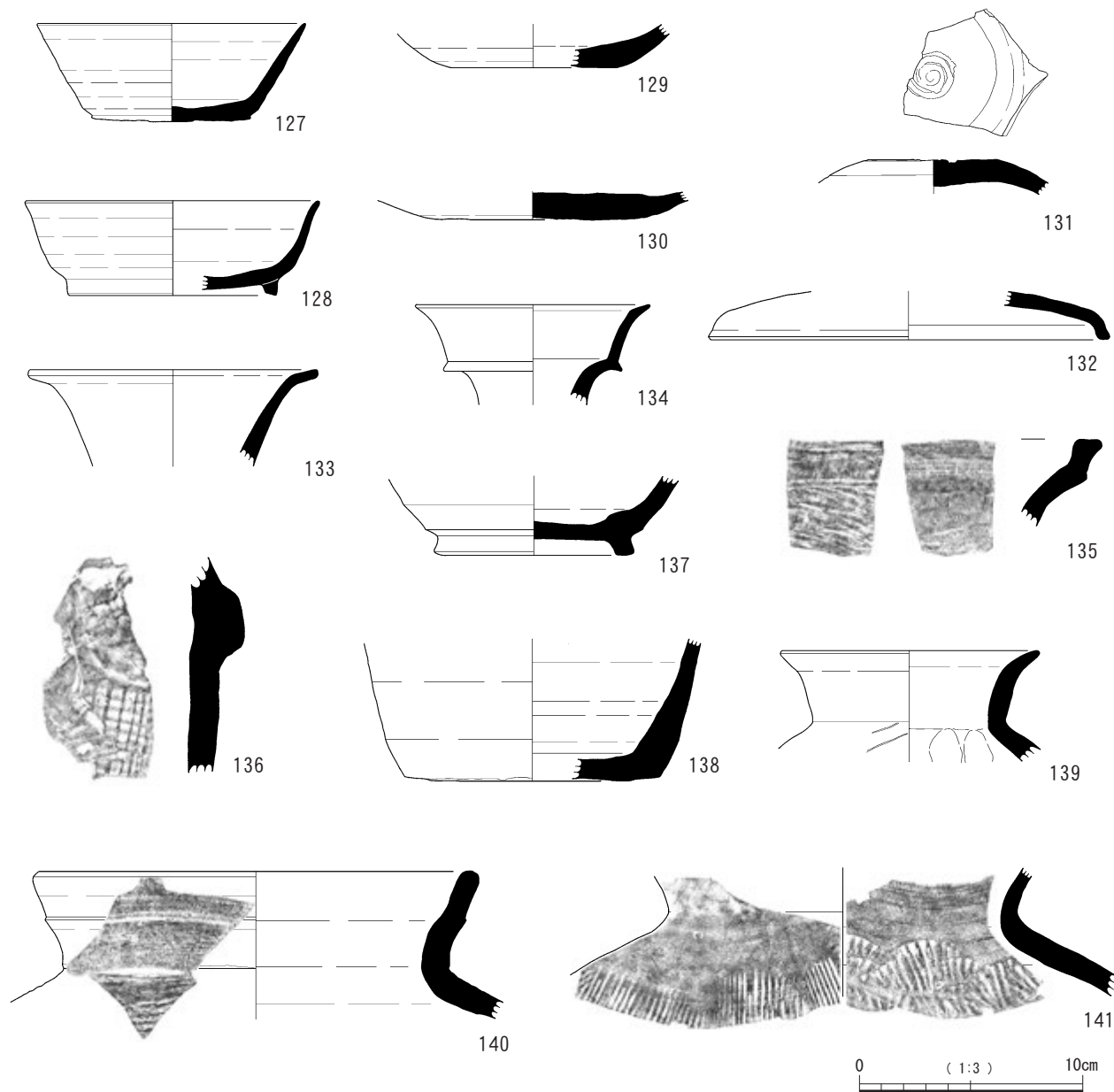


第23図 古代出土遺物(土師器・坏・埴・皿)





第24図 古代出土遺物(土師器・青磁等)



第25図 古代出土遺物(須恵器・平瓦・皿・蓋・壺・甕)

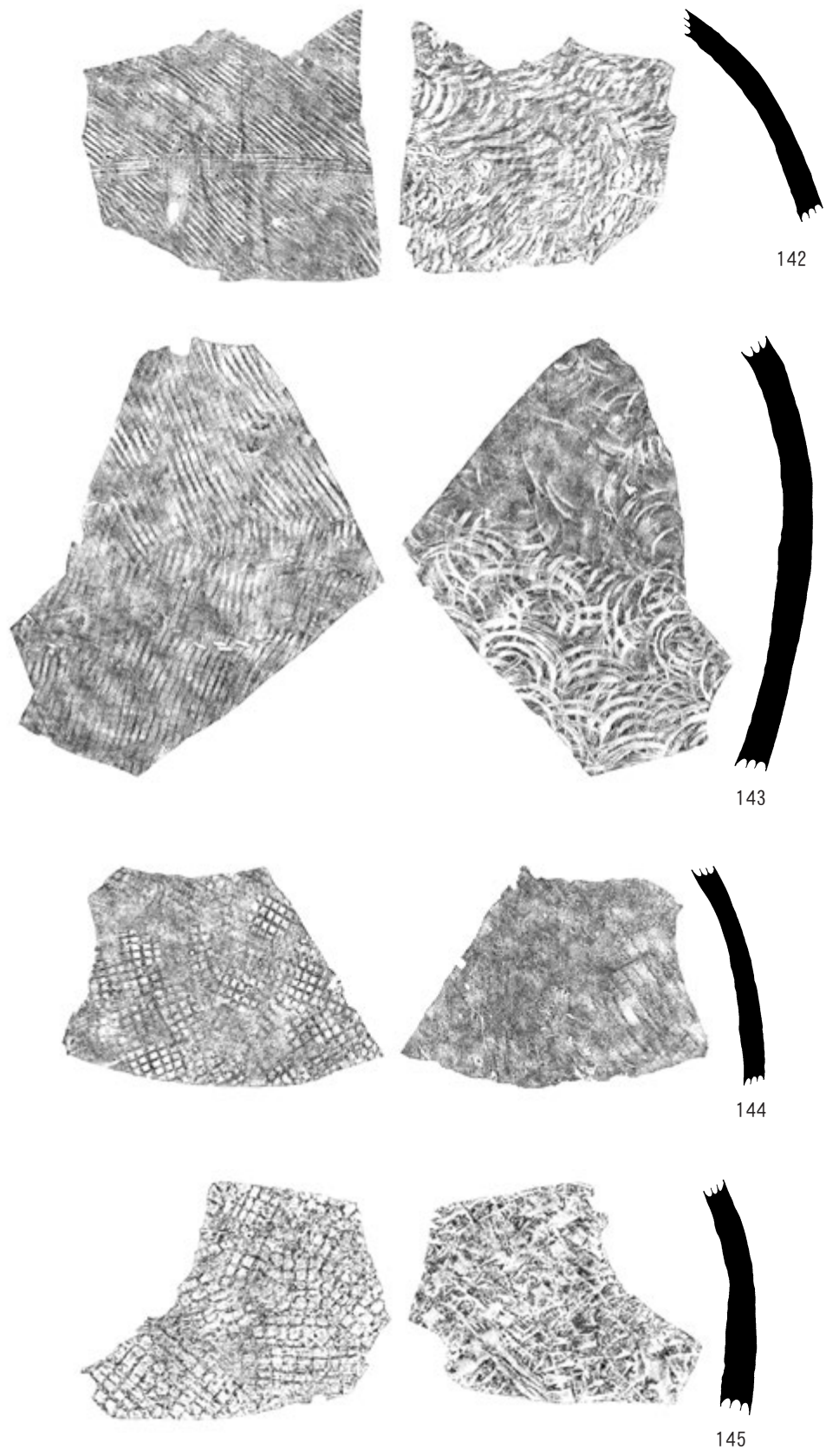
161・162は凹面の布目に糸切り痕が残るもので、大隅国分寺分類の平瓦Ⅱ類に当たるもので、全部で4点のみの出土であった。凸面は、161はタコ糸状縄目タタキ、162は極細縄目タタキである。163は側面両端が唯一残っており、熨斗瓦と確認できたものである。凸面は荒くナデ消した跡が残る。

164～166は丸瓦である。凸面ナデ消しがなされているものがほとんどである。164は行基式と考えられるが、欠損部が多く、玉縁式の可能性もある。側面両端まで残存しており、凸面はナデ消されている。165・166は玉縁式で、165はやや薄手で焼成が良く、丁寧な仕上がりである。166は厚手で白・赤・茶色の部分があるなど焼成が

悪い。

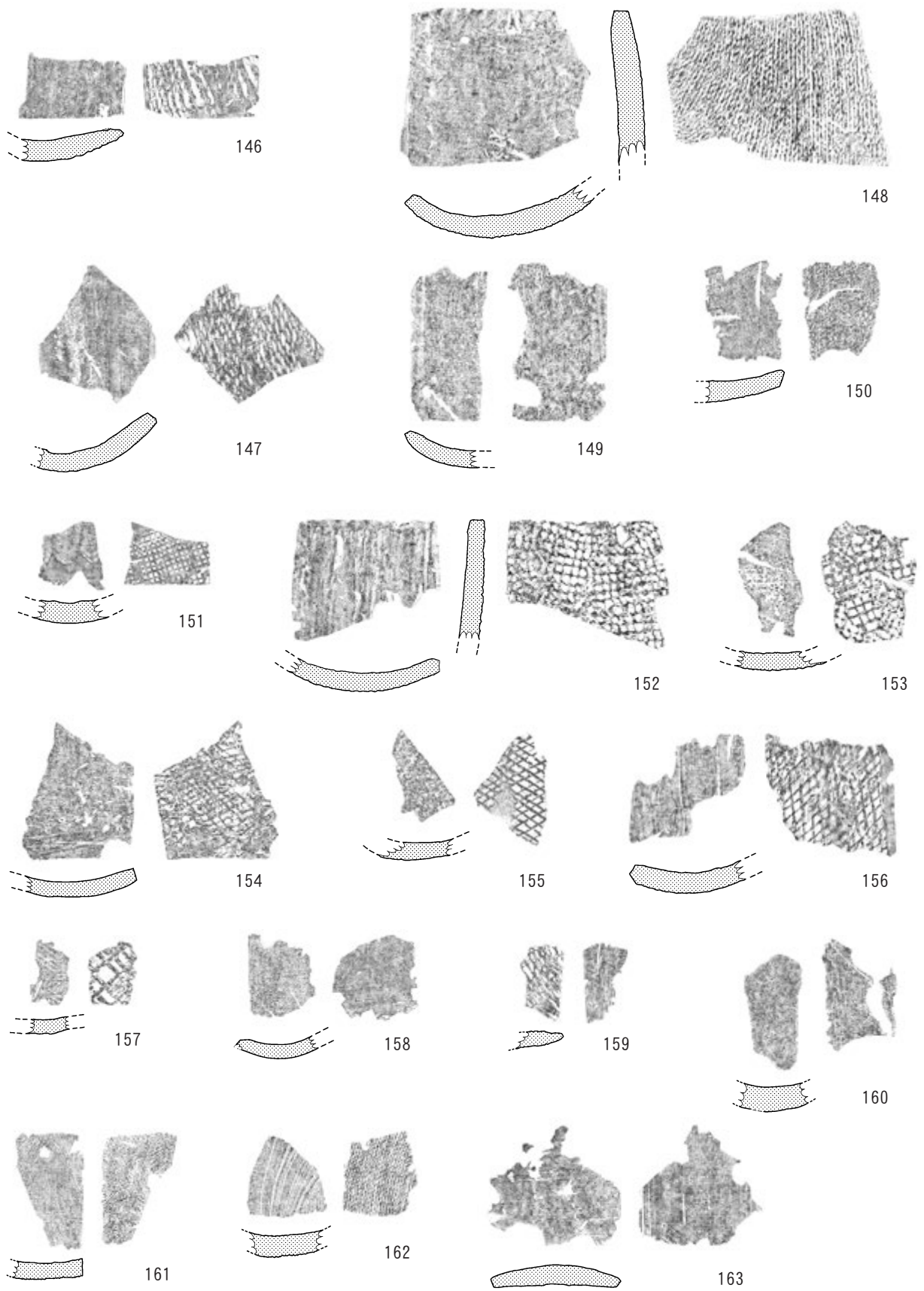
167・168は軒平瓦である。167は大隅国分寺分類によるⅠa類で、周縁がやや広い素文帯で、内区にやや文様の小さい唐草文を持つものである。頸部の端部分のみ残存している。168は分類Ⅰc類で、周縁の素文帯は小さく、外区にやや大きめの珠文を巡らせるものである。範が崩れており、唐草文は明瞭ではない。平瓦部凹面も残存しており、布目や板柢痕が残る。

169～171は軒丸瓦である。169・170は6葉複弁で間弁を持つもので、170は中房に「キズ」が残る。171は8葉複弁で、間弁は持たない。169・170は大隅国分寺分類の軒丸瓦Ⅰ類、171はⅡ類と考えられる。



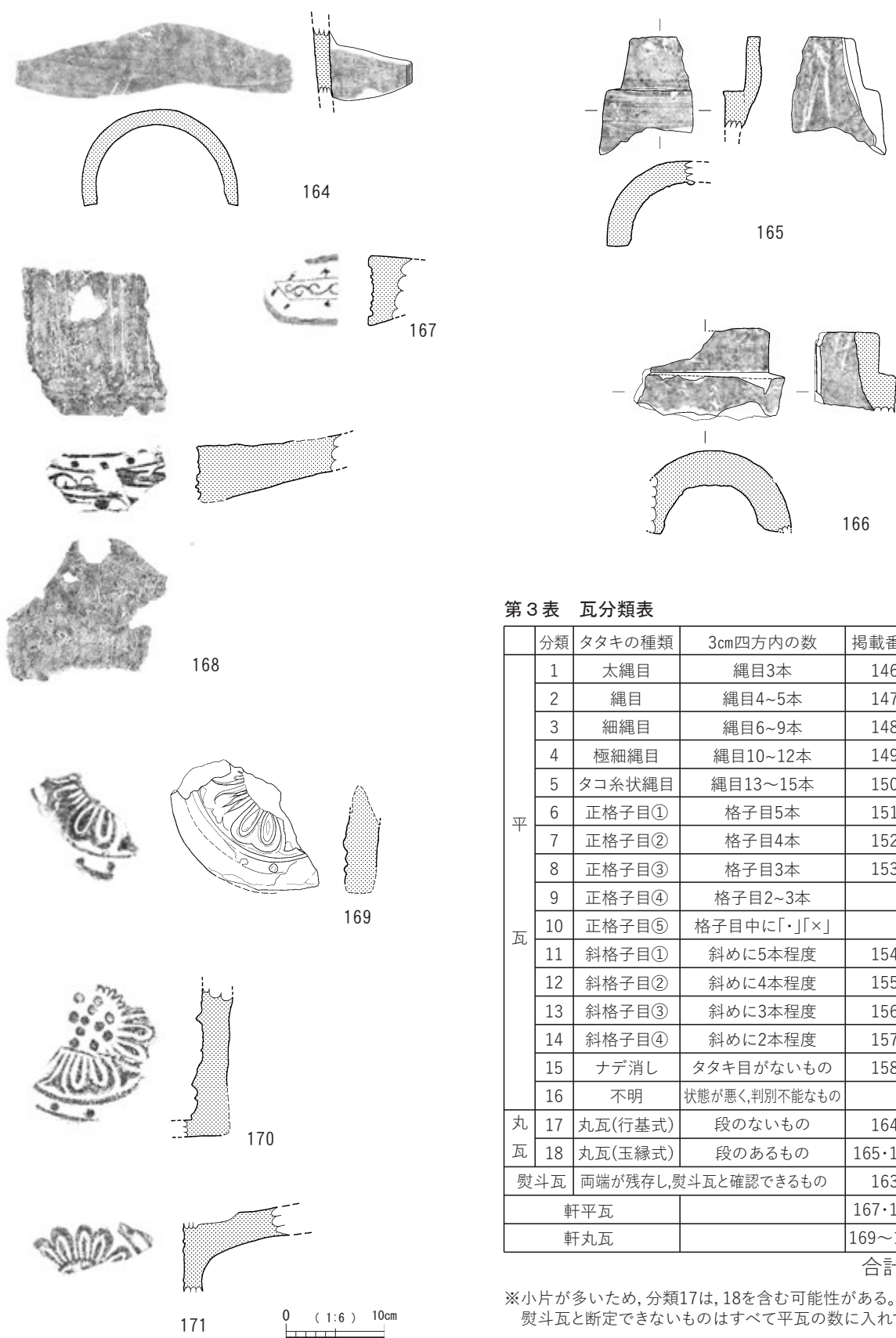
0 ( 1:3 ) 10cm

第26図 古代出土遺物(須恵器甕)



第27图 古代出土遺物(平瓦)





第3表 瓦分類表

分類	タタキの種類	3cm四方内の数	掲載番号	出土数
平瓦	1 太縄目	縄目3本	146	12
	2 縄目	縄目4~5本	147	201
	3 細縄目	縄目6~9本	148	125
	4 極細縄目	縄目10~12本	149	36
	5 タコ糸状縄目	縄目13~15本	150	32
	6 正格子目①	格子目5本	151	5
	7 正格子目②	格子目4本	152	41
	8 正格子目③	格子目3本	153	7
	9 正格子目④	格子目2~3本		0
	10 正格子目⑤	格子目中に「・」「×」		0
	11 斜格子目①	斜めに5本程度	154	2
	12 斜格子目②	斜めに4本程度	155	10
	13 斜格子目③	斜めに3本程度	156	3
	14 斜格子目④	斜めに2本程度	157	1
	15 ナデ消し	タタキ目がないもの	158	16
	16 不明	状態が悪く,判別不能なもの		238
丸瓦	17 丸瓦(行基式)	段のないもの	164	130
	18 丸瓦(玉縁式)	段のあるもの	165・166	30
熨斗瓦	両端が残存し,熨斗瓦と確認できるもの		163	1
軒平瓦			167・168	2
軒丸瓦			169~171	3
合計				895

※小片が多いため,分類17は,18を含む可能性がある。  
熨斗瓦と断定できないものはすべて平瓦の数に入れている。

第28図 古代出土遺物(丸瓦・軒丸瓦・軒平瓦)

## 4 中世の調査

### (1) 調査の概要

今回の調査の中心となる時代である。13～16世紀にわたる遺物が検出されており、中世全般で活発な活動が行われていたようである。時期を中世の造成土であるⅢ層土で分け、下面を1期、上面を2期とする。ただし、溝状遺構4～8号は残存状況より、土が堆積し、浅くなった状態で2期においても残存していたと考えられる。なお、1・2期は年代測定の結果より、明確な時期差が無かったため、遺物はまとめて記載する。

### (2) 遺構(1期 Ⅲ層下面)(第29図)

1期の遺構として、溝状遺構5条がⅡ層土除去後、Ⅲ層土が少量入った状態で検出された。また、大型土坑9基、炭化物集中区4か所、カマド9基、掘立柱建物跡3基、鍛冶遺構1基がⅢ層土除去後に検出された。なおピットは数が多く、掘立柱建物としたもののみ断面を記載する。

#### 大型土坑1号(第30図)

B-2区において検出された。平面は直径約2.5mの円形で、検出面より2m以上の深さで、X層(シラス)以下まで掘り込まれている。標高7.8m付近より地下水が湧き出るため、危険と判断し、そこまでの調査に留めた。検出面は円形で、標高8.5m以下はやや狭くなる。埋土は

掘り上げた土を混合し、そのまま埋め戻しに使用したと考えられる。用途は不明であるが、地下水面より深いため、井戸等の用水利用施設であった可能性がある。上部からピット等の切り合いが無いこと、青磁が出土していることから、中世の遺構と考えられる。遺物の多くは検出面から80cm程度の深さに入っていた。

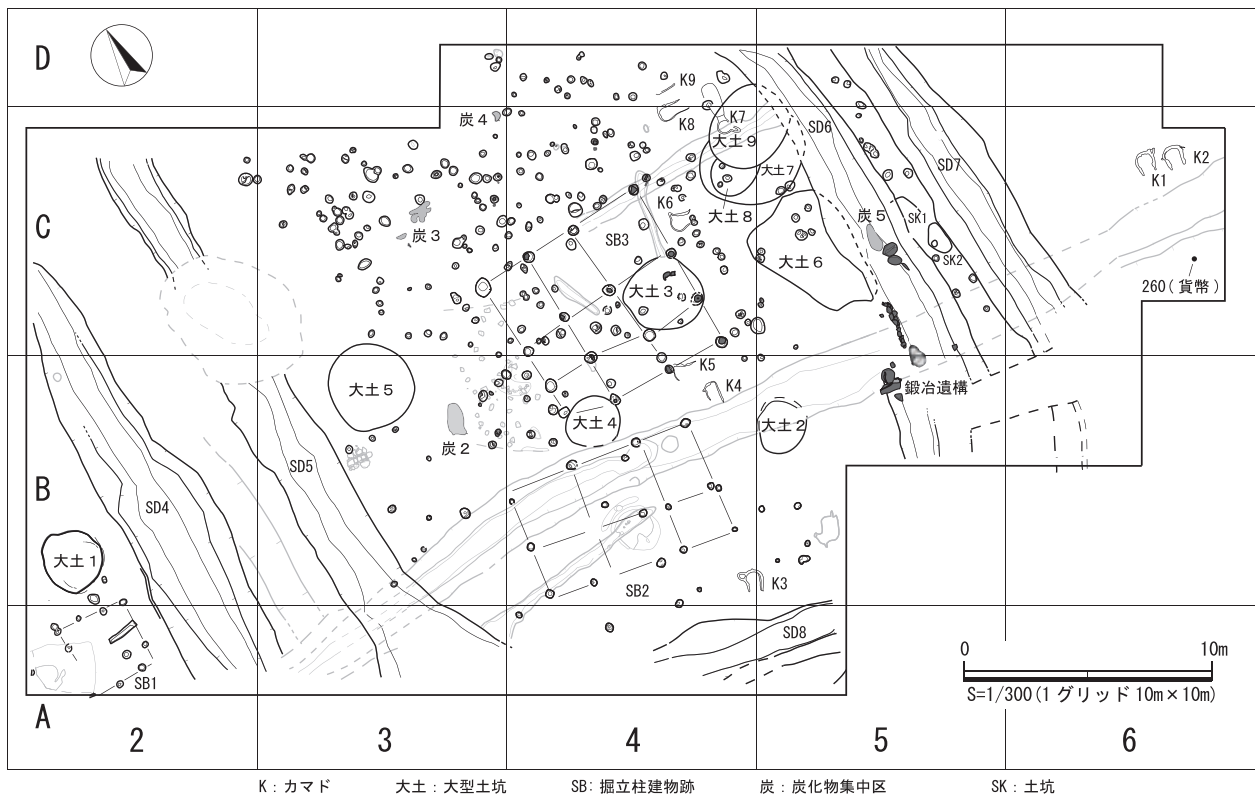
#### 大型土坑2号(第30図)

B-5区において、Ⅲ層下のV層上面で検出された。平面は直径約2mの円形で、ほぼ垂直に、Ⅶ層以下まで掘り込まれている。埋土断面より溝状遺構3号を切っていることが確認できた。大型土坑1号と同じく、標高7.8m付近より地下水が湧き出るため、そこまでの調査に留めた。用途は1号と同じく、井戸等であった可能性がある。ピット等の切り合いは落ち込みのためか、検出されなかった。遺物の多くは検出面から1m程度の深さに入っていた。

#### 大型土坑3号(第31図)

C-4区において、Ⅲ層下のⅥ層上面で検出された。直径3m程の大きさである。検出面の埋土内にX層土が多く含まれており、X層まで掘り込まれていると推測される。検出面の形状など、大型土坑1号とよく似ている。調査は検出面より1m下まで行った。埋土内で石臼(249)が検出された。

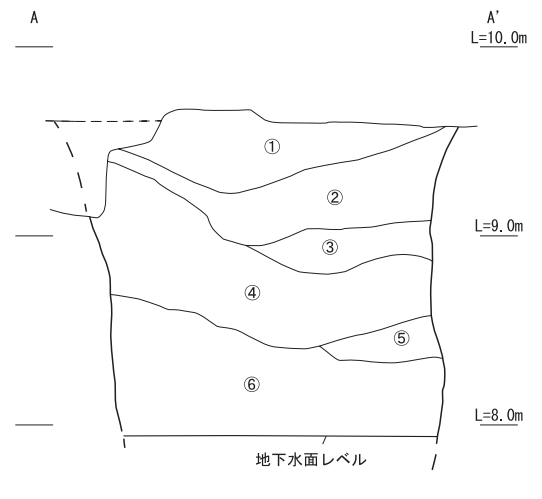
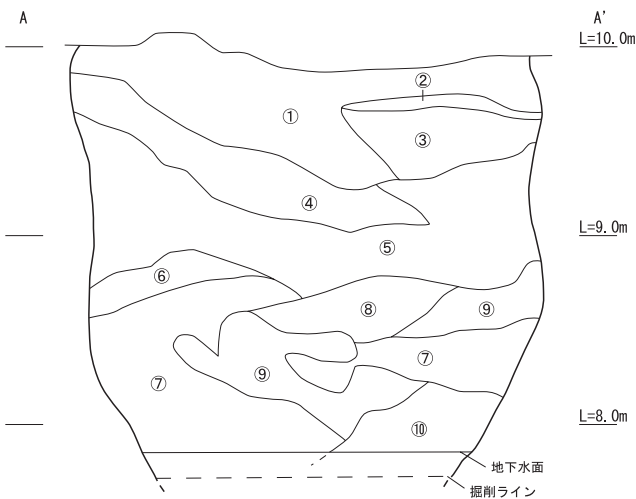
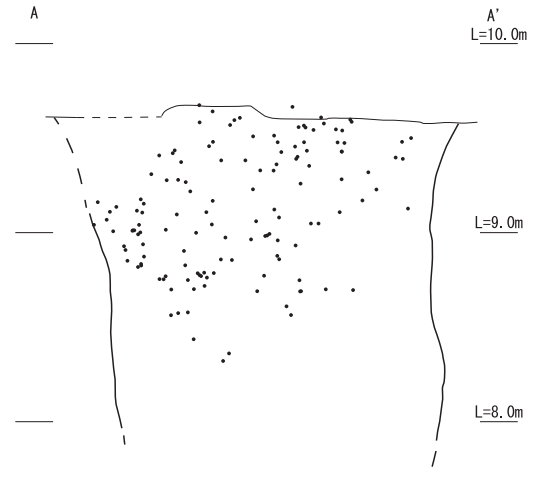
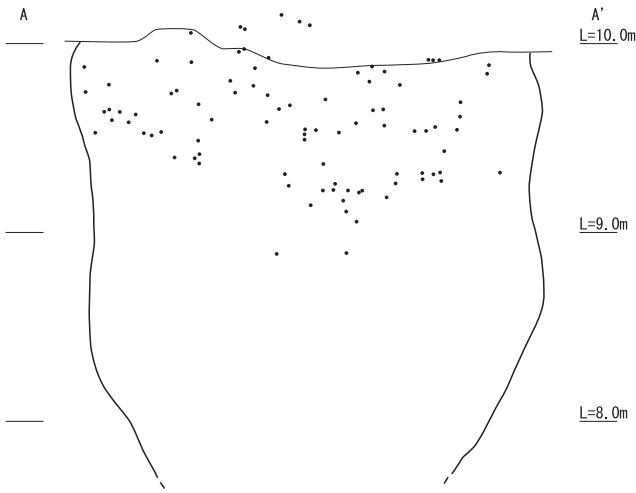
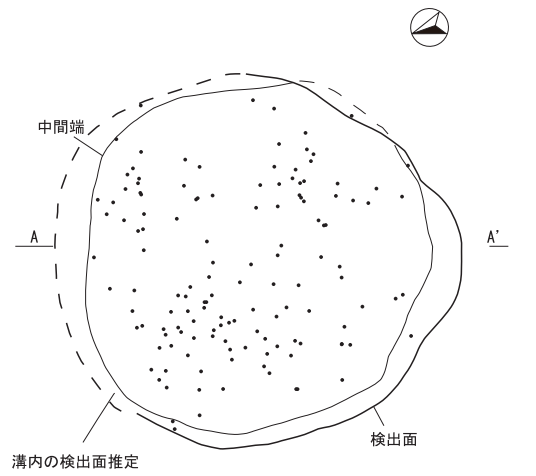
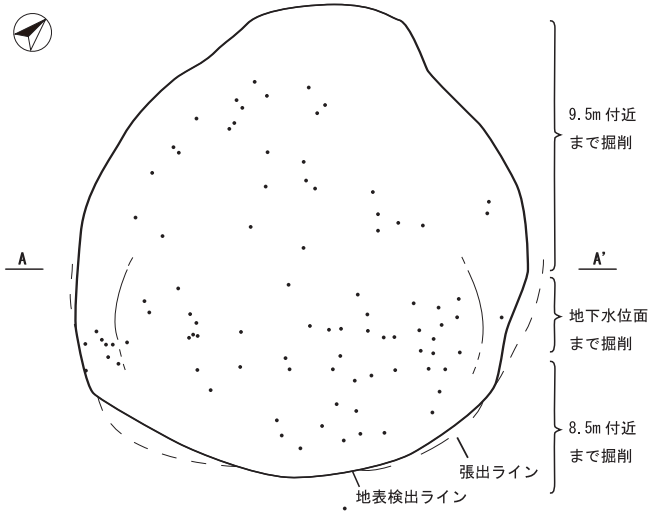
### 中世1期(Ⅲ層造成前)



第29図 中世遺構配置図(1期)

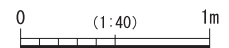
大型土坑 1号

大型土坑 2号



- ① 黒色土。IV層土と思われる。パミス少ない。
- ② VI・X層土を含む黒色土。
- ③ 黒色土 (IVと推定) とVI層土の混合土。
- ④ 薄い褐色土。VII層下方の土に類似。少礫多く含む。
- ⑤ 少量の黒色土 (IV?) を含むVI層主体土。
- ⑥ VI層土。
- ⑦ VII・VIII・IX・X層土の混合土。
- ⑧ 青灰色土。どの層の土かは不明。小礫多く粘質あり。
- ⑨ X層土を少量含むVII層主体土。
- ⑩ X層主体土。

- ① 黒褐色土と黄褐色土の混合土。
- ② 青灰色土主体土。
- ③ VI層 (黄褐色土) 主体土。
- ④ 黒褐色土主体土。青灰色土を少量含む。
- ⑤ VII層 (黒色土) 主体土。粘質強い。
- ⑥ VII・VI b層主体土。一部白色土 (X層土) 含む。



第30図 大型土坑1・2号

#### 大型土坑4号(第31図)

B-4区において、Ⅲ層下のⅥ層上面で検出された。円形で直径2m程の大きさである。断面より、溝状遺構3号より新しいことが確認できる。掘り下げ調査は検出面より60cm下まで行った。埋土土層より、黒褐色土主体土を南側から入れた後、茶褐色土主体土を北側から入れたと考えられる。黒褐色土はⅣ層土と推定される。

#### 大型土坑5号(第32図)

B・C-3区において、Ⅲ層を除去した後のⅥ層上面で検出された。円形で直径3m程の大きさである。調査予定深度より深いため、調査は形状を確認するための20cm下までの調査に留めた。

#### 大型土坑6号(第32図)

C-5区においてⅢ層土除去後に検出された。溝状遺構6号に切られている。検出面にⅩ層土が多く見られたことから、Ⅹ層以下まで掘り込まれていると推定される。形状は方形で、平面で4～5m程度あり、他と比較し最も大きい。多数のピットに切られている。検出面も調査予定深度よりかなり深いため、10cm程度下までの調査に留めた。

#### 大型土坑7・8・9号(第32図)

C・D-4・5区で検出された。切り合い関係より、7・8・9号の順で作られている。9号をカマド7号が切っている。9号は検出面より、白磁の多角坏1点(191)が出土している。

#### 炭化物集中区(4か所)(第32図)

遺構外では3か所で確認された。B-3区の炭化物集中区2はAMS年代測定を行っており、2σ暦年代範囲で1466calAD-1524calAD(49.0%)・1558calAD-1632calAD(46.4%)の結果が出ている。炭化物集中区3・4は測定を行っていないが、ほぼ層位は変わらないため、同様の年代と推測される。炭化物集中区5は溝状遺構6号内にあり、後述する。

#### 溝状遺構4・5号と溝間の土塁状遺構(第33・34図)

A～C-2・3区で検出された。溝間の土塁状遺構は現代と思われる掘削を受けているが、Ⅳ・Ⅴ層土まで残存しており、本来はより高かった可能性が高い。

溝状遺構4号は検出分で長さ約18.5m、幅約1.5～3.5mである。床面は北側のC-2区で標高約9mと高く、B断面付近でかなり深くなる。A断面付近はやや浅くなるため、この付近を水が溜まるように作った可能性がある。

B断面において、西側が地滑り状に崩れていることが確認できる(第6図①参照)。溝の形状や埋土より、ある程度溝が埋まった後に、埋土②の床面まで再度掘り返したと考えられ、埋土②がⅡ層土と判断できることから、2期(Ⅲ層敷設後)においては②の床面が溝の底面であったと考えられる。第34図において断面Aでは③の床面、断面Cでは①の上面がこれに該当すると推定される。

溝状遺構5号は検出分で約24m、幅2～2.5mであり、北から南方向へほぼ直線的に作られている。床面の高さより、流水は北から南へ流れる。比較的浅く、Ⅲ層土が入り込むため(第6図①参照)、Ⅲ層土敷設時に再度掘り返された可能性がある。断面Dにおいては、⑥は溝状遺構3号を埋め立てて作られた土塁部分、①が土塁から崩れた埋土、③が溝状遺構4・5号及び土塁状遺構を構築する際の溝状遺構3号の床面と考えられる。

溝間の土塁状遺構は、断面より砂層がみられるなど複雑な土層であるが、溝壁面との比較や、上面に残る土器集中区により、Ⅵ層が残存しているものと判断される。

#### 溝状遺構6・7号と溝間の土塁状遺構(第35・36図)

B～D-5～7区において、Ⅱ層土除去後に検出された。

溝状遺構6号は検出分で南北間の長さ約20m、幅2～3mである。床面の高さより、流水は北から南に流れる。中央部分に鍛冶遺構があり、その南側は西にズレがみられるため、鍛冶遺構が作られた後に改変が行われたと考えられる。また、鍛冶遺構及びその南側はⅢ層土で埋められていること(第36図断面D参照)、溝状遺構6・7間の土塁状遺構が切られていることから、Ⅲ層土敷設時には、流水はこの切れ目部分に流れ、溝状遺構7号に合流したと考えられる。

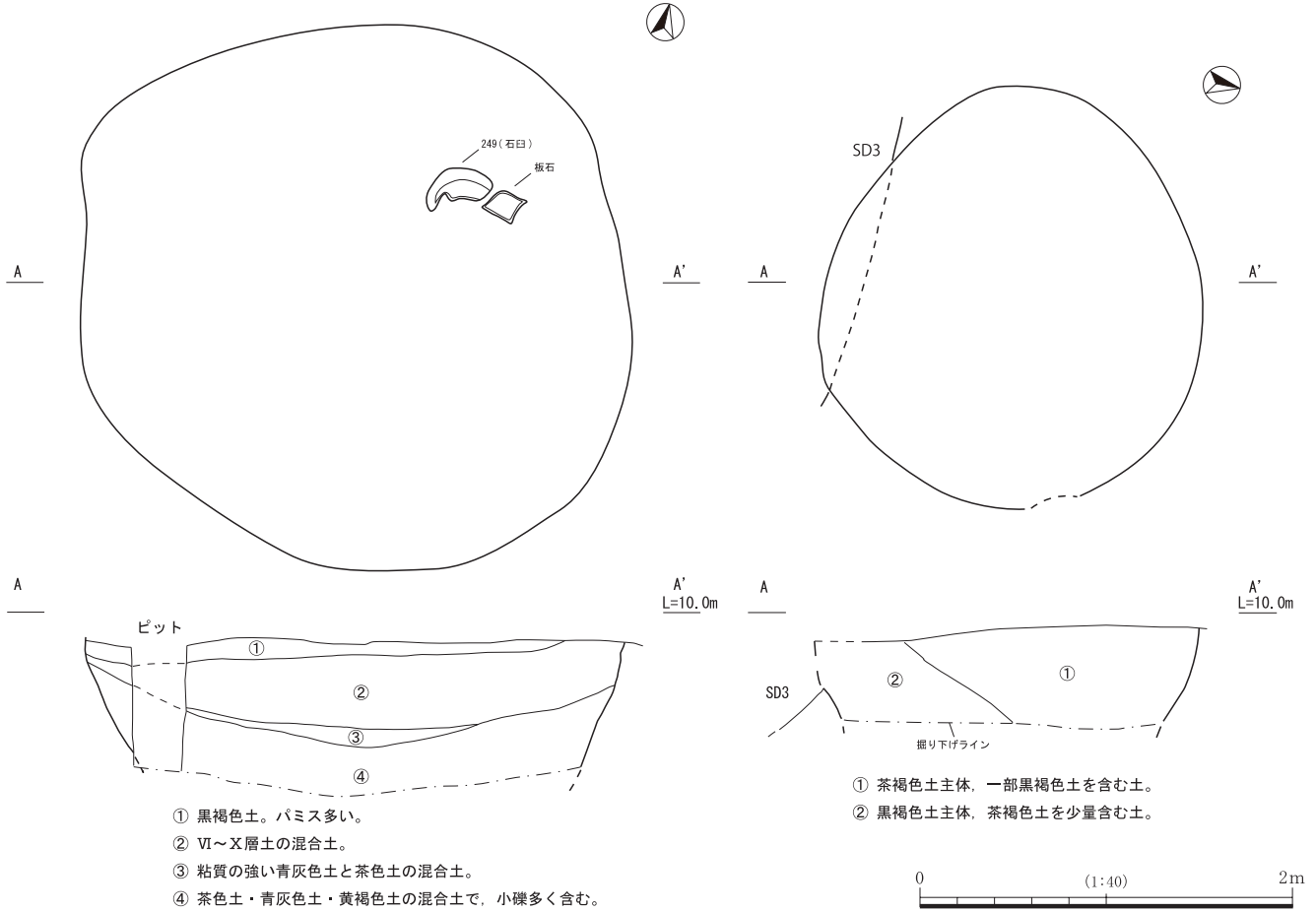
断面A付近においては、③の床面に炭化物が残存していた(炭化物集中区5)。AMS年代測定の結果、2σ暦年代範囲で1452calAD-1523calAD(64.1%)・1575calAD-1624calAD(31.3%)の結果が出ており、16世紀頃のものとして推定される。溝がある程度埋まった後に入った炭化物であるため、溝が作られたのは15世紀以前と推定される。

溝状遺構7号は、検出分で南北間の長さ約14m、幅約2～3mである。多くの遺物と礫が混入しており、特に板碑(254)の出土は注目される。重なるように備前産の播鉢(232)も出土している。床面の高さより、流水は北から南へ流れる。断面Aにおいては、④上面が床面の時期に、溝側面であった⑬が崩れていることが確認できる。断面D付近では、かなり深く垂直に掘り込まれている。

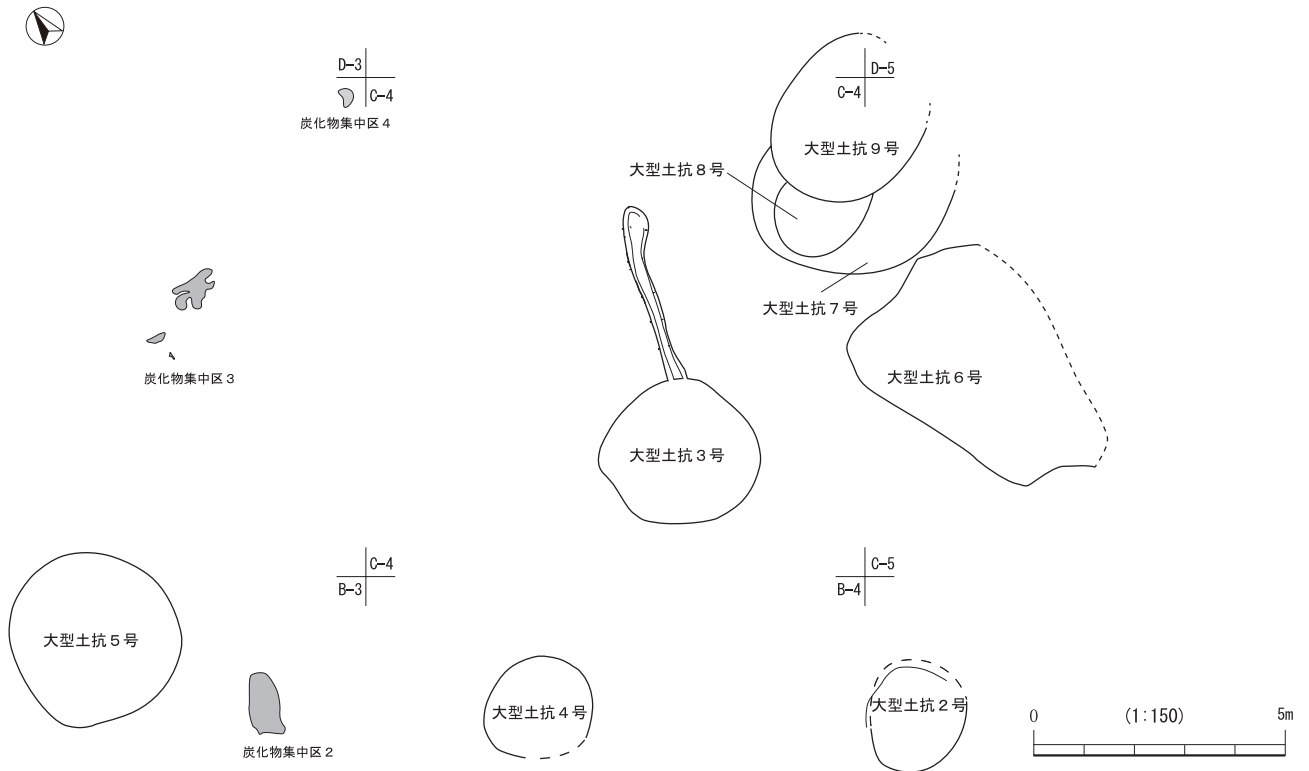
溝間の土塁状遺構は、断面Bにおいて溝状遺構3号を埋めて作られていることが確認できる。断面Aにおいては複雑な層位をなすが、河川の堆積作用によるものと考えられる。溝状遺構4・5号及びその間の土塁状遺構と作りはほぼ同じである。断面Cにおいては、土塁状遺構間を方形に切っていることが確認できる。前述のように溝状遺構6号の水を流す役割及び、土塁状遺構間に入る際の入り口であった可能性が考えられる。またこの上部では、多数のピット及び土坑3基が検出されている。Ⅳ層土から掘り込まれていることから、古代から中世の遺構と考えられる。

大型土坑 3号

大型土坑 4号

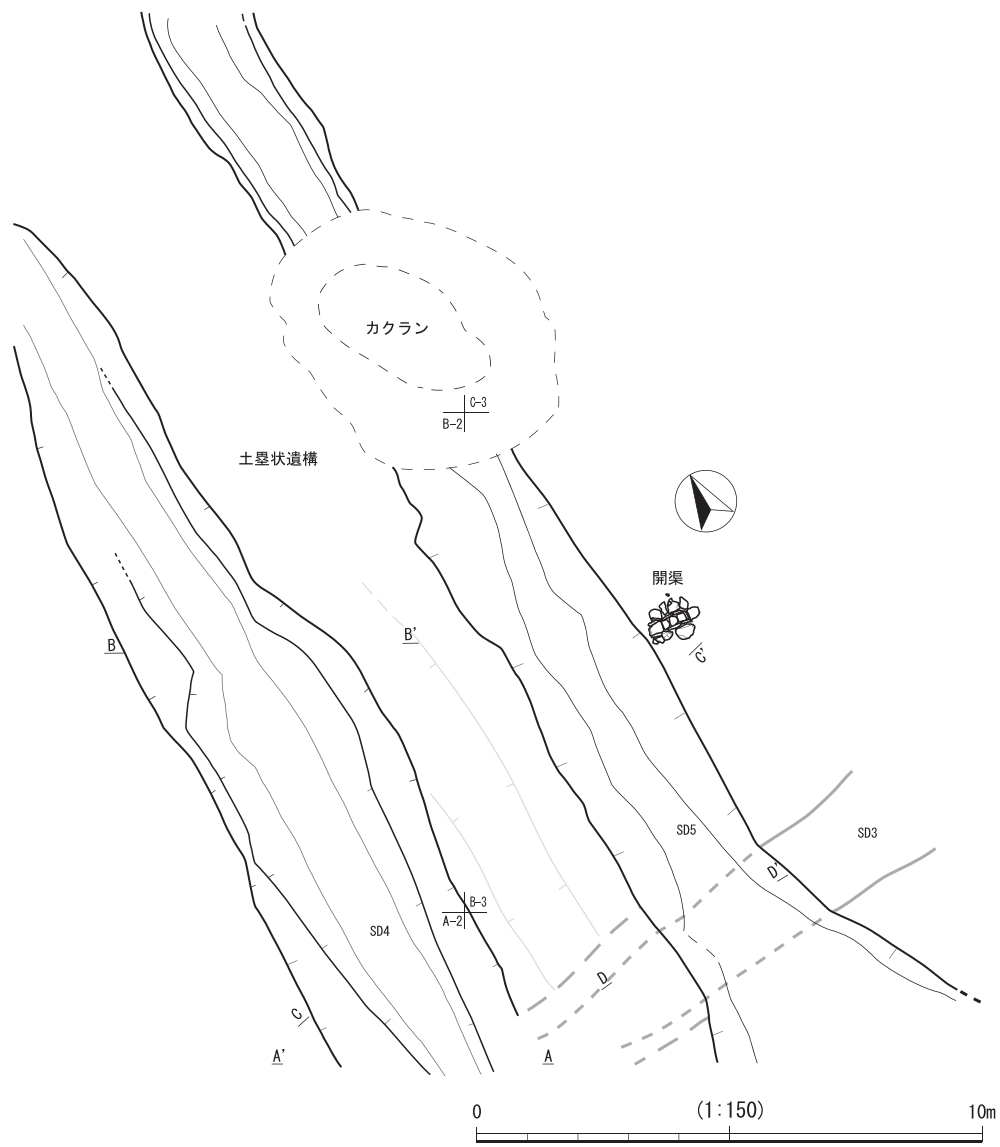


第31図 大型土坑3・4号

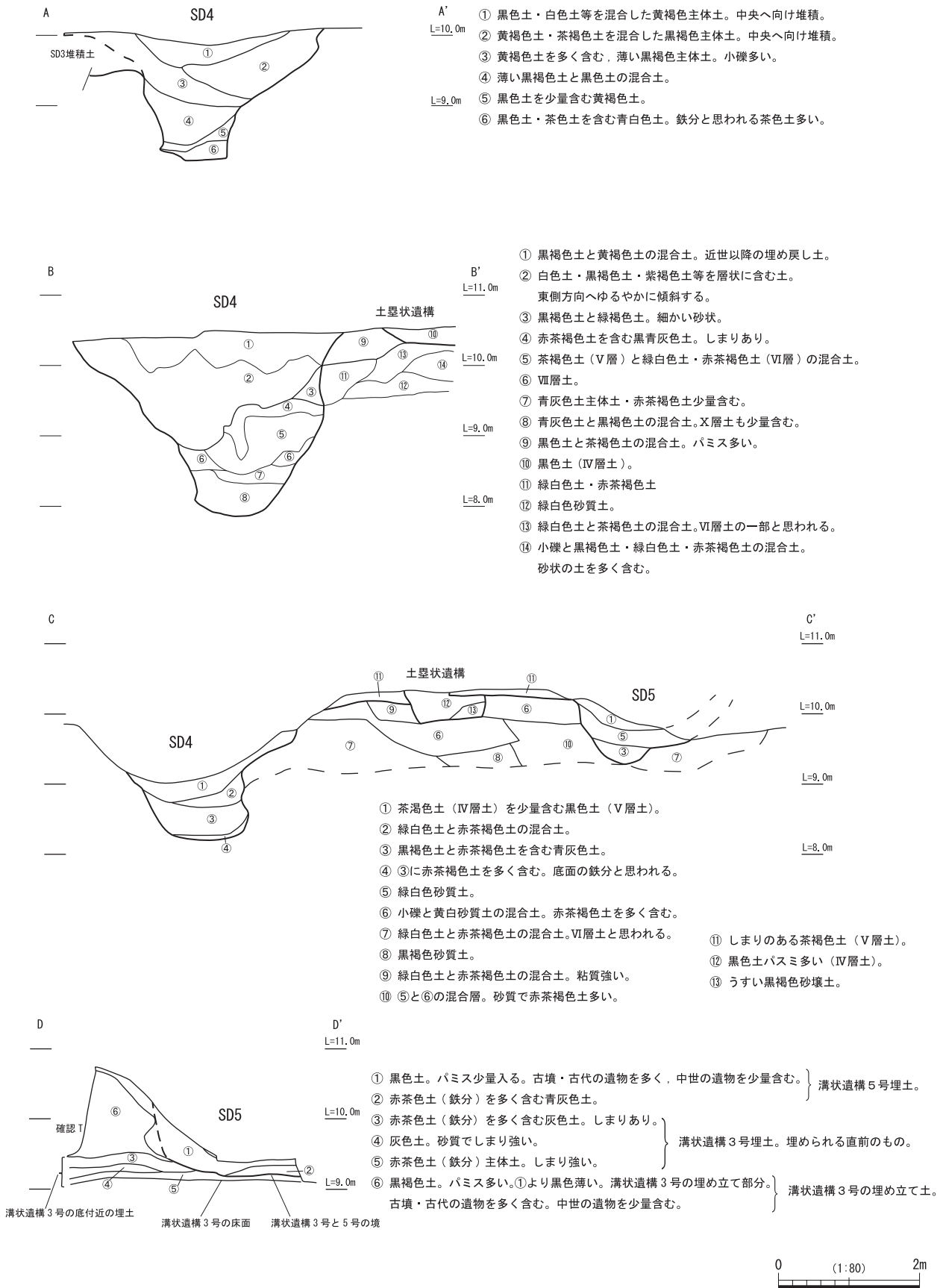


第32図 大型土坑2～9号及び炭化物集中区2～4位置図





第33図 溝状遺構4・5号平面図



第34図 溝状遺構4・5号断面図

**溝状遺構6・7号間のピット・土坑(第35図)**

ピット・土坑はIV層土から掘り込まれており、古代か中世いずれかに作られたものと推測される。古代であれば掘立柱建物の残存部、中世の溝状遺構の造成以後であれば柵等であった可能性がある。これらの埋土に中世の遺物は含まれておらず、判別はできなかった。なお、ピット・土坑の平面は第35図を、土坑の断面は第36図を参照されたい。

**土坑1号(第35・36図)**

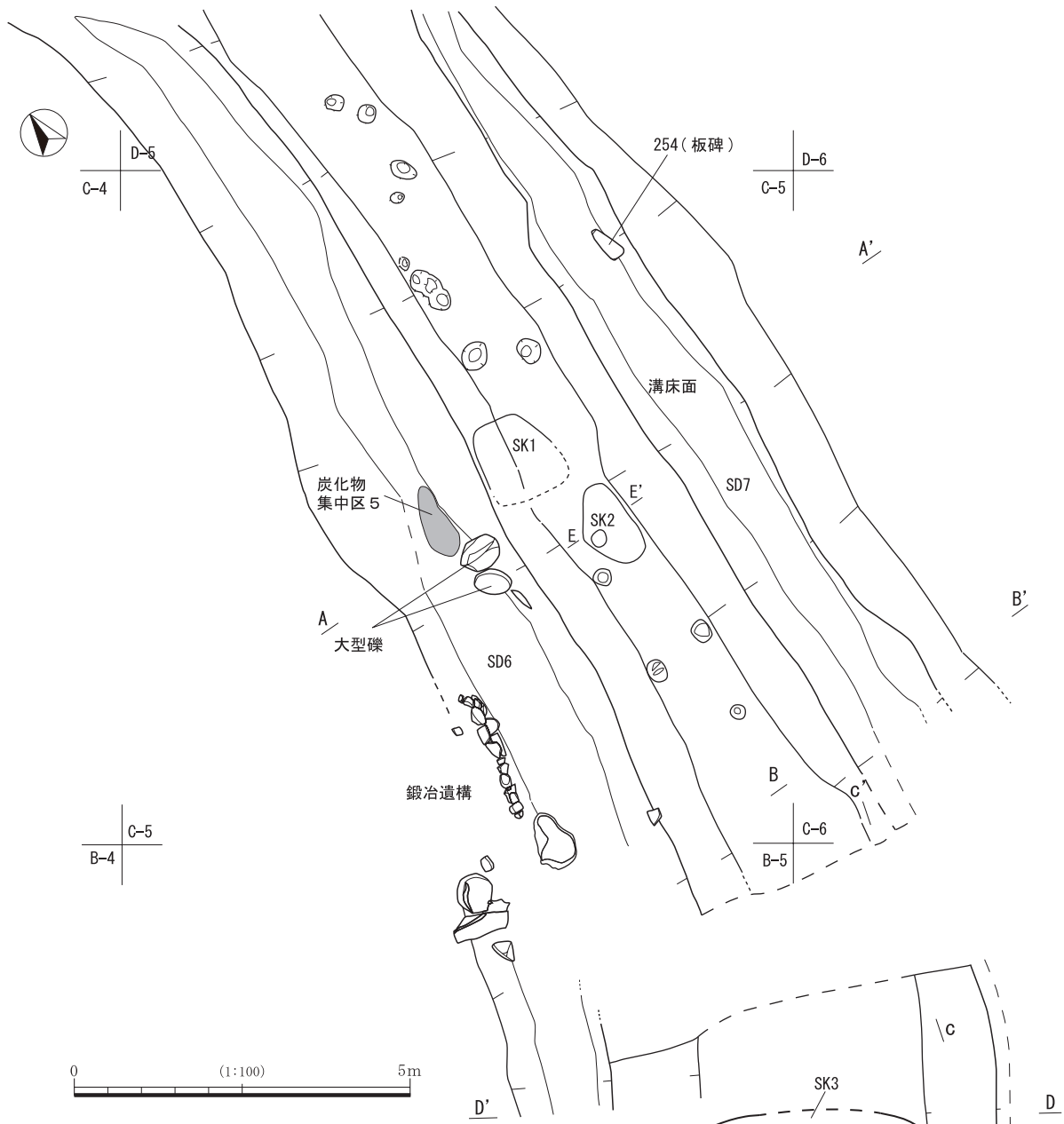
C-5区で検出された。深さ及び幅は約1m程度である。弥生・古墳時代の土器及び須恵器が出土している。

**土坑2号(第35・36図)**

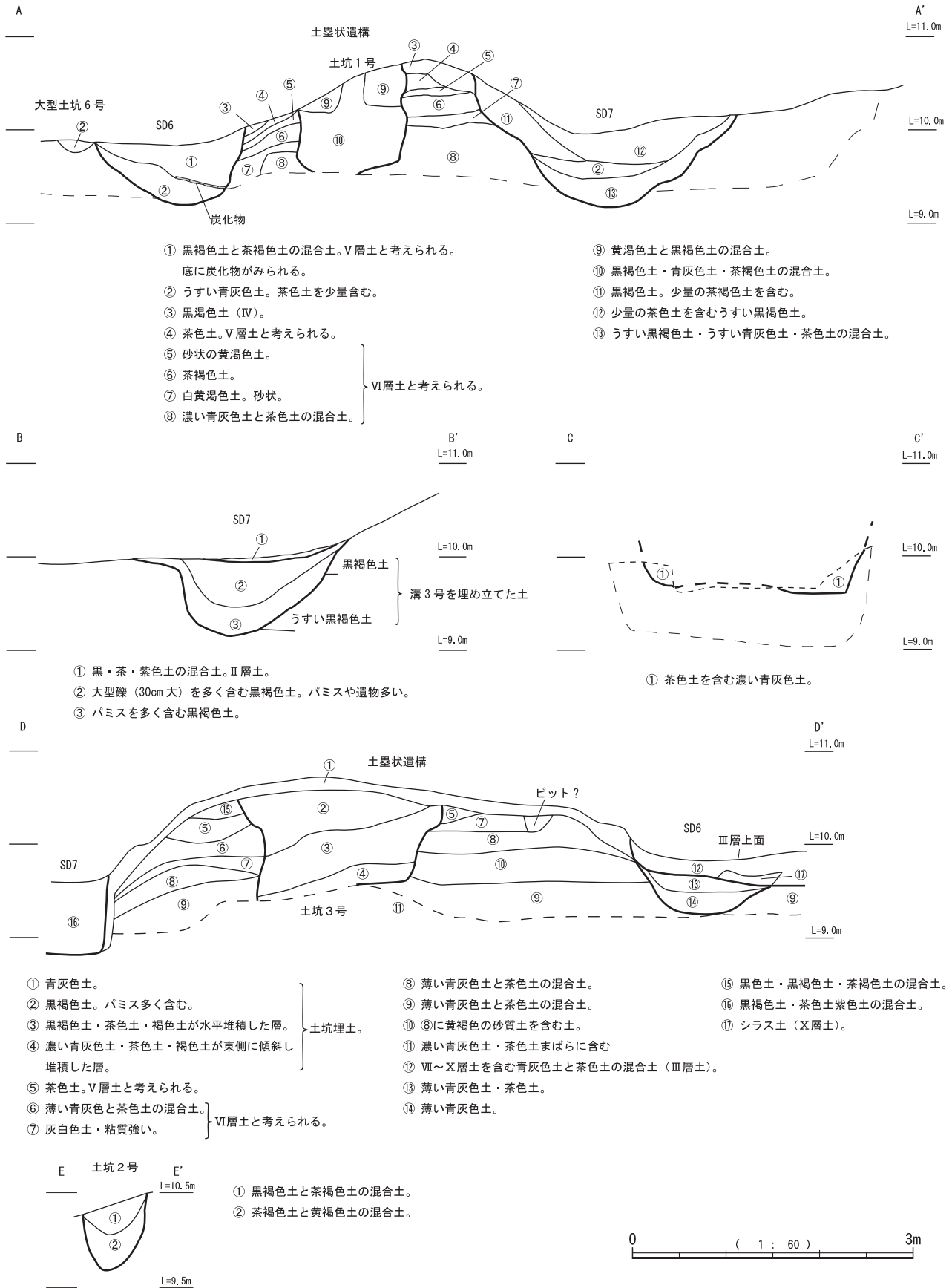
C-5区で検出された。幅は約50～70cm程度である。縄文時代晩期及び弥生・古墳時代の土器が出土している。

**土坑3号(第35・36図)**

溝状遺構6・7号の南端の土層断面調査時に検出された。検出できた部分で幅約2.2mと大型である。平面部分がほぼ未調査区に入り込むため、詳細は不明である。



第35図 溝状遺構6・7号及び土坑1～3号平面図



第36図 溝状遺構6・7号断面図

### 鍛冶遺構 (第37図)

B・C-5区において、溝状遺構6号と重なる状態で検出された。溝状遺構6号をやや掘りこんでおり、溝の後に作られたと考えられる。上面はⅢ層土に覆われていた。東西約60cm、南北約90cmの楕円形の平面に鉄滓、その上に炭化物が集中した箇所を中心に、その西側に鉄分が付着した大型の石、北側に20cm程度の礫が2m程度並んだ状態で検出された。鉄分が付着した大型の石は金床石、鉄滓と炭化物の集中箇所は鍛冶炉、並んだ礫は溝状遺構6号との境として使用されたと推定される。遺物は鉄滓内に土師器坏が1点、金床石近くに青磁が1点みられた。鉄滓下部の炭化物のAMS年代測定においては、 $2\sigma$  暦年代範囲で1470calAD-1530calAD(36.2%)・1540calAD-1635calAD(59.2%)という結果が得られた。

172は青磁の口縁部で、口縁部が外反し、内面に一部文様が残る。外面は火を受けたためか、釉が溶け凹凸がみられる。上田D類に比定される。173は土師器坏で、鉄滓内に入っていたためか、内面に鉄滓が多く付着している。底部はヘラ切りである。

### 溝状遺構8号・土塁状遺構(第38図)

A-4・5区で検出された。南側の土塁状遺構と共に東西方向に広がる。コンタ図より、Ⅲ層上面に降った雨の多くがこの溝に集まると推定できる。水は西方向へ流れ、溝状遺構5号と合流し、さらに南下すると思われるが、未調査区内であり詳細は不明である。溝の南側には溝状遺構4～7号と同様に土塁状遺構がみられ、土層断面を見ると上部にIV・V層とみられる層が残っているため、溝を掘削し、地山を残し作られたものと考えられる。

### カマド1号(第39図)

C-6区において2号と並んで検出された。カマド本体は奥行き約92cm、幅約80cmのU字形を呈する。高さは10cm程度残存しており、南側に焚き口を向けている。炭化物は炉部から灰出し部にかけて広がっており、溝状遺構部分で途切れるため、カマド使用時に、古代の溝である溝状遺構3号のこの部分は残されていた可能性が高い。炉部から焚き口部にかけての床面では、炭化物層の間に粘土層が挟まっており、一度床面を敷き直している。炉部の東側には煙道が設けられている。本体東側は10cm程度の深さで白色土(X層土)に覆われている。周囲においてピットは検出されず、これらの土が建物等に伴うものかは不明である。炭化物のAMS年代測定では $2\sigma$  暦年代範囲で1456calAD-1525calAD(50.8%)・1557calAD-1632calAD(44.6%)の結果であった。

### カマド2号(第39図)

C-6区において検出された。カマド本体は奥行き約90cm、幅約90cmで、焚き口部をやや隘れるU字形である。高さは約10cm残存しており、1号と並列し作られている。炉部の埋土内にカマドの一部と思われる橙色土が多く残存しており、カマド7号のような焚き口上部を覆う構造

であった可能性がある。炭化物は炉部と灰出し部に残っているが、他のカマドより極めて量が少ない。東側にも残存していたが、標高10.7m付近とカマド部分より高く、伴うものかどうかは不明である。煙道は炉部の東側に作られている。

### カマド3号(第39図)

B-4・5区において検出された。砂質の黄褐色土(Ⅵ層土の一部)の面に造られている。カマド本体は奥行き約100cm、幅約70cmの整ったU字形で、西側に幅40cm程度の大きな煙道を持つ。高さは約20cm残存しているが、焼成が悪く、調査中一部崩壊した。炭化物は炉部から灰出し部に向け残存している。南側に焚き口を向けている。炭化物のAMS年代測定においては、 $2\sigma$  暦年代範囲で1487calAD-1532calAD(27.4%)・1538calAD-1636calAD(68.0%)という結果が得られた。

### カマド4号(第39図)

B-4区においてⅢ層土を取り除き検出された。溝状遺構3号が埋め戻された後に作られている。カマド本体は奥行き約100cm、幅約50cmの細長いU字形で、煙道があったかは不明である。高さは約5cm程度もしくはほぼ残存しておらず、焼成も悪いため、極めて崩れやすい状態であった。焚き口は南側を向いている。炭化物のAMS年代測定においては、 $2\sigma$  暦年代範囲で1513calAD-1601calAD(70.3%)・1616calAD-1649calAD(23.9%)という結果が得られた。

### カマド5号(第40図)

B-4区においてⅢ層土を取り除き検出された。カマド本体部分は奥行き約100cm、幅約80cm、高さ約10cm残存している。西側半分のほとんどを欠き、煙道部があったかは不明である。炭化物は炉部から灰出し部にかけて広がっている。焚き口は東側を向いている。

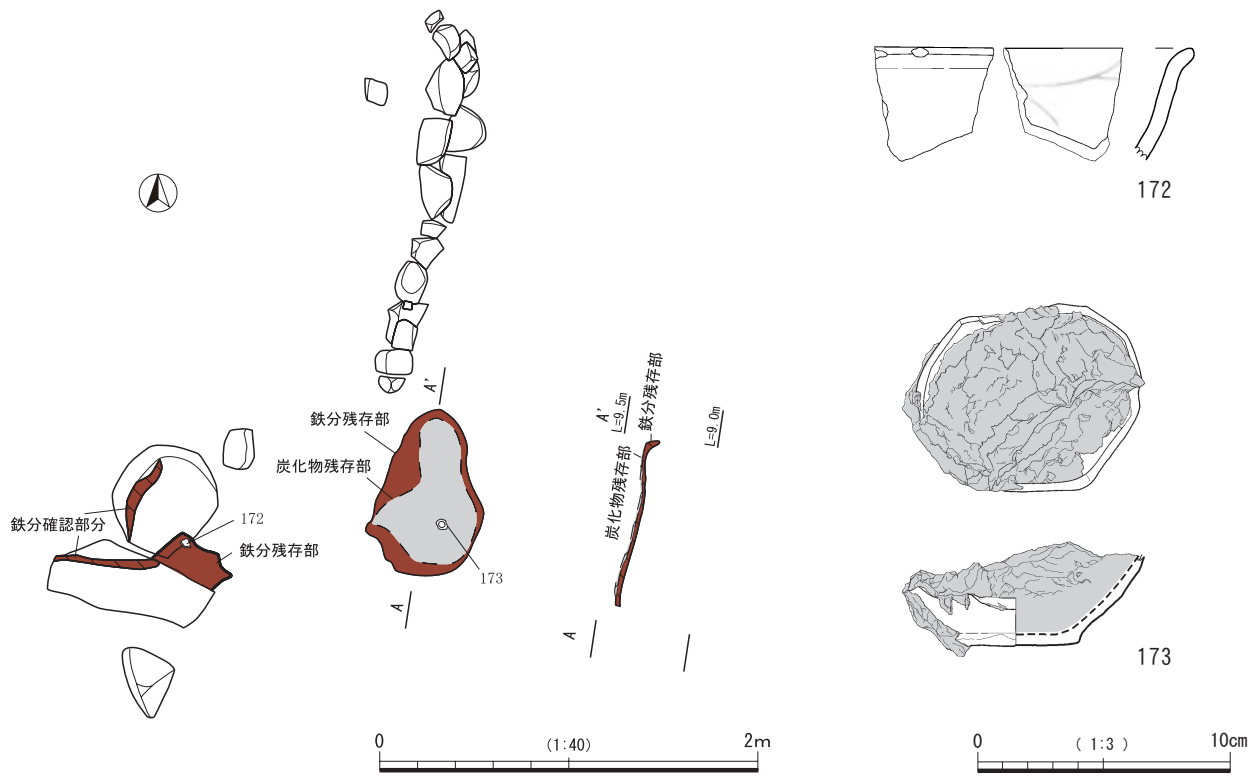
### カマド6号(第40図)

C-4区においてⅢ層土を取り除き検出された。カマド本体部分は奥行き約100cm、幅約80cm、高さ約10cm残存している。焚き口は焼土が残り、炭化物は炉部には無く、灰出し部のみで見られピットの攪乱を受けている。炉部の北側に煙道と思われる部分が残存している。炭化物のAMS年代測定においては、 $2\sigma$  暦年代範囲で1512calAD-1601calAD(72.4%)・1616calAD-1644calAD(20.2%)という結果が得られた。

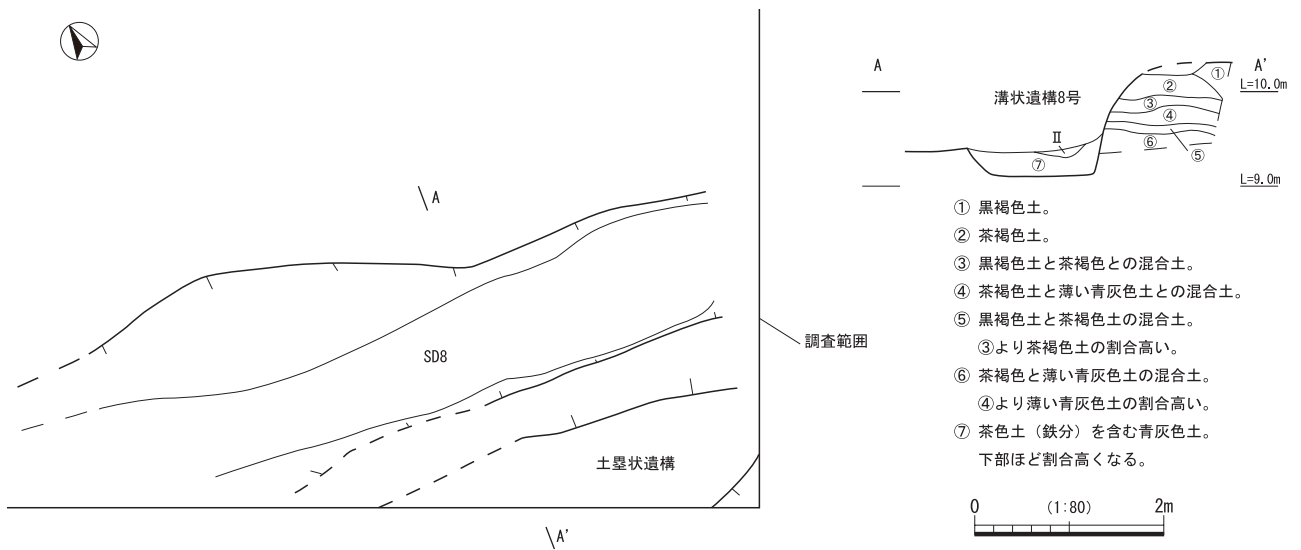
### カマド7号(第40図)

C・D-4区において検出された。カマド本体は奥行き約90cm、幅約60cm、煙道部が約40cm残存している。焚き口の上部が4～5cmほどの厚さで残っており、これはこのカマドが唯一である。炭出し部は約30cm掘り込まれており、床面には炭化物が広がっている。炭化物のAMS年代測定においては、 $2\sigma$  暦年代範囲で1521calAD-1592calAD(55.4%)・1620calAD-1659calAD(40.0%)という結果が得られた。

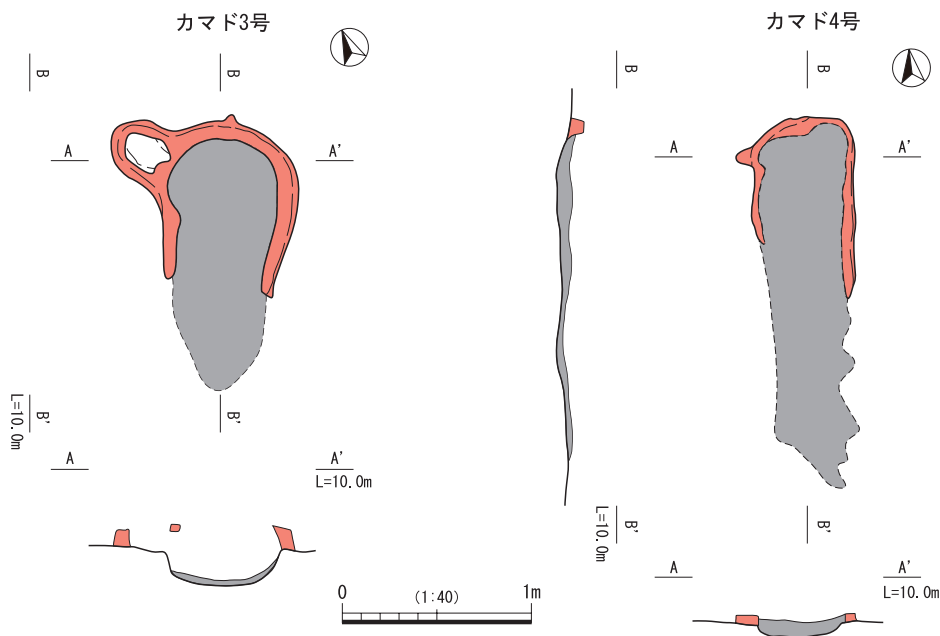
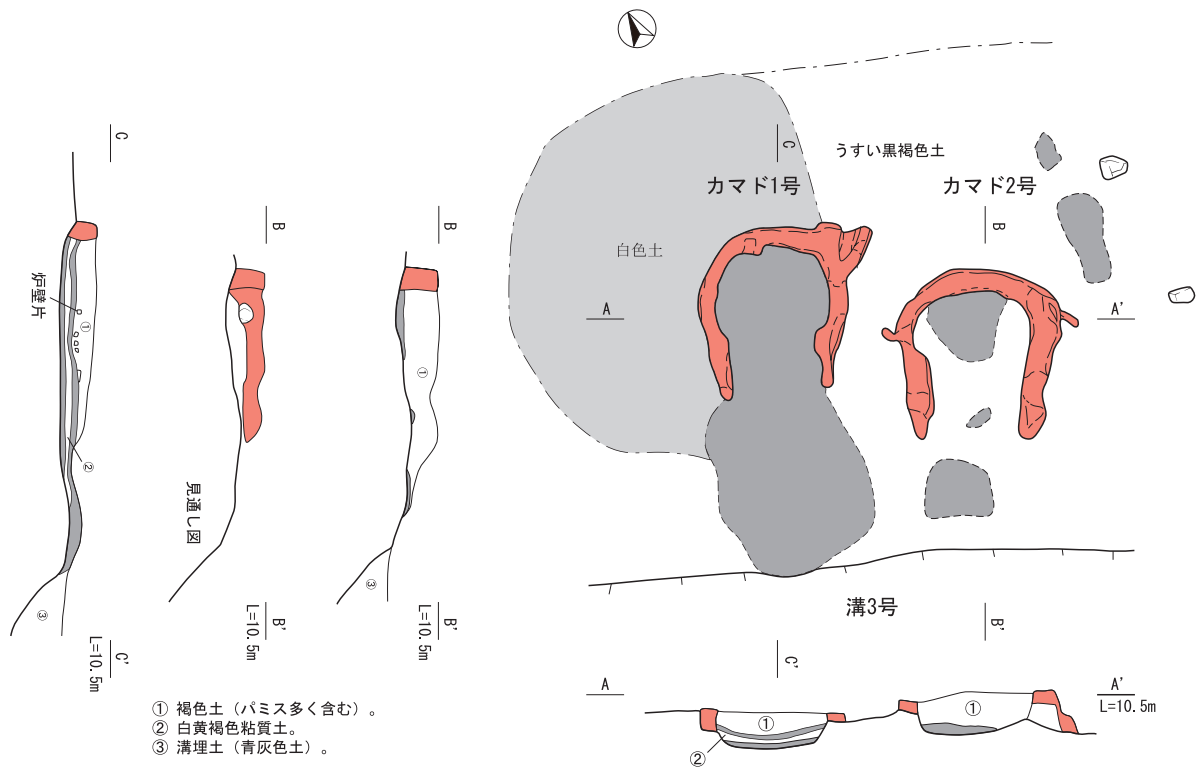




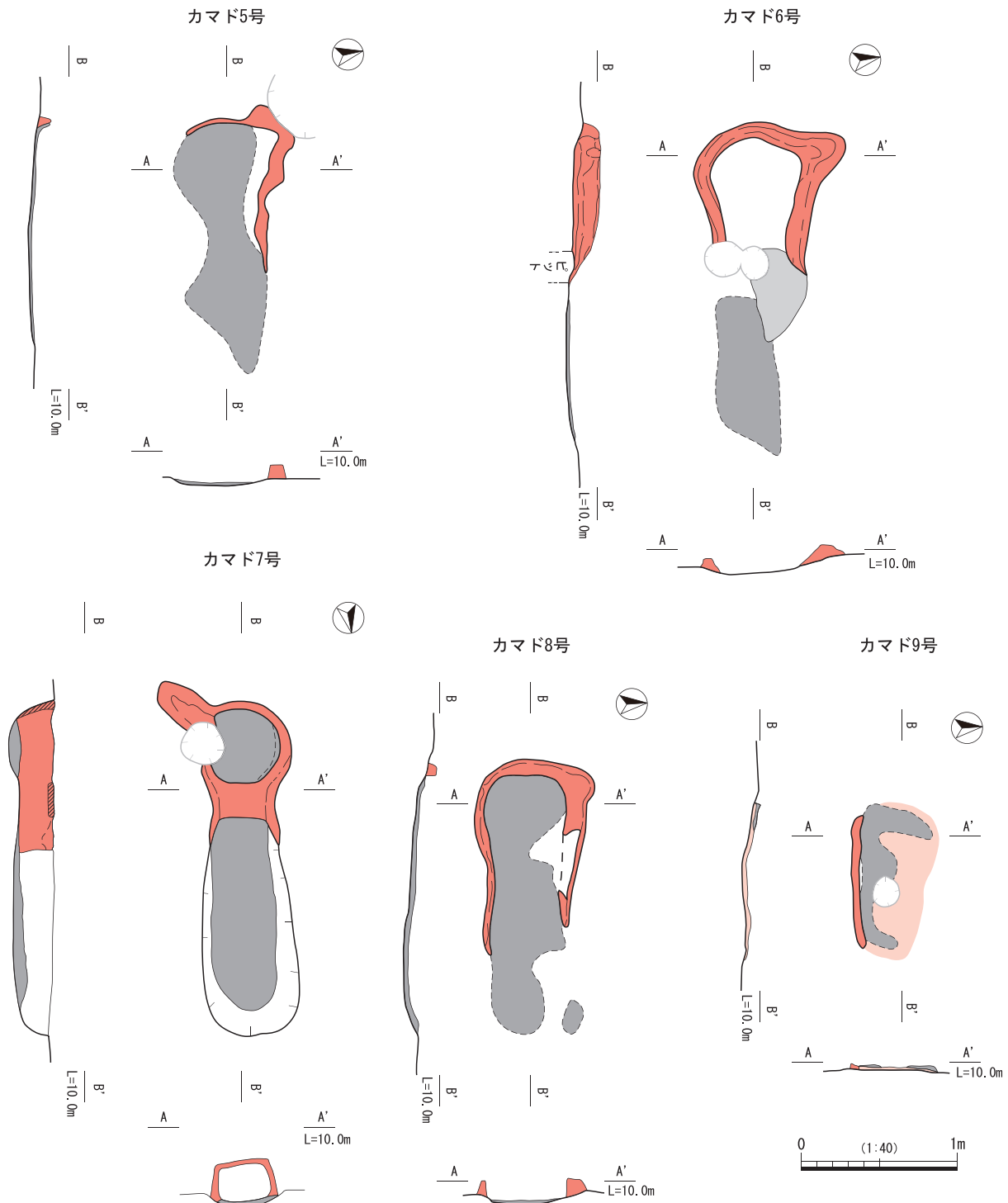
第37図 鍛冶遺構及び出土遺物



第38図 溝状遺構8号



第39図 カマド1~4号



第40図 カマド5～9号

カマド8号(第40図)

C・D-4区において検出された。カマド本体は奥行き約120cm、幅約70cm、高さ約10cm残存している。焚き口は東側を向いている。炭化物は炉部から炭出し部及び本体より70cm程度西側で見られた。カマド9号と並列している。

カマド9号(第40図)

C・D-4区においてⅢ層土除去後に検出された。カマド本体は奥行き約90cm、幅は不明だが60cm程度と推測される。焼成が甘く、残存度は極めて悪い。炭化物は炉部から炊き口部にかけて、南側を中心に残っている。焼土が炉部を覆うように広がっている。炭化物のAMS年代測定においては、2σ暦年代範囲で1491calAD-1603calAD(76.8%)・1614calAD-1640calAD(18.6%)という結果が得られた。

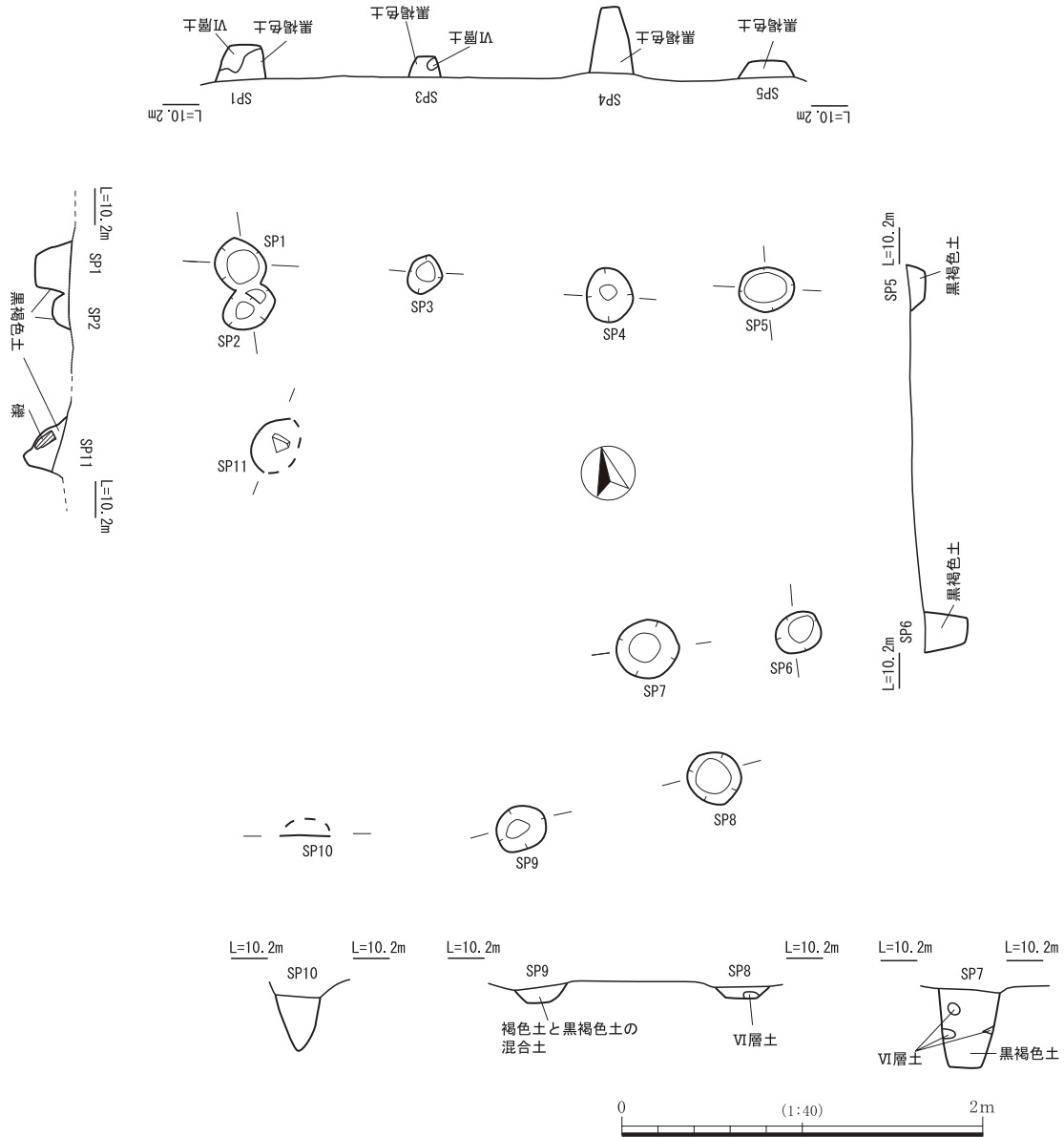
掘立柱建物跡1号(第41図)

A-2区で検出された。規格が3間×3間の建物と想定され、調査範囲外に広がる。検出分で梁行3.2m、桁行5mの大きさであり、土塁状遺構に囲まれた部分の外になる。柱穴の大きさは約20～30cm、埋土は黒褐色土が中心であった。

柱番号	長径	短径	深さ
SP1	32.1	26.0	20.0
SP2	30.2	20.2	10.0
SP3	24.0	18.3	12.0
SP4	32.0	28.0	37.8
SP5	32.4	24.0	8.0
SP6	28.0	24.2	24.0
SP7	36.0	32.1	44.0
SP8	30.3	28.0	6.1
SP9	28.2	26.2	8.0
SP10	28.0	-	29.8
SP11	34.1	25.9	18.0

柱穴番号	梁行柱間	柱穴番号	梁行柱間
SP1-SP11	106.4	SP1-SP3	104.2
SP11-SP10	216.1	SP3-SP4	103.5
SP5-SP6	188.0	SP4-SP5	88.0
		SP7-SP6	88.8
		SP10-SP9	118.0
		SP9-SP8	116.3

※単位はcm



第41図 掘立柱建物跡1号

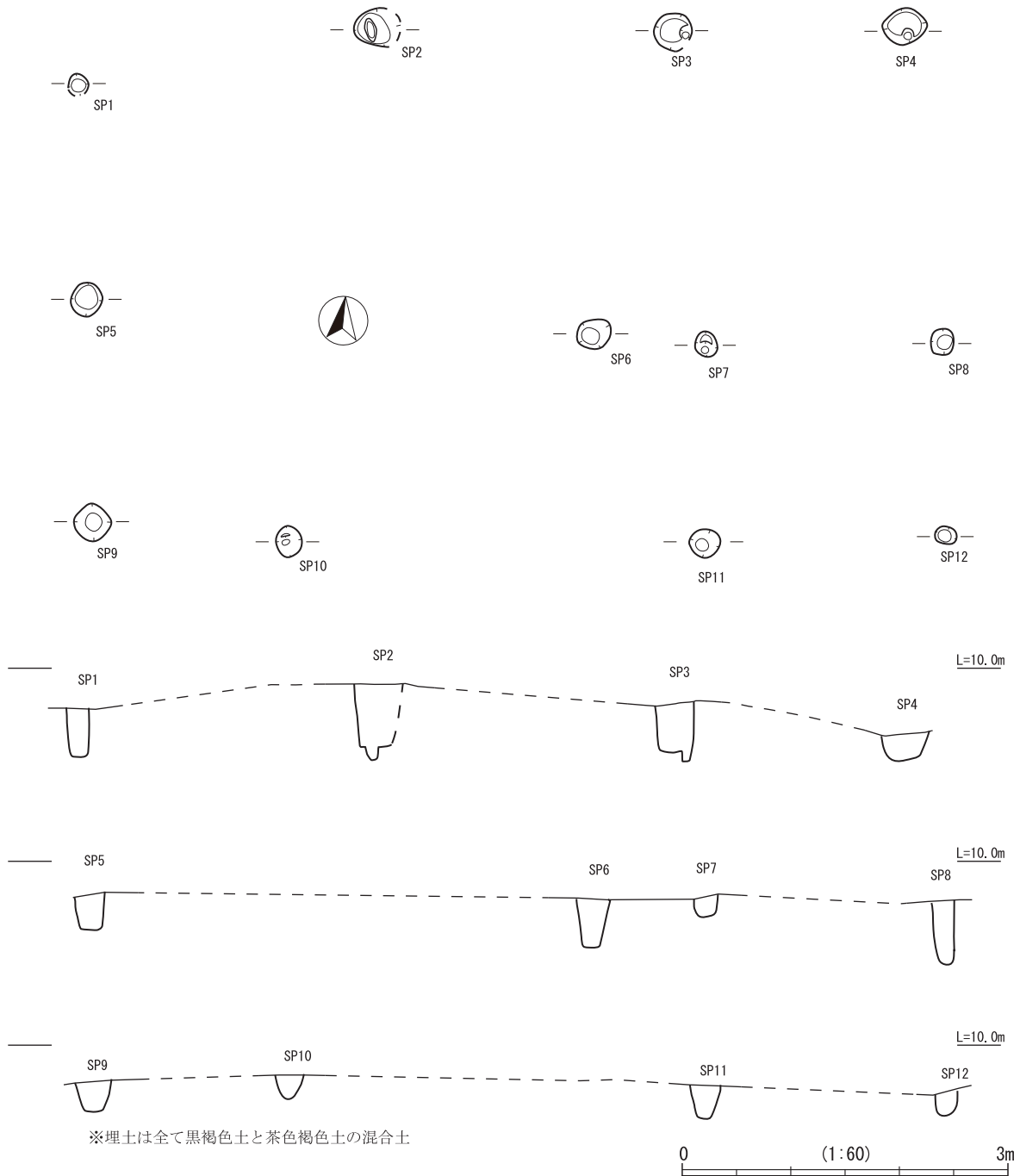
掘立柱建物跡2号(第42図)

B-4区で検出された。規格が2間×3間の総柱建物と想定される。北側にピットが多くみられるため、まだ大きい建物であった可能性もある。梁行4.6m, 桁行7.9mの大きさであり、土墨状遺構に囲まれた部分の南側に位置する。柱穴の大きさは約15~40cmで、埋土は黒褐色土や茶褐色土が中心であった。

柱番号	長径	短径	深さ
SP1	21.6	19.2	42.0
SP2	45.0	36.0	70.8
SP3	36.0	34.8	55.2
SP4	42.0	34.8	24.0
SP5	33.0	28.8	33.6
SP6	33.4	28.8	45.1
SP7	24.0	20.4	18.0
SP8	24.2	21.0	57.6
SP9	36.0	34.8	27.0
SP10	30.1	24.0	22.8
SP11	28.8	27.0	30.2
SP12	20.4	15.6	21.0

柱穴番号	梁行柱間	柱穴番号	梁行柱間
SP1-SP5	198.2	SP1-SP2	284.4
SP5-SP9	207.0	SP2-SP3	273.0
SP3-SP7	291.2	SP3-SP4	217.2
SP7-SP11	183.0	SP7-SP8	217.2
SP4-SP8	292.8	SP9-SP10	183.0
SP8-SP12	178.8	SP10-SP11	387.0
		SP11-SP12	220.8

※単位はcm



第42図 掘立柱建物跡2号



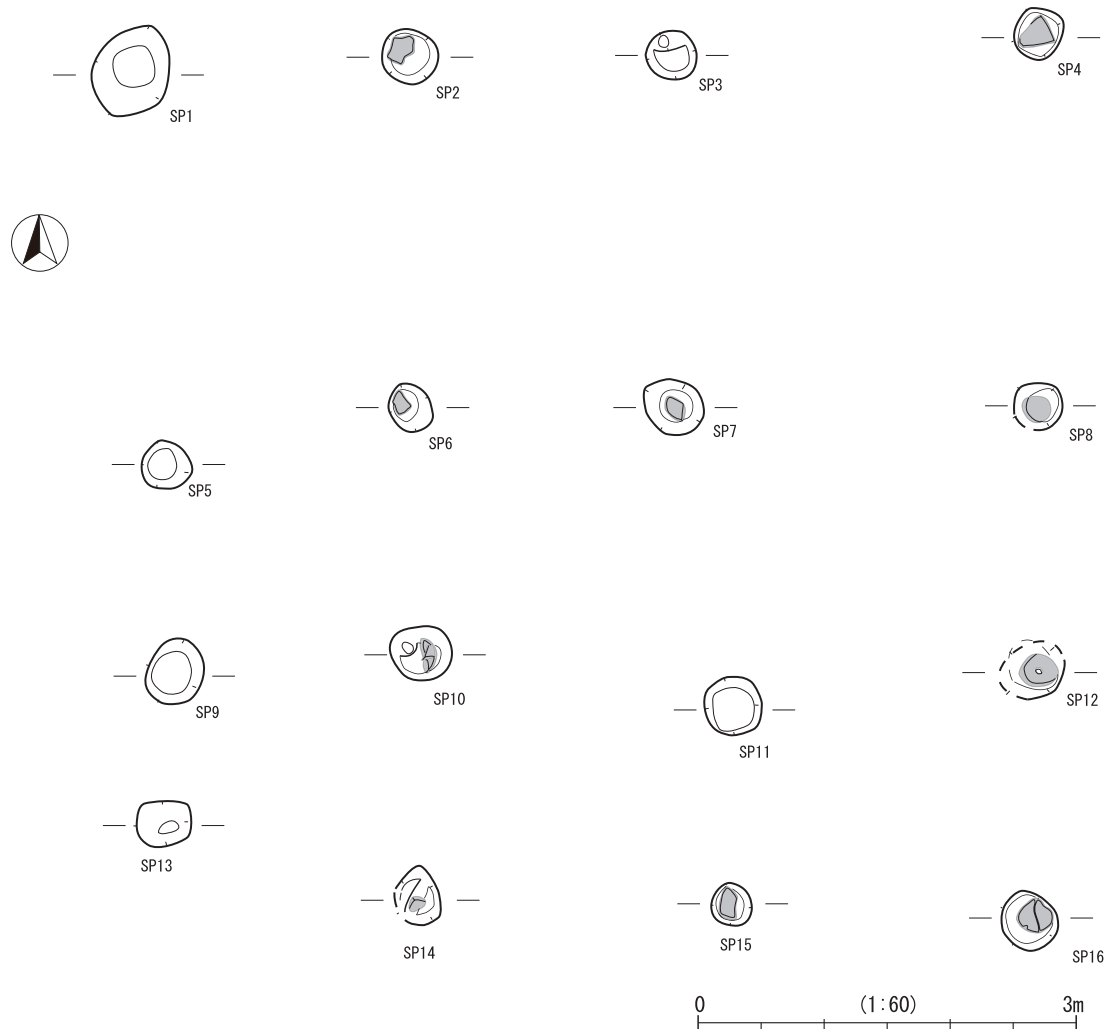
掘立柱建物跡3号(第43・44図)

B・C-3・4区で検出された。規格が3間×3間の総柱建物である。周囲にピットが多く、底を持っていた可能性がある。梁行6.6m、桁行7.2mの大きさであり、土塁状遺構に囲まれた部分の中心に位置する。柱穴の大きさは約40～60cmと大きく、埋土は黒茶褐色土が中心であった。礎石を持つピットは10基あり、礎石のうち石臼を使用するものがSP10・12・16の3基、石塔と思われる石を使用するものがSP8の1基、板石を使用するものが6基であった。Ⅲ層上面ではほぼ見えず、Ⅲ層を取り除いて検出された。なお、礎石に使用された石臼などのうち、SP8のものが256、SP12が250、SP16が247の掲載番号で図化している(第58図)

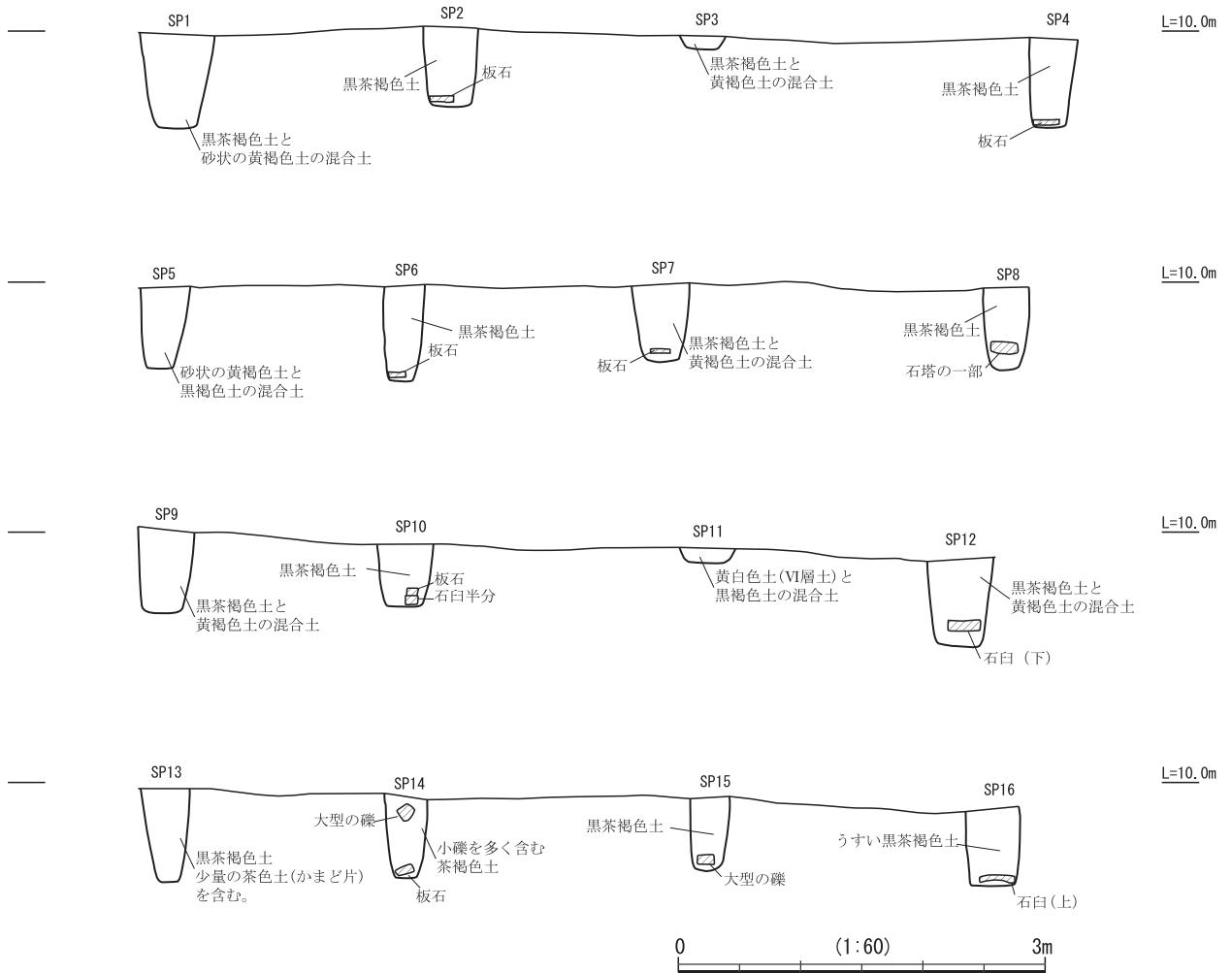
柱番号	長径	短径	深さ
SP1	78.0	61.2	77.4
SP2	45.6	43.2	66.0
SP3	42.0	39.0	10.8
SP4	43.8	40.8	71.4
SP5	40.8	38.4	66.6
SP6	39.0	35.4	78.6
SP7	52.2	44.4	63.6
SP8	42.0	40.8	67.2
SP9	55.2	43.2	69.0
SP10	50.4	46.8	51.0
SP11	49.2	51.6	12.0
SP12	55.2	43.2	72.0
SP13	46.8	39.0	77.4
SP14	48.0	36.0	66.6
SP15	36.0	33.0	60.0
SP16	49.2	45.0	64.2

柱穴番号	梁行柱間	柱穴番号	梁行柱間
SP1-SP5	315.0	SP1-SP2	219.0
SP5-SP9	165.0	SP2-SP3	208.8
SP9-SP13	121.2	SP3-SP4	294.0
SP2-SP6	279.0	SP5-SP6	202.8
SP6-SP10	196.2	SP6-SP7	209.0
SP10-SP14	199.2	SP7-SP8	285.0
SP3-SP7	279.0	SP9-SP10	196.8
SP7-SP11	241.8	SP10-SP11	252.0
SP11-SP15	160.8	SP11-SP12	239.1
SP4-SP8	297.0	SP13-SP14	213.0
SP8-SP12	211.2	SP14-SP15	249.0
SP12-SP16	204.0	SP15-SP16	235.2

※単位はcm



第43図 掘立柱建物跡3号①



第44図 掘立柱建物跡3号②

(3)遺構(2期 Ⅲ層上面) (第45・46図)

遺構として、Ⅲ層上面より石列遺構、開渠、土坑墓3基、溝状遺構1条、炭化物集中区1か所が検出された。またC-4区で刀子(259)が出土している。溝状遺構9号が6号に流れ込むように、4～8号はこの時期も活用されていたと考えられる。Ⅲ層上面コンタ図をみると、北側からゆっくり下るような地形であるが、A-4・5区付近はやや急となる。土坑墓内の人骨については、鹿児島女子短期大学竹中教授に鑑定していただいた。

石列遺構 (第47図)

B・C-3・4区の中央部において、Ⅲ層上面で検出された。石材は安山岩と凝灰岩である。石列はⅢ層土に食い込んでおり、Ⅱ層土に覆われる直前の位置は保たれていると推定される。炭化物が集中する部分では、炭化物と焼土、その上面に陶磁器・土師器が残存していた。このうち、陶磁器の碗1点(177)は、B-5区のⅢ層上面における炭化物集中区内6の近くに破片が置かれていた。この部分は何らかの焼却施設であったと推測される。陶磁器の年代は16c中頃～後半で、炭化物のAMS年代測定においては、2σ暦年代範囲で1493calAD-1602calAD(74.9%)・1615calAD-1645calAD(20.5%)という結果が得られた。

出土遺物のうち、残存状況の良い4点を図化した。174は土師器皿で、口径15.4cm、器高2.4cmと、幅が広く低い形状である。底面の糸切り痕の上に、ハケ状の痕跡が

残る。外面の腰部は面取りされている。形状から、16世紀後半のものと考えられる。175は白磁皿で、見込みと高台付近より下部が露胎する。高台内面中央に赤色顔料が付着している。森田分類の白磁皿E群に比定される。176は小野分類の皿E群に比定されるもので、口縁内面に四方櫛文が描かれ、見込み部に二重圏線、その中に山水や人物が描かれている。177は小野分類の碗E群に比定されるもので、見込み及び外面胴部に草花文が描かれる。

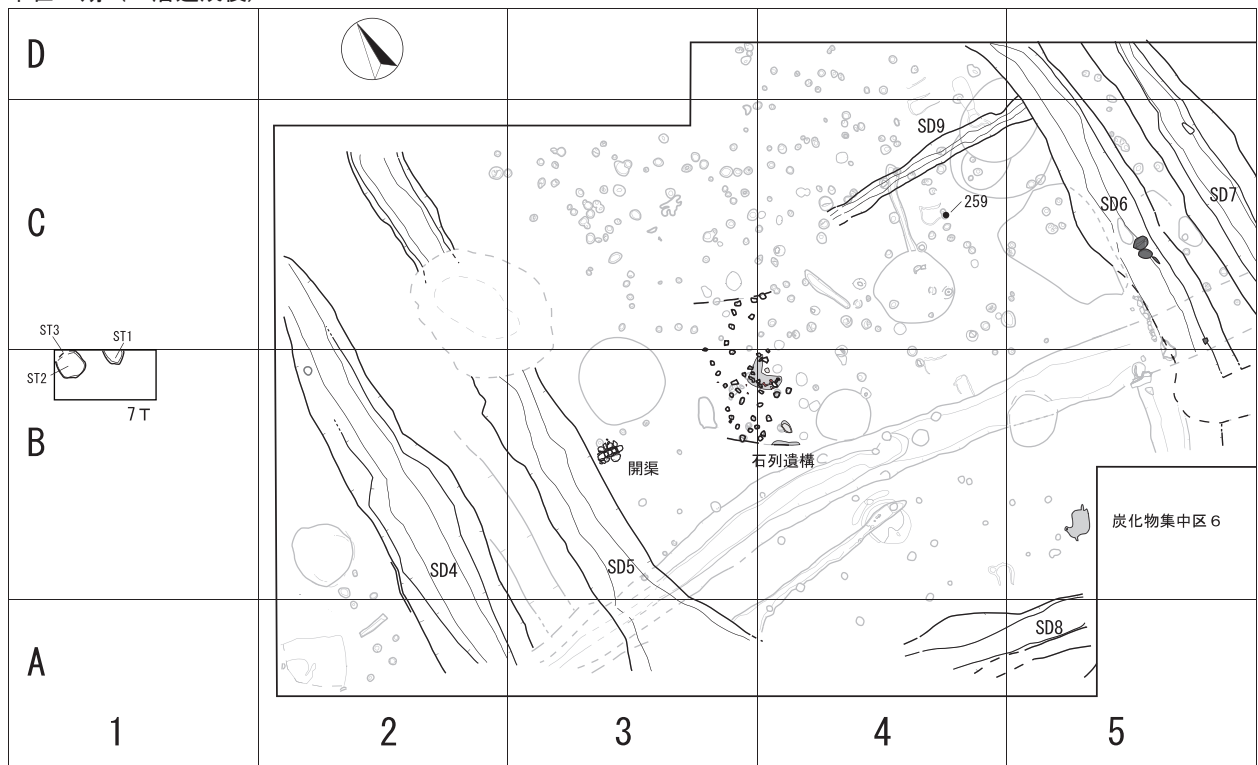
B-5区 炭化物集中区6(第47図)

Ⅲ層土上面で検出された。炭にやや厚みがあり、範囲が広い。

開渠(第48図)

B-3区において、土層断面精査時に検出された。板石を組んで作られており、蓋石が無いので「開渠」とした。上面は溝部分と共にⅡ層土で埋められており、Ⅲ層土上面に溝状遺構に向けて排水するように作られている。中央の水路部分の上段側から小型の平石をかませて角度をつけ、板石を下段側に向けて平置きし、周囲に板石を横置きし、その外側を大型の石で押さえている。検出面より、石列遺構と時期は同じとみられる。石材は全て安山岩で、安山岩の板石はⅡ層土内や溝状遺構埋土中に多く見られたため、これ以外にも作られたが破壊された可能性が高い。水路の長さは約80cmであった。

中世2期(Ⅲ層造成後)



ST: 土坑墓

SD: 溝状遺構

第45図 中世遺構配置図(2期)

0 10m  
S=1/300(1グリッド10m×10m)

### 溝状遺構9号(第49図)

C-4区において、Ⅲ層上面で検出された。東西方向へ広がり、長さは検出できた分で約9m、幅は約80cmである。水は東側へ流れ、溝状遺構6号に合流する。埋土はすべてⅡ層土であり、Ⅲ層上面の排水施設と考えられる。

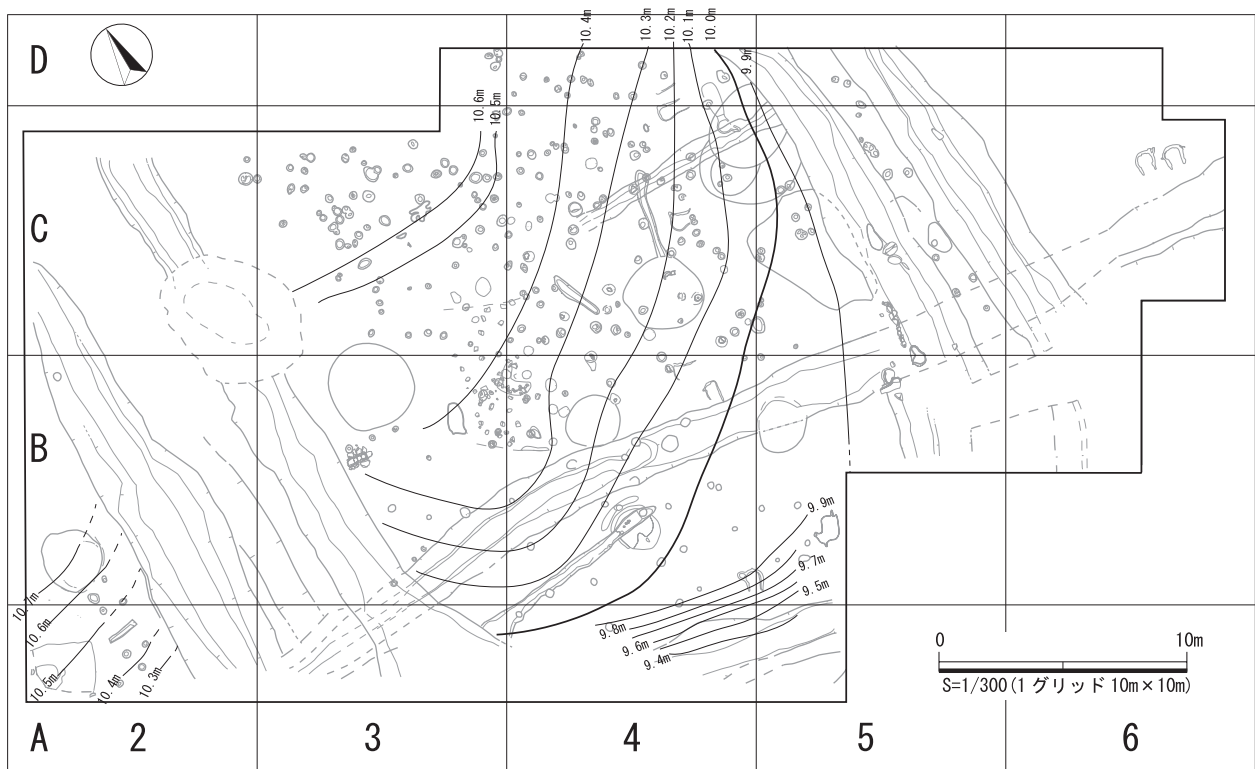
### 土坑墓1号(第50図)

B-1区で、確認調査時に検出された。上面はプール建築に伴う攪乱を受けているが、Ⅲ層土を掘り込んで作られている(第7図)。埋土はⅢ層土を含んでおり、Ⅱ層土は入っていないことから、墓の年代はⅢ層造成後の16世紀頃と考えられる。墓の平面の形状は楕円で、直径は1m弱と狭い。底面より10cm上から骨が残存しており、大腿骨の可能性が高い。また釘が出土していることから、木製の棺に足を曲げた姿勢で入り、埋葬されたと推定される。本調査時には調査範囲外となったため周辺の調査は行っていないが、西側の国分小学校側まで含め、現代の攪乱が及んでいない部分は墓が残存する可能性が高い。

### 土坑墓2・3号(第50図)

B-1区で、確認調査時に1号と共に検出された。埋土等も1号と同じであり、同時期と考えられる。3号を2号が切っている。平面形は2号は円形、3号は残存部が少なく不明である。2号墓には骨が残存しており、上腕骨か肩甲骨と思われる。埋土内に鉄釘が含まれており、埋葬方法等は1号と同じであろう。

遺物は鉄釘が3本出土している。178~180はすべて角釘で、先を丸めたり、直角に折り曲げられている。これは、板等に打ち付けた後、飛び出した先を金槌等で叩いて曲げたと考えられる。

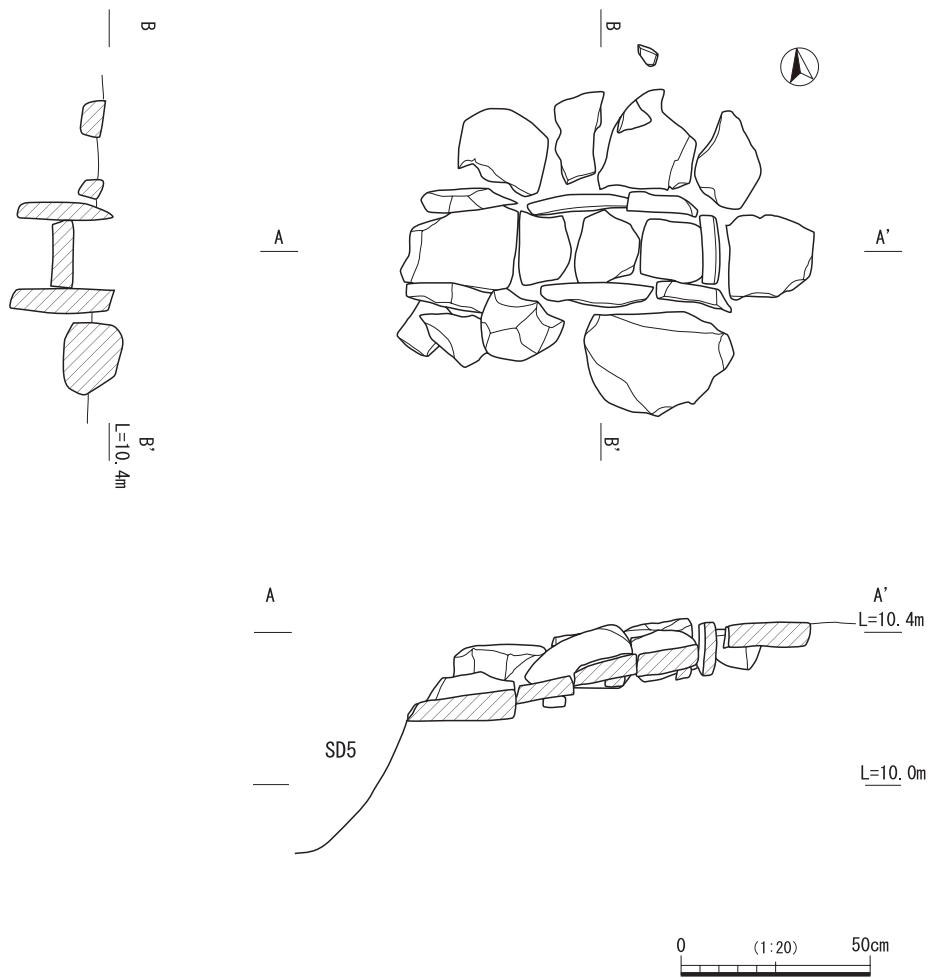


第46図 Ⅲ層コンタ図

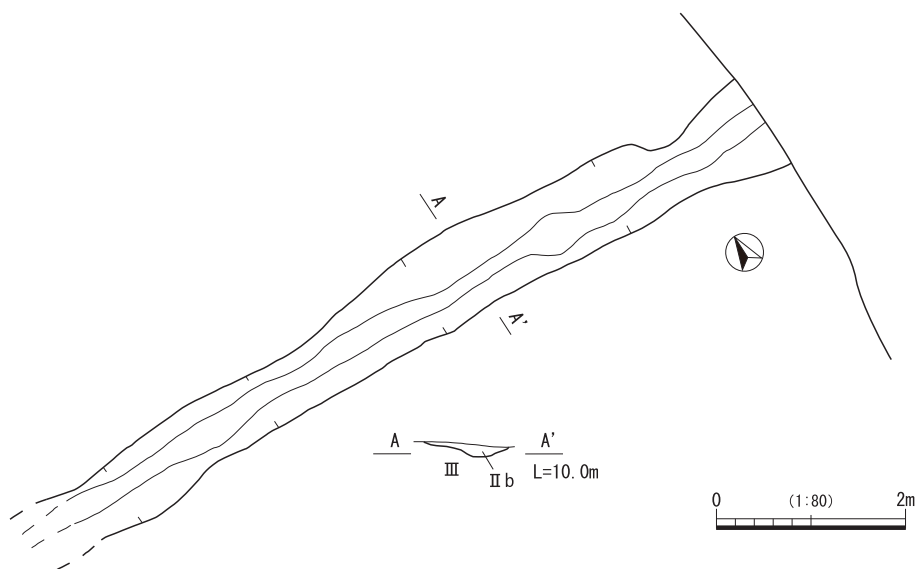


第47図 石列遺構・炭化物集中区6及び出土遺物

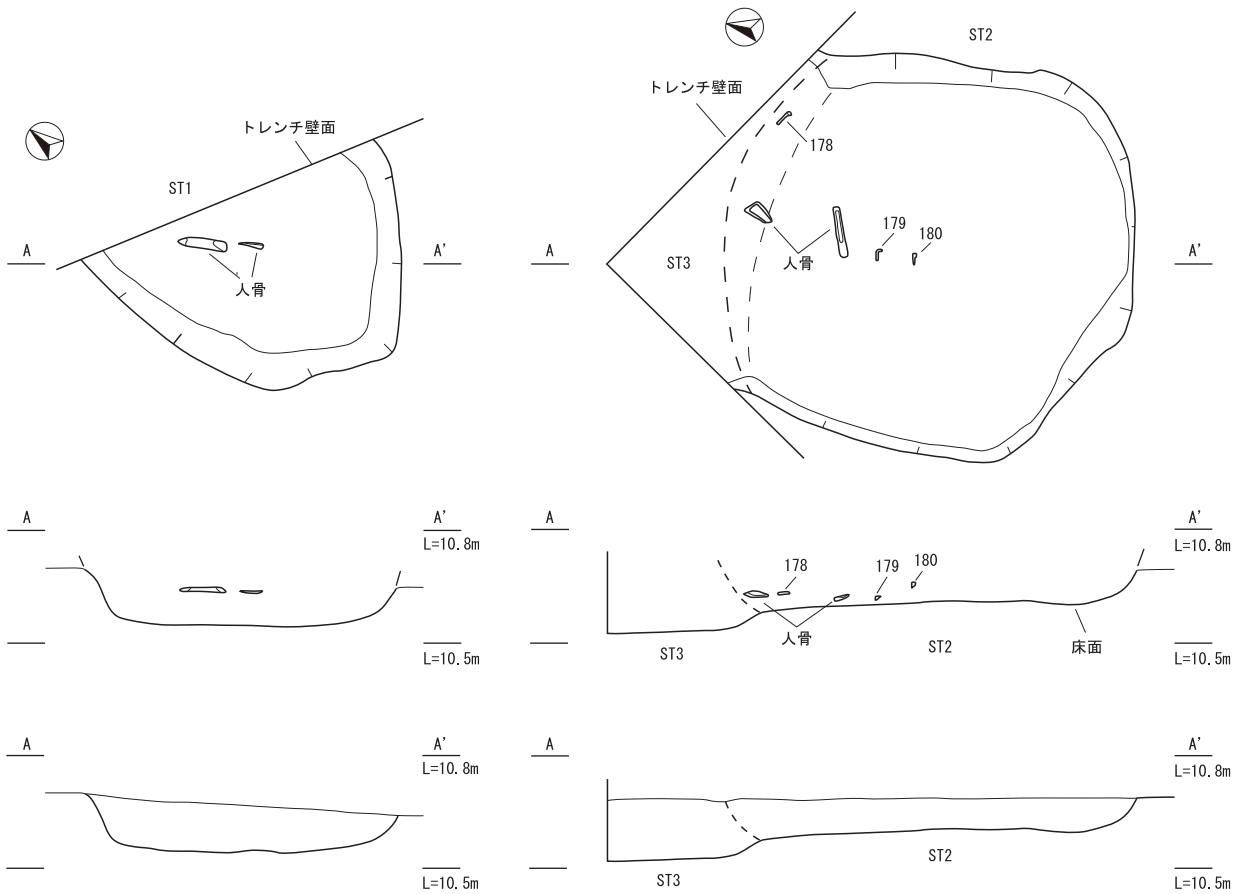
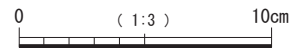
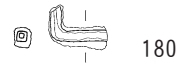
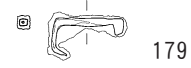
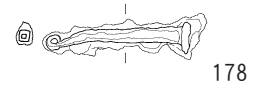
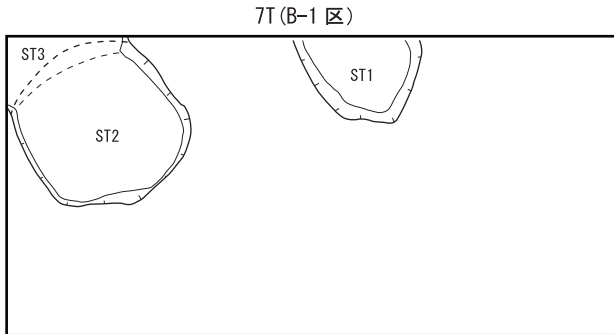




第48図 開渠



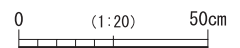
第49図 溝状遺構9号



ST1埋土  
黄褐色土を少量含む黒褐色土。  
軽石、礫少ない。

ST3埋土  
濃い黒緑色土。  
軽石、礫はST2と比べ少ない。

ST2埋土  
少量の黄褐色土を含む、薄い黒緑色土。  
軽石、礫やや多い。



第50図 土坑墓1~3号及び出土遺物

#### (4) 遺物(第51～59図)

##### 土師器(第51・53図)

181～183は皿で、すべて糸切り底である。181は広幅で底部が面取りされている。182は薄い赤褐色を呈し、底部接地面が鏝状に広がっている。183は小型で、微量の煤が付着していることから、灯明皿であったと考えられる。225は鍋か釜の口縁部で、外面に煤が付着する。226は鉢で、口縁部が大きく外反する。

##### 白磁(第51図)

184～191は白磁である。184は大宰府分類の碗Ⅳ類に比定されるもので、肉厚な玉縁状の口縁部である。185・186は森田分類の碗E群に比定され、口縁部は内湾し、外面に波状の凹線がみられる。186は口縁部が外反し、体部外面下半は露胎である。187は森田E群に比定される皿で、口縁部は外反する。188は大宰府分類の碗Ⅴ類に比定され、見込みに輪状に目跡が残り、体部外面の高台境付近まで施釉されている。189は森田分類の皿E類に比定され、碁笥底で見込みに花文が描かれる。190は森田D群に比定される皿で、残存部より、見込みの5か所に目跡が、高台の5か所に抉り込みが入るものと考えられる。191は多角坏で、胴部が八角形を呈する。腰部から高台は露胎する。

##### 染付(第51図)

192～199は染付である。192～196は小野分類の碗C群に比定され、外面に192は草花文、193は波状文、194は口縁に襷文、胴部に芭蕉文が描かれる。195～197は漳州窯産である。195は外面口縁部に襷文帯が、胴部に芭蕉文が描かれる。196は見込みに蓮花文が、外面に芭蕉葉文が描かれる。197は小野皿C群に比定され、残存部から碁笥底であると想定される。198・199は小野皿B群に比定され、どちらも外面胴部に唐草文、199は見込みに獅子が描かれる。200は赤絵皿の口縁部である。内面口縁と見込みに二重圏文が描かれる。見込みに緑釉が付着しており、何らかの文様と推測される。

##### 青磁(第52図)

201～218は龍泉窯系の青磁である。201～204は大宰府分類の碗Ⅰ類に比定されるものである。201は無文、202・203は内面に花草文が入る。203は高台内及び畳付は露胎する。204は釉の塗りが薄いためか、釉が剥けている部分が多い。205は大宰府分類の碗Ⅱ類に比定され、鏝連弁文がみられる。206～208は上田分類のB類に比定される碗で、206は剣頭が省略されている。207・208は細線の間隔で剣頭を施している。209は上田C類に比定される碗の口縁で、雷文帯の一部が残る。210・211は上田D類に比定される碗で、口縁部が外反する。残存部は全て施釉され、文様は見られない。212・213は碗か皿の底部で、

見込みと高台内は釉剥ぎされている。213は見込み部分に重ね焼きの際の高台の一部が融着している。214は高い高台をもち、見込み部分に薄く花文が描かれる。215は外面体部に連弁文の一部と思われる6本の細線が引かれ、体部内面に文様の一部と思われる4本の曲線が残る。見込みには圏文、その内部に花文が描かれる。216は見込みに圏文及びその内部に花文、胴部内外面に片切彫りで文様を描いている。濃緑色で丁寧な作りであり、高台内は蛇の目状に釉剥ぎされている。14世紀以降の碗と考えられる。217は明代の皿で、口縁部は外反し、高台内は釉剥ぎされている。218は稜花皿で、口縁内面に4本の櫛状工具で施文されている。

##### 中国陶器(第53図)

219～222は中国陶器である。219は黒釉の天目碗で、体部が直線的に開き、口縁部は弱く屈曲する。220は壺の体部であり、灰色を呈する。221は外面に褐釉がかかる壺で、把手部が残る。222は大型の甕の体部で、外面に逆U字型の線刻がみられる。

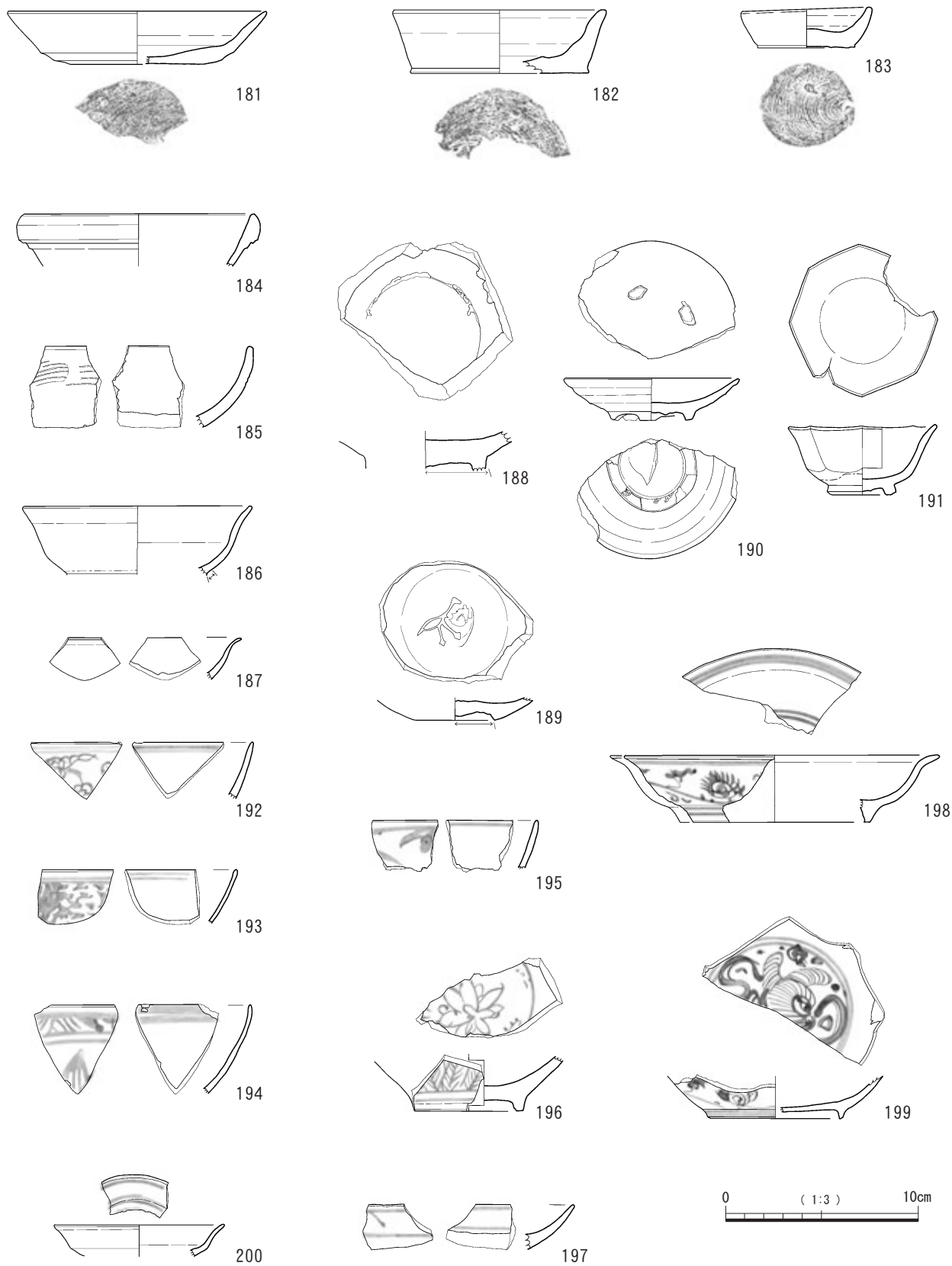
##### 中世須恵器(第53図)

223・224は中世須恵器で、東播磨系の須恵器播鉢の口縁部である。

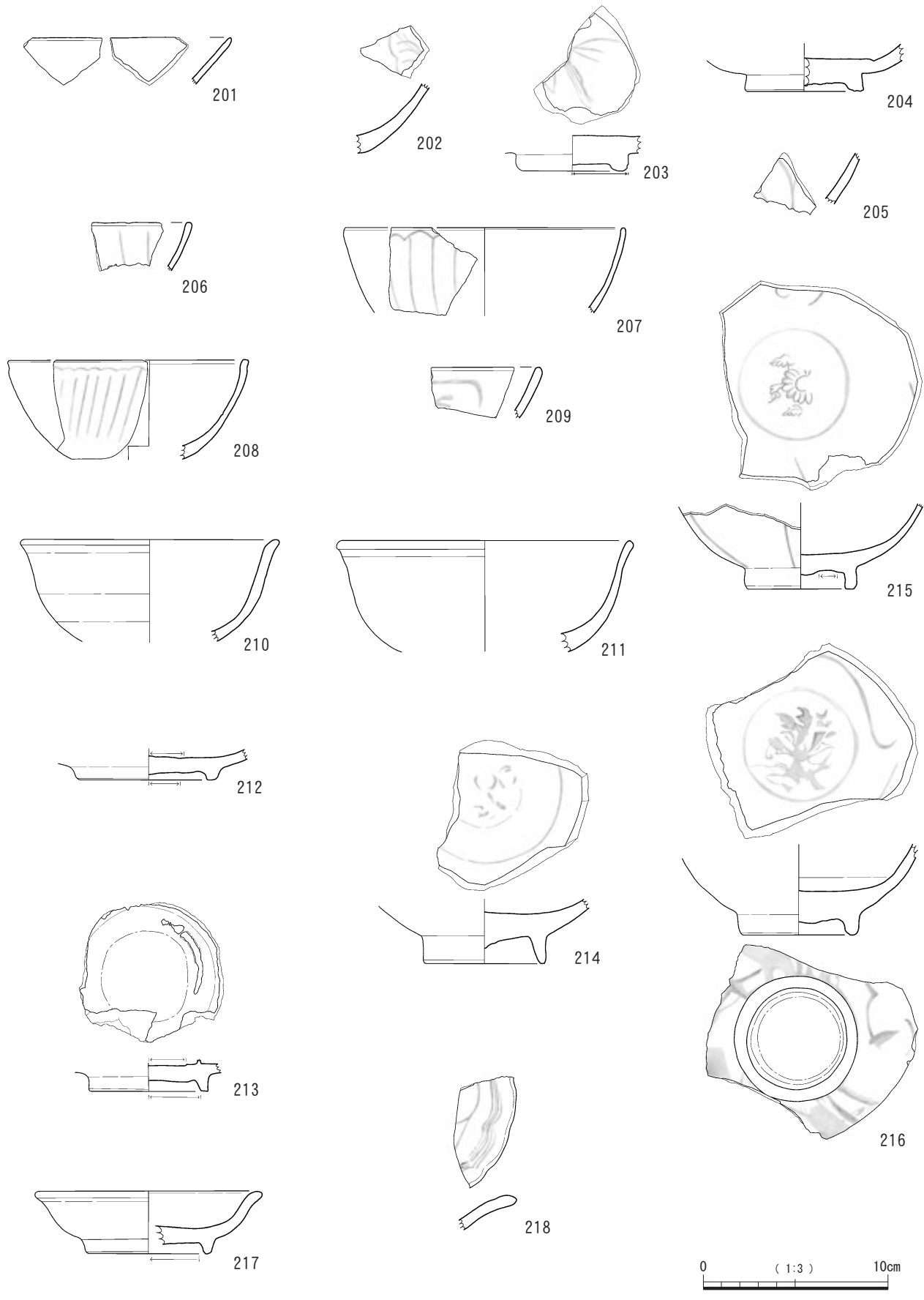
##### 播鉢(第54・55図)

227～233は備前産と考えられる播鉢である。227は口縁部が菱形を呈するもので、口縁部は外傾し、やや肥厚気味となっている。播目は4本以上である。228は茶褐色を呈し、口端上角と下角が尖って突出している。229～231は、口端上角の突出が上方へと拡張するもので、229は口端上角が丸く、231は尖っている。232は口縁部が「く」の字に内傾しており、内側に明瞭な稜が付く。233は色調などから231と同一個体の可能性があり、10本の播目が確認できる。227・228は乗岡編年の中世3期(14c中葉～15c前葉)、229～231は中世5期(15c第3四半期～15c末)、232は中世6期(16c初頭～16c第3四半期)に該当すると考えられる。

234～240は備前産以外と考えられる播鉢である。234は内面が赤褐色で、6本の播目が確認できる。口唇部断面は中央に凹みがあり、内側がやや肥厚する。235は内面が灰色、底部外面が赤褐色を呈し、腰部内側が摩耗している。236は注口が1.5cm程度残存している。播目は7本である。出土区は異なるが、播目の特徴や色調から、234～236は同一個体の可能性がある。237は灰白色を呈し、4本の播目を2cm間隔で引いている。238は播目が6本で、礫や砂を多く混入し、口縁部がやや肥厚する。239は焼成が悪い為か外面の剥離が多く、腰部内面付近で6本の播目が密に重なっている。240は腰部から底部で、赤褐色を呈し、6本の播目を持つ。

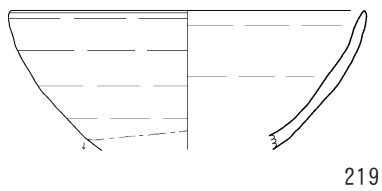


第51図 中世出土遺物(土師器・白磁・染付)

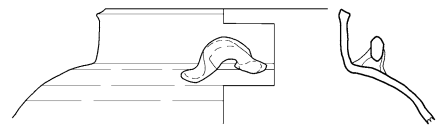


第52図 中世出土遺物(青磁)

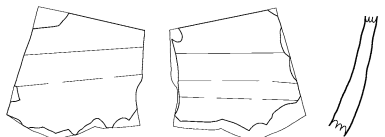




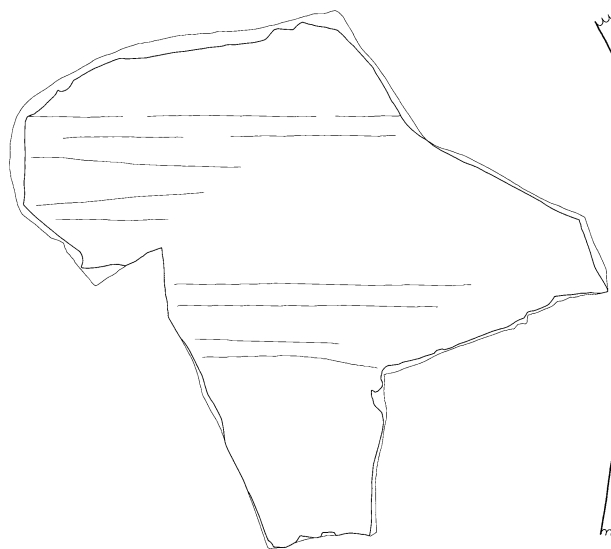
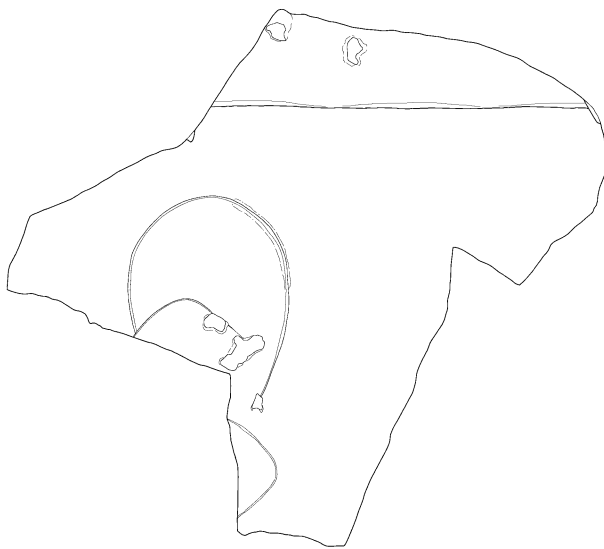
219



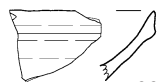
221



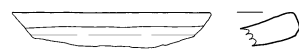
220



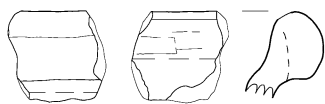
222



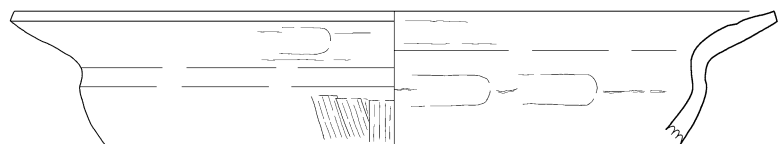
223



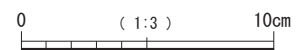
224



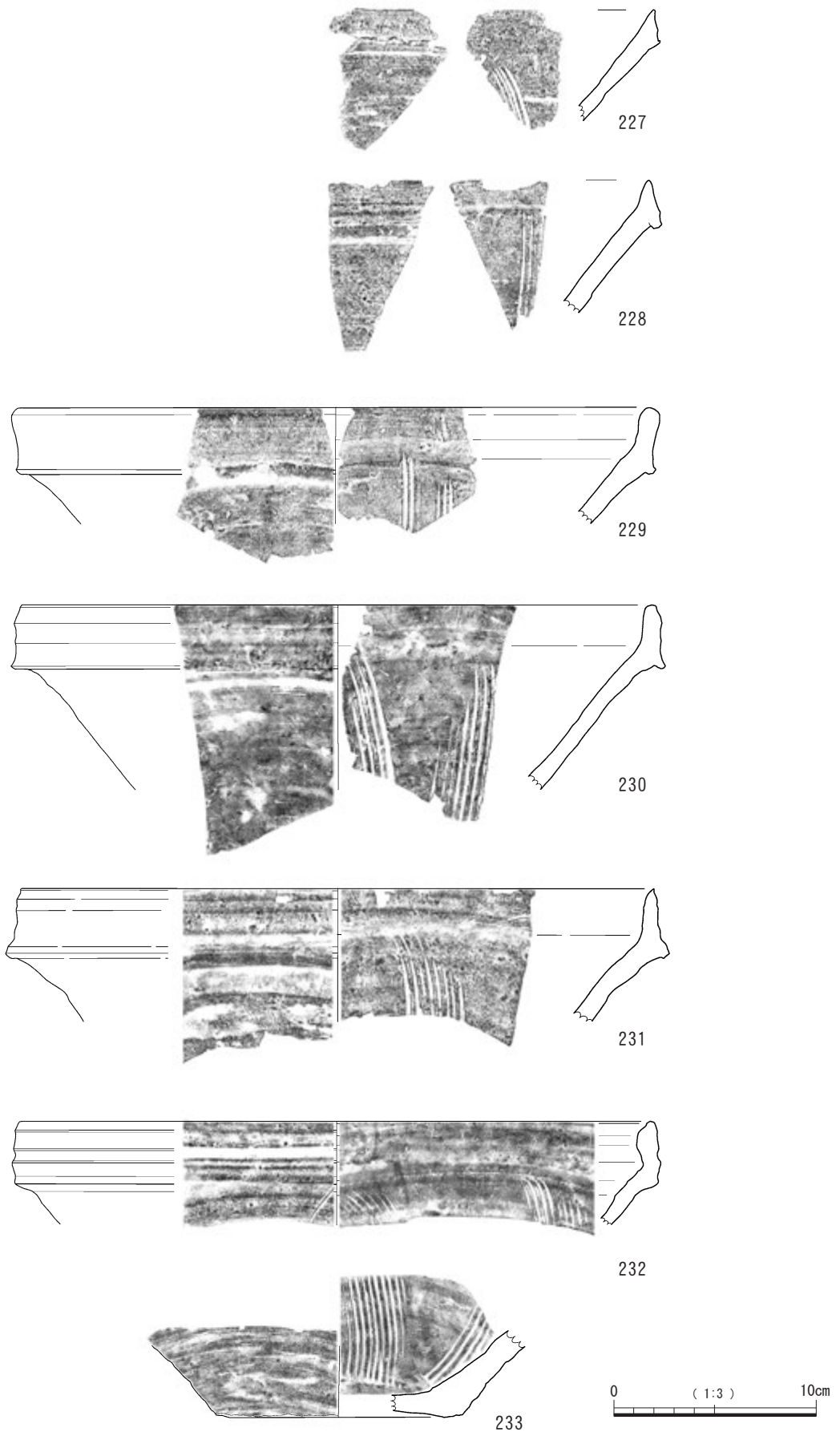
225



226



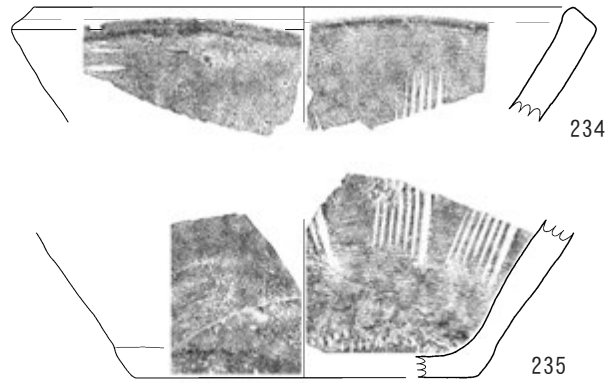
第53图 中世出土遺物(中国陶器·須恵器等)



第54図 中世出土遺物(備前播鉢)

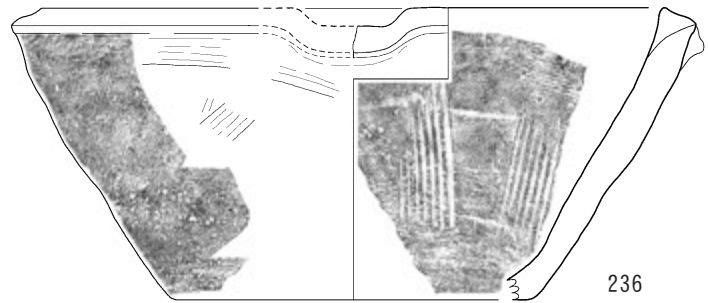
**茶釜・羽釜(第56図)**

241～246は茶釜で、241・242は羽釜の可能性はある。241は鏝の上面まで煤が付着し、内外面に刷毛目がみられる。242は刷毛目の後、全体をナデ消している。243・244は茶釜である。鏝側面より下に煤が付着する。243は胴部外面上部に花文がスタンプされている。244はやや上向きの鏝を持ち、耳部が残存している。245・246は色調や厚さなどから244の一部と思われる、花文のスタンプが残る。



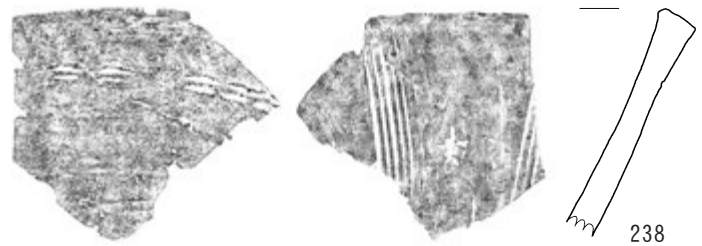
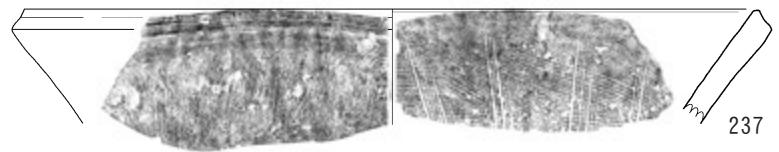
**石臼(第57図)**

247～249は上臼で、247は挽き木打ち込み孔が3か所にみられる。臼面は、1か所の打ち込み孔の下面が露出するまで摩耗している。248はやや厚く残存している。249は播面が偏ったためか、やや臼面が傾いている。臼面の目は247は全く残存せず、248・249は二分画分のみ確認できる。250は下臼で、平面は隅丸方形に近い。心棒孔は直径3cmで、臼面の目は残っていない。



**茶臼(第58図)**

251～253は茶臼である。251は上臼で、砂岩製である。臼面の周縁は平坦で、中央に放射状に6本の区画溝が残る。挽き木打ち込み孔周囲の台座部分は方形をなす。上面から見て2つの打ち込み孔は正対せず、ややズレがみられる。252は下臼で、約4分の3を欠損しており、臼面の摩耗が激しいが、一部残っている。253は下臼の受け部であり、252とは石材が異なる別製品である。

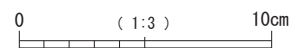
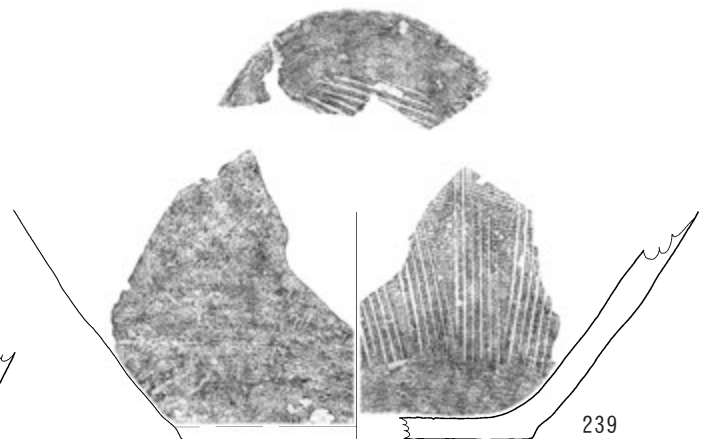
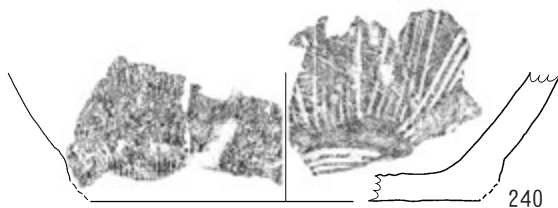


**板碑(第58図)**

254は板碑である。溶結凝灰岩製で、頭部を三角柱状に削り、額に2条の線を正面・側面に巡らせ、その下に仏様を表す梵字である「バン」「ビー」を断面三角状に彫りこんでいる。正面の梵字間には段がつく。裏面及び下面は無加工である。

**石塔(第58図)**

255は五輪塔の火輪と考えられる。軽石製で、中は四角錐状に削りぬかれている。256は礎石として使用されていたものであるが、五輪塔の風輪か水輪の可能性もある。



第55図 中世出土遺物(播鉢)

滑石製石鍋 (第59図)

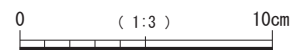
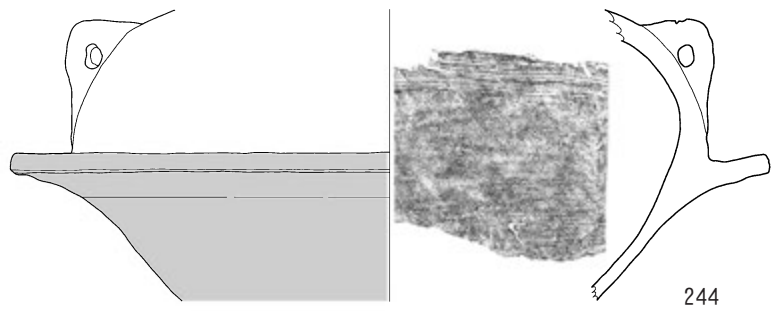
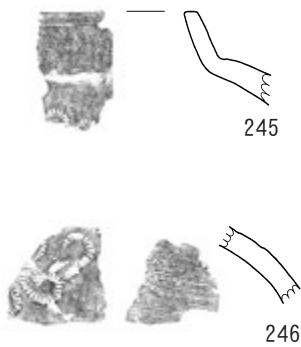
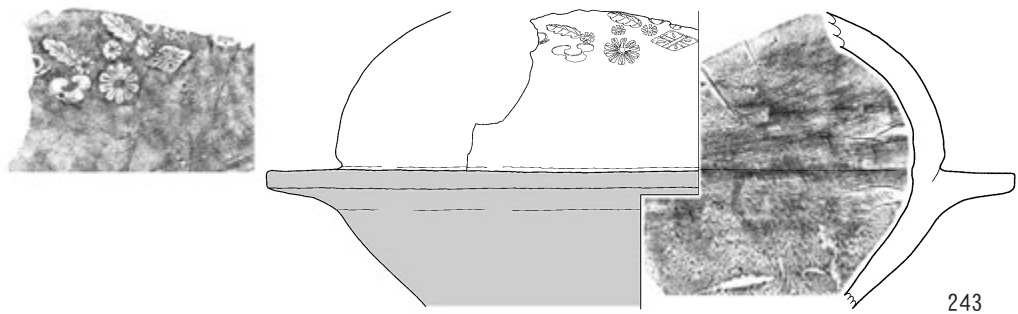
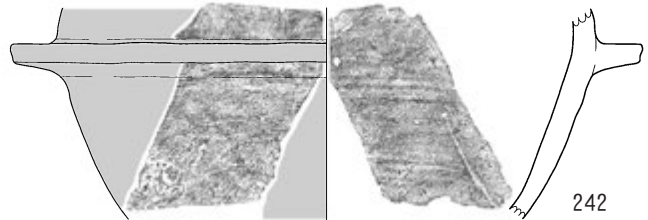
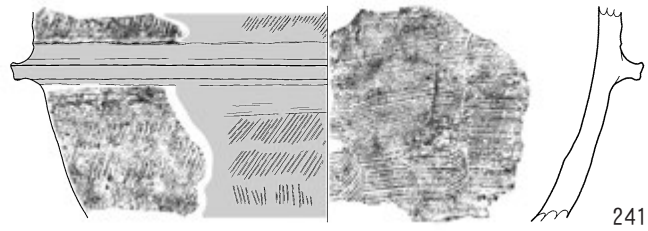
257・258は滑石製石鍋の底部である。どちらもノミ状工具により加工され、外面に縦位の工具痕が残る。

刀子 (第59図)

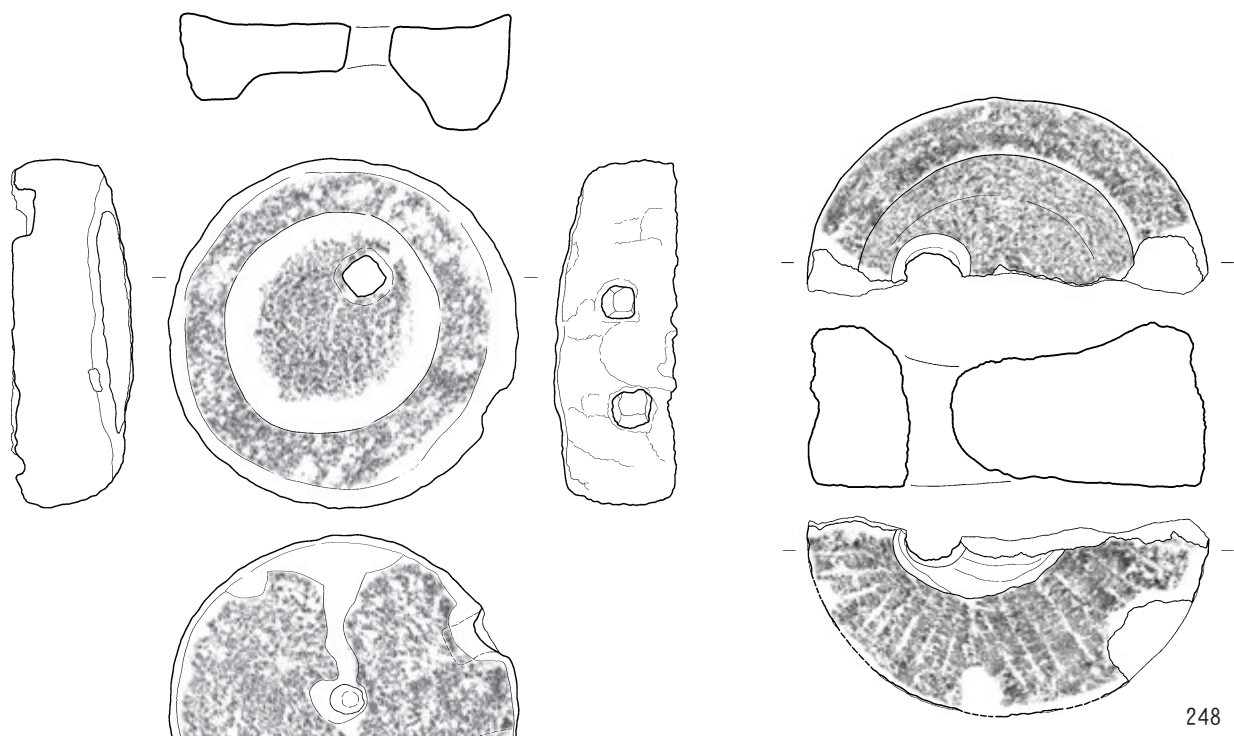
259は刀子である。Ⅲ層上面で検出された。切先を欠いており、状態が悪く、木質はほとんど残らない。

貨幣 (第59図)

260は貨幣で、状態は悪いが、X線写真より「天聖元宝」と読める。北宋において西暦1023年以降に鑄造されたもので、渡来量が多く、中世を中心に流通している。同じく長崎貿易銭として用いるため、近世に新たに鑄造されたものもあるが、C-6区のⅣ層土(黒色土)内で出土していること(第29図)から、北宋銭と考えられる。

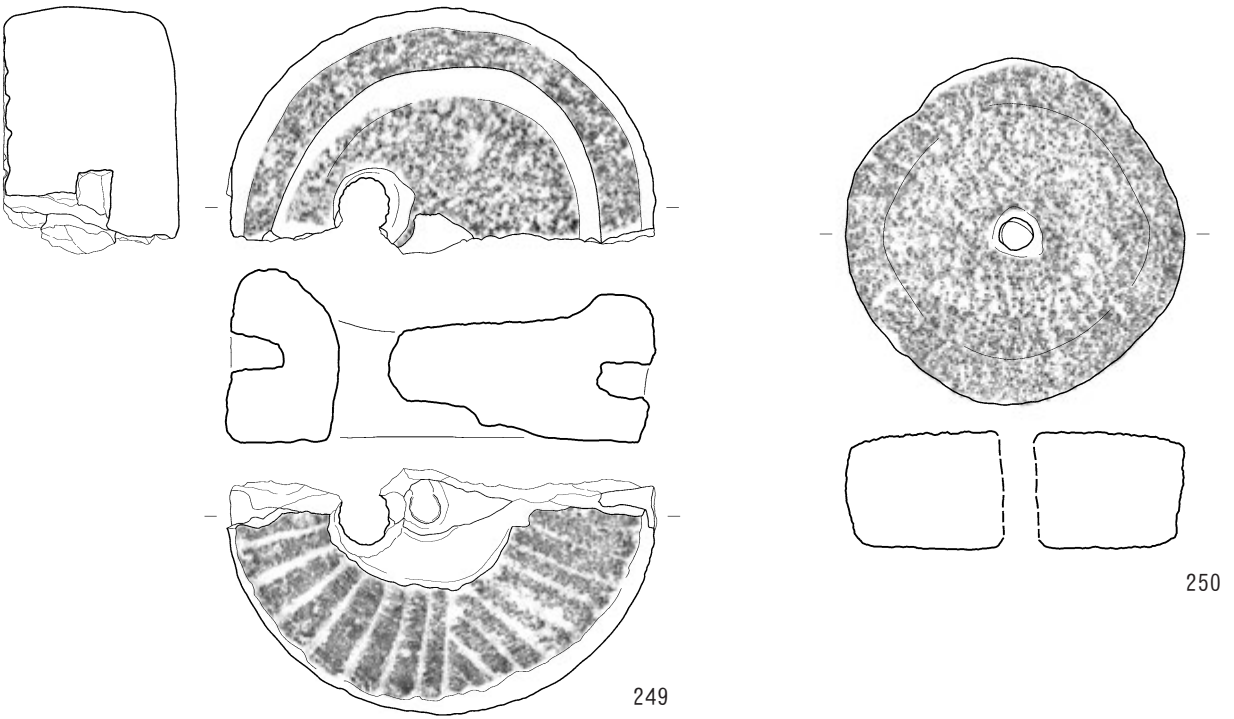


第56図 中世出土遺物(釜類)



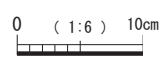
247

248



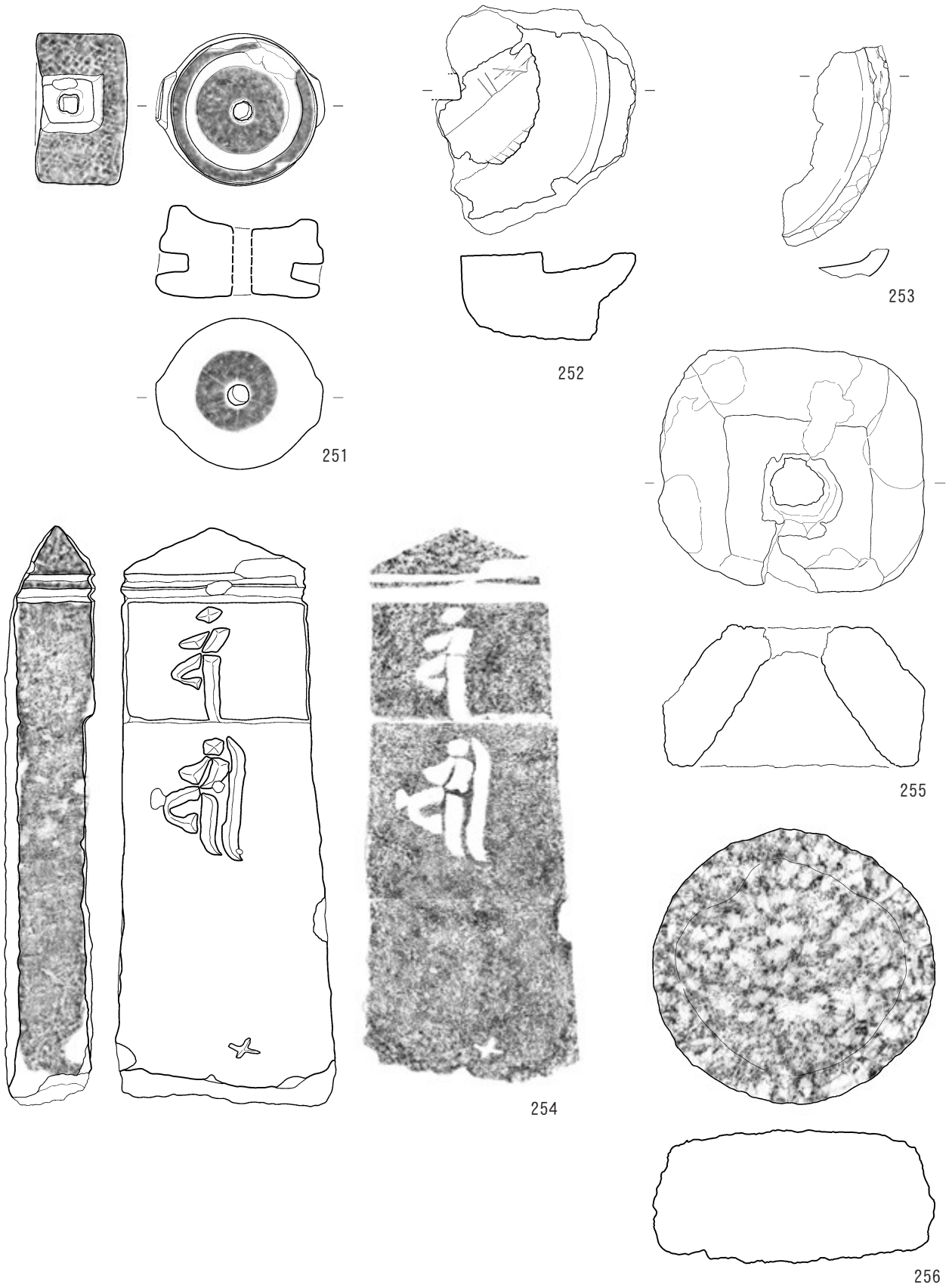
249

250



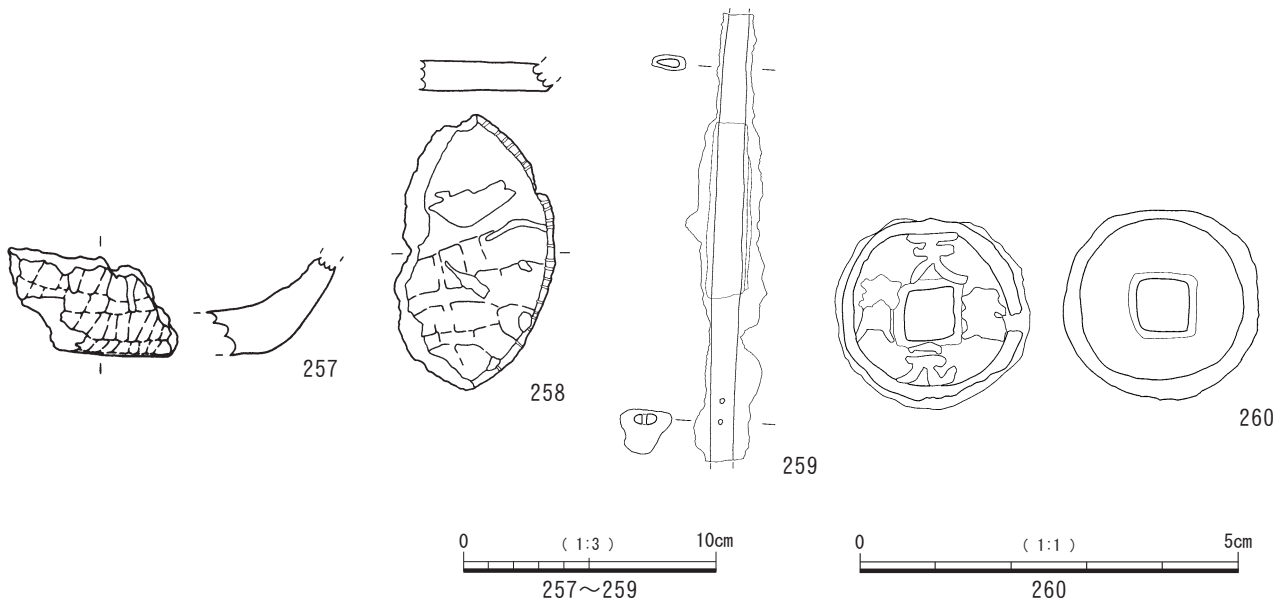
第57図 中世出土遺物(石臼)



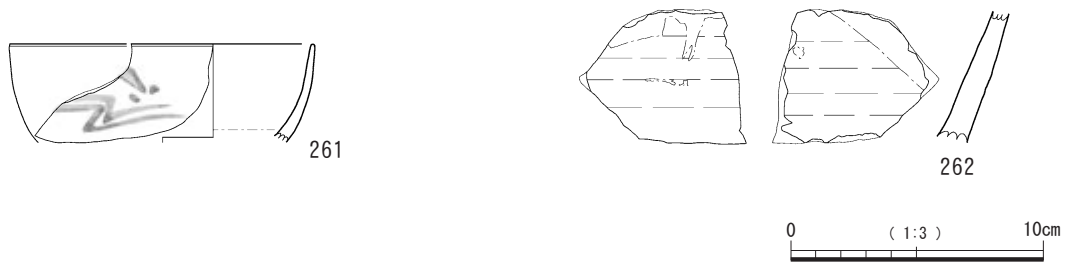


第58図 中世出土遺物(茶臼・板碑・石塔)

0 (1:6) 10cm



第59図 中世出土遺物(滑石製石鍋・刀子・貨幣)



第60図 近世遺物

## 5 近世の調査

### (1) 調査の概要

近世において、調査区は舞鶴城の南東の一角と想定され、近世の建物跡や瓦及び使用遺物の出土が考えられたが、建物跡は無く、遺物も極めて少ない。前回までの調査においても近世遺物は少なく、同様の傾向にある。

### (2) 遺物(第60図)

261は磁器で、見込みは輪状に釉剥ぎされ、外面に緑色でN字型の文様を描く。262は陶器の腰部で、外面は黒褐色、内面は褐色を呈し、残存部全体に横方向の刷毛目がみられる。上面より褐釉がかけられている。

## 6 近代の調査

### (1) 遺構(第61・62図)

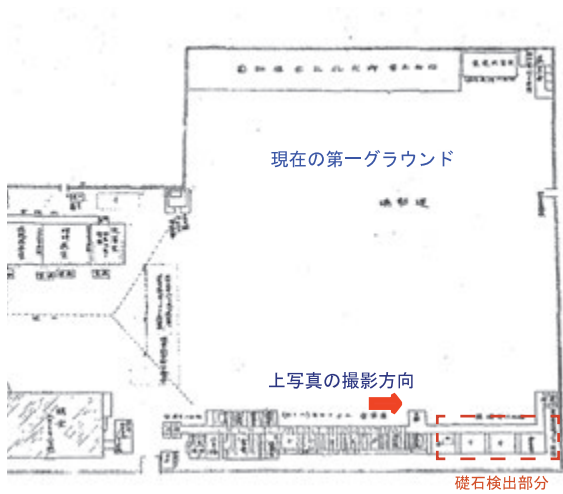
近代においては、木造建物の基礎と思われる礎石が出土している。出土位置より、大正8年(1919年)に上棟した国分高等学校の前身である始良郡立国分実科高等女学校寄宿舎の礎石と考えられる。検出面周辺の土は、大正2年に大爆発した桜島の火山灰が混合されている。礎石は、黄褐色の大型の礫の上に細かく砕かれた灰色の凝灰岩を乗せており、この年に同時に作られた石塀を作る際に出た石屑と考えられる(第7図5トレンチ参照)。なお、石塀は現在も石垣の上に残り、活用されている。

### (2) 遺物(概要のみ)

寄宿舎と石塀東側との間はゴミ捨て場となっており、その中から昭和初期～戦前までと考えられるビール・牛乳・カルピス・ソース・薬等の瓶類及び、炭を入れてアイロンの役割をする青銅製の火熨斗が出土している。



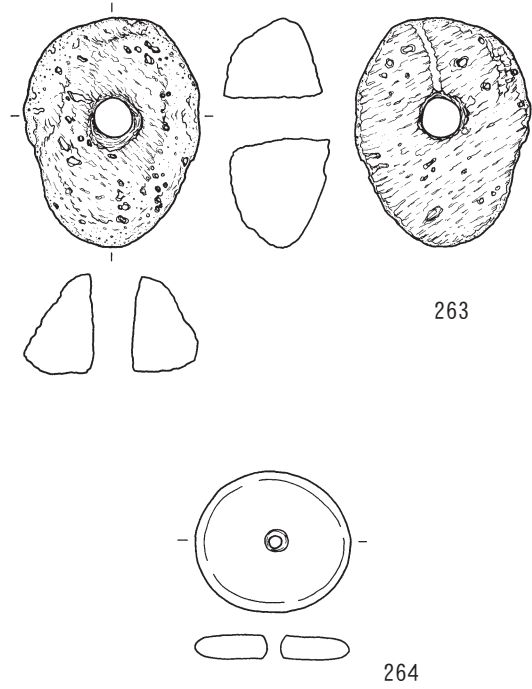
第61図 高等女学校寄宿舎跡



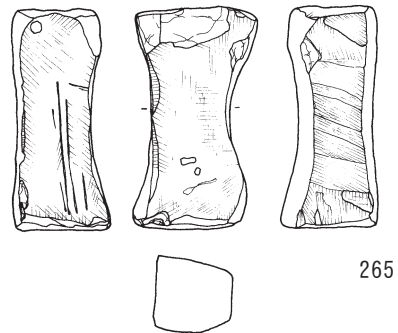
第62図 昭和8年頃の校舎配置図

時代不明の出土品(第63図)

263～265は、縄文～中世のもので、時代認定が困難なものである。263は軽石製品で、底面を平状に削り、中央に穿孔がなされている。264は直径約6cm、厚さ9mmの石製の紡錘車である。265は砥石で、中央付近を3面にわたりかなり使い込んでおり、凹みが大きい。



0 (1:3) 10cm  
263・264



0 (1:4) 10cm  
265

第63図 時代不明遺物





第5表 土師器観察表

図版 番号	掲載 番号	出土区	層位・遺構	器種	部位	法量(cm)			器面調整		胎土		備考
						口径	底径	器高	外側	内側	色調		
23	80	B-2	溝4	坏	口縁部~底部	12.0	6.0	2.8	回転ナデ	回転ナデ	灰白(2.5Y8/2)		
	81	A-3	溝3 2629	坏	口縁部	13.3	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰白(2.5Y8/2)		
	82	C-5	溝6・7間 IV	坏	口縁部~底部	12.5	6.0	4.7	回転ナデ	回転ナデ,ナデ	浅黄橙(10YR8/3)		
	83	B-3	溝3 3936	坏	口縁部~底部	13.0	6.2	4.6	回転ナデ	回転ナデ	灰黄褐(10YR6/2)		
	84	B-4	溝3 3904	坏	完形	14.3	5.7	5.3	回転ナデ	回転ナデ	灰白(10YR8/2)		
	85	A-1	3T III	坏	口縁部~底部	12.0	5.8	4.0	回転ナデ,ナデ	回転ナデ	黄橙(10YR8/6)		
	86	B-3	溝2 136	坏	口縁部~底部	11.6	5.2	4.6	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙(10YR8/3)		
	87	A-1	3T III	坏	口縁部~底部	11.3	5.5	5.2	回転ナデ	回転ナデ	明黄褐(10YR7/6)		
	88	B-2	IV 4204	坏	口縁部~底部	11.3	5.4	5.3	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙(10YR8/4)		
	89	B-3	溝3 572	坏	口縁部~底部	11.4	5.0	5.1	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙(10YR8/3)		
	90	B-3	溝3 1340	坏	口縁部~底部	11.4	5.4	3.8	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)		
	91	B-3	溝3 1285	坏	口縁部~底部	11.6	5.8	3.2	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙(10YR8/4)		
	92	B-4	溝3 498	坏	口縁部~底部	12.6	7.0	3.8	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙(10YR8/3)		
	93	D-3	2T III	皿	口縁部~底部	19.2	15.4	2.4	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙(10YR8/3)		
	94	A-3	溝2 589	皿	口縁部~底部	15.0	10.2	2.0	回転ナデ	回転ナデ	橙(7.5YR7/6)		
	95	B-5	溝3 3702	皿	口縁部~底部	18.0	12.6	2.0	回転ナデ	回転ナデ	橙(7.5YR7/6)		
	96	C-6	溝10・11間 IV	埴	底部	—	8.0	—	回転ナデ,ナデ	回転ナデ	褐灰(10YR6/1)		
	97	B-4	溝3 490	埴	胴部~底部	—	9.4	—	回転ナデ	ナデ	浅黄橙(10YR8/3)		
	98	B-3	II	坏か埴	口縁部	13.5	—	—	回転ナデ	回転ナデ	橙(7.5YR7/6)		外面に墨書痕(文字不明)
	99	C-6	溝10	埴	胴部~底部	—	8.8	—	回転ナデ	ミガキ	浅黄橙(10YR8/3)		黒色土器
	100	B-4	溝3 3168	埴	底部	—	7.6	—	回転ナデ,ナデ	ナデ	灰黄(2.5YR7/2)		黒色土器
	101	B-4	溝3 1855	埴	胴部~底部	—	5.6	—	回転ナデ	ミガキ	灰白(10YR8/1)		黒色土器
	102	B-4	II	埴	胴部~底部	—	8.6	—	ナデ	ナデ	灰白(10YR8/2)		黒色土器
103	B-5	大土坑2号 131	埴	底部	—	6.8	—	ナデ	ミガキ	灰白(10YR8/2)		黒色土器	
104	B-5・6	IV	皿	底部	—	7.0	—	ナデ	ミガキ	橙(7.5YR7/6)		黒色土器	
105	B-4	III 3546	埴	底部	—	—	—	回転ナデ	回転ナデ,ナデ	浅黄橙(10YR8/3)		赤色高台(底面糸切り)	
24	106	B-5	溝3	甗	口縁部	—	—	—	ハケメ,ナデ,指オサエ	工具ナデ,ケズリ	橙(2.5YR6/6)		
	107	C-2	II	甗	口縁部	—	—	—	ミガキ,工具ナデ	ミガキ,工具ナデ	褐灰(7YR4/1)		
	108	B-3	溝2	甗	口縁部	—	—	—	工具ナデ,ナデ	工具ナデ,ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)		
	109	B-4	I	甗か甗	把手	—	—	—	工具ナデ,ナデ	工具ナデ,ナデ	浅黄橙(10YR8/3)		
	110	B-2	II	壺	口縁部~頭部	—	—	—	指ナデ	指オサエ,ナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)		須恵器模倣品
	111	B-2	II	壺	底部	—	13.2	—	回転ナデ	工具ナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)		須恵器模倣品
	112	B-5	大土坑2号 111	高坏	脚部	—	10.7	—	回転ナデ,ナデ	回転ナデ,ナデ	浅黄橙(7.5YR8/6)		
	113	B-2	溝4	高坏	脚部	—	—	—	ナデ	ナデ	灰白(10YR8/2)		
	114	C-6	溝6・7間 IV	蓋	—	—	—	—	(表)回転ナデ	(裏)ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)		
	115	B-4	溝3 2051	蓋	—	—	—	—	(表)回転ナデ	(裏)回転ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)		
	116	C-2	II	甗?	胴部	—	—	—	並行タタキ	ヘラケズリ,ナデ	浅黄橙(10YR8/4)		外面赤色顔料残る
117	A-2	II	壺	胴部	—	—	—	ナデ	布目痕,工具ナデ	灰白(10YR8/2)		焼塩土器	
118	C-2	溝2	紡錘車	—	—	—	—	ナデ	ナデ	浅黄橙(10YR8/3)			
38	173	B-5	鍛冶遺構	坏	胴部~底部	—	5.0	—	ナデ	—	浅黄橙(7.5YR8/4)		鉄滓附着
47	174	B・C-4	石列遺構	皿	口縁部~底部	15.4	7.5	2.4	回転ナデ	ナデ	浅黄橙(10YR8/3)		底面糸切り
51	181	B-1	7T I	皿	口縁部~底部	13.3	6.9	2.8	回転ナデ	回転ナデ	浅黄橙(7.5YR8/4)		底面糸切り
	182	C-2	溝2	皿	口縁部~底部	11.0	9.2	3.3	回転ナデ	回転ナデ	橙(2.5YR7/8)		底面糸切り
	183	A-2	溝4	皿	口縁部~底部	6.6	5.0	2.2	横ナデ	横ナデ	橙(5YR6/6)		底面糸切り
53	225	C-2	IV	鍋か釜	口縁部	—	—	—	ナデ	工具ナデ	赤褐(5YR4/6)		
	226	C-2	溝2	鉢	口縁部~胴部	30.0	—	—	ハケメ,横ナデ	横ナデ	浅黄橙(10YR8/4)		石英多く含む

第6表 須恵器観察表

図版 番号	掲載 番号	出土区	層位・遺構	時代	器種	部位	法量(cm)			器面調整		色調		備考	
							口径	底径	器高	外側	内側	外側	内側		
25	127	B-2・3	II	古代	坏	口縁部~底部	12.0	7.2	4.4	回転ナデ	回転ナデ	灰白(7.5Y7/1)		灰白(7.5Y7/1)	
	128	A-3	溝3 3966	古代	坏	口縁部~底部	13.1	9.3	4.2	回転ナデ	回転ナデ	灰白(7.5Y7/1)		灰白(7.5Y7/1)	
	129	B-2	(大型土坑状攪乱部)	古代	皿	底部	—	7.4	—	回転ナデ,ナデ	回転ナデ	灰白(7.5Y7/1)		灰オリーブ(7.5Y6/2)	
	130	C-5	溝7	古代	皿	底部	—	9.2	—	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y6/1)		灰白(7.5Y7/1)	
	131	A-4	II	古代	蓋	—	—	5.8	—	(表)回転ナデ	(裏)回転ナデ	灰白(10YR8/2)		にぶい橙(7.5YR7/4)	
	132	B-6	溝7	古代	蓋	—	18.0	—	—	(表)回転ナデ	(裏)回転ナデ,ハケメ	灰白(7.5Y7/1)		灰白(7.5Y8/1)	
	133	C-6	IV	古代	壺	口縁部	12.8	—	—	回転ナデ	回転ナデ	暗青灰(5B3/1)		青灰(5B5/1)	
	134	C-5	溝6	古代	壺	口縁部	11.0	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y6/1)		灰(7.5Y6/1)	
	135	C-5	溝6	古代	壺	口縁部	—	—	—	回転ナデ,縄目タタキ	回転ナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)		にぶい黄橙(10YR7/2)	
	136	B-2	II	古代	壺	胴部(耳部)	—	—	—	格子目タタキ,ナデ	同心円状タタキ,ナデ	灰黄(2.5Y7/2)		灰黄(2.5Y7/2)	
	137	C-2	溝4	古代	壺	底部	—	8.9	—	回転ナデ	回転ナデ	暗灰(N3/0)		灰(N4/0)	
	138	B-6	溝7	古代	壺	底部	—	11.4	—	回転ナデ	回転ナデ	オリーブ黒(7.5Y3/2)		灰(7.5Y6/1)	
	139	C-2	IV 4254	古代	甗	口縁部	11.6	—	—	回転ナデ	回転ナデ,指オサエ	浅黄橙(7.5YR8/4)		浅黄橙(7.5YR8/3)	
	140	C-6	溝7	古代	甗	口縁部	20.0	—	—	回転ナデ	回転ナデ	灰(7.5Y6/1)		灰(7.5Y6/1)	
	141	B-4	III	古代	甗	頸部	—	—	—	回転ナデ,並行タタキ	回転ナデ,同心円状タタキ	灰(7.5Y6/1)		灰オリーブ(7.5Y6/2)	
	142	B-2	(大型土坑状攪乱部)	古代	甗	胴部	—	—	—	並行タタキ,ハケメ	同心円状タタキ,工具ナデ	灰(N4/0)		灰(N6/0)	
	143	C-4	II	古代	甗	胴部	—	—	—	並行タタキ	同心円状タタキ	灰白(7.5Y7/1)		灰白(7.5Y7/1)	
144	B-6	溝7	古代	甗	胴部	—	—	—	格子目タタキ	同心円状タタキ,ナデ	暗青灰(5B4/1)		青灰(5B5/1)		
145	A-3	溝2 973	古代	甗	胴部	—	—	—	格子目タタキ	格子目タタキ	にぶい橙(5YR6/4)		橙(5YR6/6)		
53	223	A-2	II	中世	捏鉢	口縁部	—	—	—	横ナデ	横ナデ	灰(5Y6/1)		灰白(5Y7/1)	東幡系(12~14c代)
	224	C-6	溝6	中世	捏鉢	口縁部	7.9	—	—	ナデ	ナデ,回転ナデ	灰白(5Y7/1)		暗灰黄(2.5Y5/1)	東幡系(12~14c代)





第8表 古代瓦観察表

図版番号	掲載番号	出土区	層位・遺構	種類	法量 (cm)			タタキ目の種類	凸面タタキ	凸面調整	凹面調整	色調		備考 (大隅区分等)
					最大厚	長さ	幅					表	裏	
27	146	A-3	溝2	平瓦	2.3	—	—	1	太縄目	—	布目,タテケズリ	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y6/1)	平瓦I類
	147	C-6	II	平瓦	2.2	—	—	2	縄目	—	布目,タテケズリ,ヘラスジ	黄灰(2.5Y6/1)	灰白(2.5Y7/1)	平瓦I類
	148	B-4	溝3 1636	平瓦	2.7	—	—	3	細縄目	—	布目	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/3)	平瓦I類
	149	C-5	大土坑6号	平瓦	1.9	—	—	4	極細縄目	—	布目,タテケズリ	にぶい黄橙(10YR7/4)	黄灰(2.5Y6/1)	平瓦III類?
	150	B-3	溝3	平瓦	2.3	—	—	5	タコ糸状縄目	ヘラオコシ	布目,ヘラオコシ	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y5/1)	平瓦III類?
	151	B-3	溝3 1371	平瓦	2.3	—	—	6	正格子目	ナデ	布目,桢板痕	灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	平瓦I類
	152	C-5	溝7	平瓦	2.1	—	—	7	正格子目	—	布目,桢板痕	浅黄(2.5Y7/4)	浅黄(2.5Y7/3)	平瓦I類
	153	A-3	溝2 1148	平瓦	2.0	—	—	8	正格子目	ヘラオコシ	布目	淡黄(2.5Y8/3)	淡黄(2.5Y8/3)	平瓦I類
	154	C-5	溝6	平瓦	1.8	—	—	11	斜格子目	ナデ	布目,横ナデ	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y5/1)	平瓦I類
	155	C-6	I	平瓦	2.0	—	—	12	斜格子目	ナデ	布目,ナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/4)	平瓦I類
	156	B-3	溝1 195	平瓦	2.3	—	—	13	斜格子目	ナデ	布目,桢板痕,タテケズリ	灰白(2.5Y8/2)	黄灰(2.5Y5/1)	平瓦I類
	157	C-6	溝6	平瓦	1.6	—	—	14	斜格子目	—	布目	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄橙(10YR7/4)	平瓦I類
	158	C-5	溝6	平瓦	1.5	—	—	15	—	ナデ	布目,ヘラスジ,タテケズリ	黄灰(2.5Y6/1)	灰白(2.5Y7/1)	平瓦I類
	159	C-5	溝7	平瓦	1.6	—	—	2	—	布目,タテケズリ	縄目タタキ	灰(N5/1)	灰(N5/1)	平瓦IV類
	160	B-6	溝7	平瓦	2.6	—	—	15	—	布目	ナデ	灰(N5/1)	灰(N5/1)	平瓦IV類
	161	B-4	溝3	平瓦	1.8	—	—	5	タコ糸状縄目	—	布目,糸切り痕	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	平瓦II類
	162	B-3	溝3 562	平瓦	2.3	—	—	4	極細縄目	—	布目,糸切り痕	浅黄橙(7.5YR8/6)	浅黄橙(10YR8/4)	平瓦II類
163	C-6	溝7	瓦斗	2.1	—	—	13.8	—	横ナデ	布目,桢板痕,タテケズリ	灰(N5/1)	灰(N5/1)		
28	164	B-3	溝3 848	丸瓦	1.8	—	—	—	—	横ナデ	布目,タテケズリ	灰白(N7/1)	灰白(10YR7/1)	無段(行基式)
	165	A-2・3	溝3	丸瓦	2.6	—	—	—	—	横ナデ	布目,タテケズリ	灰(5Y4/1)	灰白(10YR7/1)	有段(玉縁式)
	166	C-5	溝6	丸瓦	3.6	—	—	—	—	横ナデ	布目	灰白(10YR8/1)	灰白(10YR8/1)	有段(玉縁式)
	167	C-5	溝7	軒平瓦	4.7	—	—	—	—	—	—	明黄褐(10YR7/6)	—	軒平瓦Ia類
	168	B-5・6	溝6・7間 IV	軒平瓦	3.7	—	—	—	—	タテナデ	布目,桢板痕,タテケズリ	灰白(5Y7/1)	灰(5Y6/1)	軒平瓦Ic類
	169	C-5	溝6	軒丸瓦	2.4	—	—	—	—	—	—	灰白(10YR8/1)	灰白(10YR8/1)	軒丸瓦I類
	170	B-4	III	軒丸瓦	2.3	—	—	—	—	—	内面はナデ	灰白(2.5Y8/1)	灰白(2.5Y8/1)	軒丸瓦I類
171	C-6	溝6・7間 IV	軒丸瓦	2.0	—	—	—	—	—	内面はナデ	灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	軒丸瓦II類	

第9表 石・鉄製品その他観察表

図版番号	掲載番号	出土区	層位・遺構	種別	器種	法量 (cm)			重量	時期	備考
						最大長	最大幅	最大厚			
8	9	A-3	溝4	石製品	打製石斧	(9.5)	(6.0)	1.7	127.0g	縄文	頁岩
	10	A-3	II	石製品	磨製石斧	(7.9)	5.9	2.7	197.0g	縄文	安山岩
20	79	C-2	V 3065	石製品	石包丁	(6.8)	(3.9)	0.6	18.5g	弥生・古墳	頁岩,穿孔3か所
50	178	B-1(7T)	ST2	鉄製品	角釘	(5.8)	—	0.45	9.8g	中世	土坑墓内
	179	B-1(7T)	ST2	鉄製品	角釘	(2.8)	—	0.3	3.4g	中世	土坑墓内
	180	B-1(7T)	ST2	鉄製品	角釘	(2.3)	—	0.4	2.1g	中世	土坑墓内
57	247	C-4	SP216	石製品	石臼	28.0	28.0	9.6	7.5kg	中世	礎石転用,溶結凝灰岩
	248	B-6	溝7	石製品	石臼	32.1	14.0	13.3	8.0kg	中世	溶結凝灰岩
	249	C-4	大土坑3号	石製品	石臼	34.2	19.5	14.0	9.5kg	中世	溶結凝灰岩
	250	C-4	SP276	石製品	石臼	27.0	27.8	9.5	9.5kg	中世	礎石転用,安山岩
58	251	B-4	SP242	石製品	茶臼	16.1	17.8	9.9	3.5kg	中世(14c後半~15c)	砂岩
	252	B-3	溝2 4049	石製品	茶臼	24.2	20.6	9.3	5.0kg	中世	溶結凝灰岩
	253	C-2, C-2, C-5	溝4 溝2 溝6	石製品	茶臼	(21.2)	(8.1)	2.6	447.0g	中世	受け皿部分,砂岩
	254	C-5	溝7	石製品	板碑	61.0	23.0	9.4	13.0kg	中世	溶結凝灰岩
	255	B-3	溝2 4050	石製品	石塔	25.5	28.2	14.8	3.5kg	中世	軽石
	256	C-4	SP256	石製品	石塔	29.0	30.0	14.2	16.0kg	中世	礎石転用,溶結凝灰岩
59	257	B-2	溝4	滑石製品	転用品	—	—	—	114.0g	中世	滑石製石鍋転用
	258	C-6	溝7	滑石製品	転用品	—	—	1.2	132.0g	中世	滑石製石鍋転用
	259	C-3	III層上面	鉄製品	刀子	残存長17.5cm	厚さ柄9x4mm 刀9x3mm 目釘穴2mm	—	60.3g	中世	—
	260	C-6	IV	鉄製品	貨幣	(2.5)	—	0.2	2.6g	中世	天聖元宝
61	263	B-2	溝4	軽石製品	—	9.1	7.0	4.2	77.0g	時期不明	軽石
	264	A-3	II	石製品	紡錘車	6.1	5.5	1.0	50.5g	古代?	砂岩
	265	C-5	溝7	石製品	砥石	8.7	4.7	2.9	208.0g	時期不明	砂岩

( )は残存長

第10表 号名対応表

カマド		溝状遺構	
報告書	調査時(注記)	報告書	調査時(注記)
1号	1号	1号	5号
2号	3号	2号	1号
3号	2号	3号	3号
4号	4号	4号	4号
5号	8号	5号	2号
6号	7号	6号	6号
7号	6号	7号	7号
8号	5号	8号	9号
9号	10号	9号	8号
鍛冶遺構	9号	3号(東側)	10号



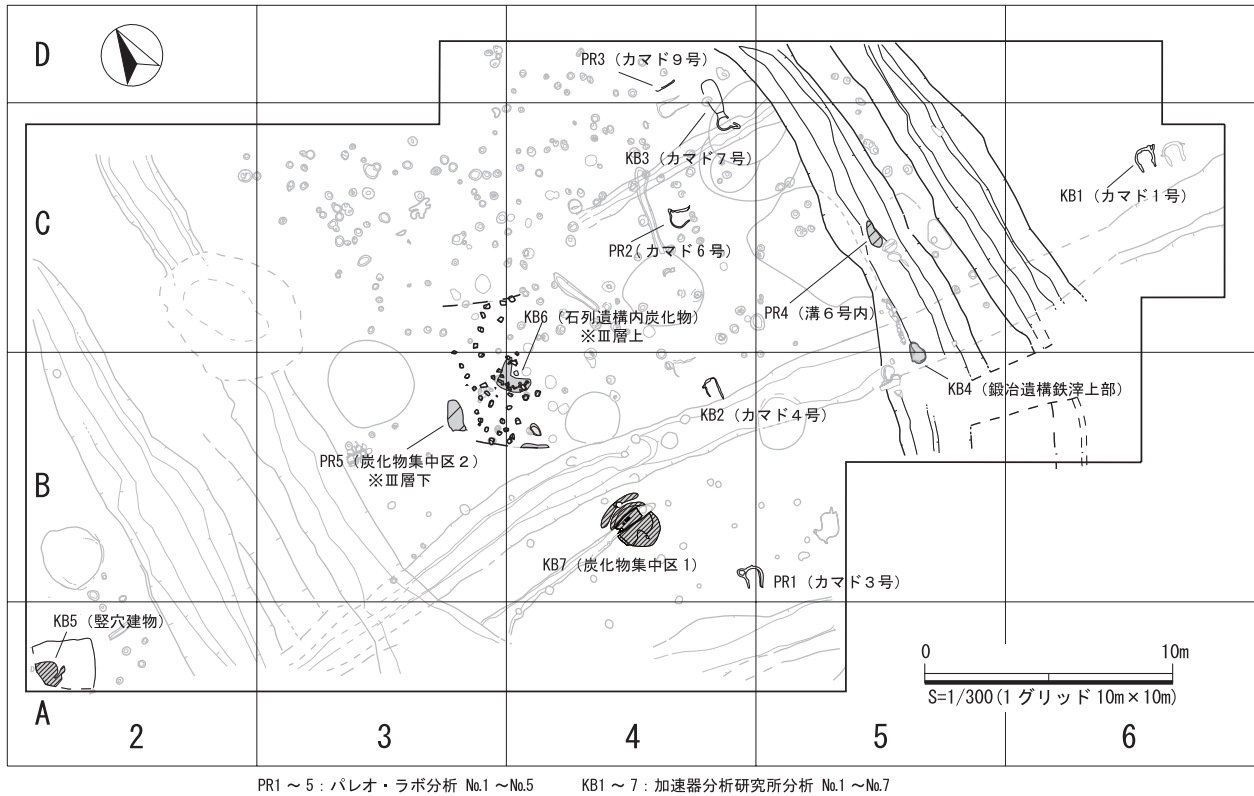


## 第IV章 自然科学分析

### 第1節 委託炭化物の出土位置

今回の調査においては、多くの炭化物が出土しており、そのうち7点の放射性年代測定を(株)加速器分析研究所

・(株)パレオ・ラボの2社に委託した。それぞれの委託分の位置を、第64図に示す。



第64図 炭化物委託分位置図

### 第2節 放射性炭素年代測定(パレオ・ラボ)

伊藤 茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹  
Zaur Lomtadize・小林克也

#### 1 測定試料と処理

鹿児島県霧島市の本御内遺跡から出土した試料計5点(試料No.1~5: PLD-36498~39502)について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。試料No.1~3, 5の炭化材は、いずれも最終形成年輪が残っていないかった。測定試料の情報、調製データは表1のとおりである。

#### 2 算出方法

試料は調製後、加速器質量分析計(パレオ・ラボ, コンパクトAMS: NEC製 1.5SDH)を用いて測定した。得られた<sup>14</sup>C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、<sup>14</sup>C年代, 暦年代を算出した。

表2に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比( $\delta^{13}C$ ), 同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲, 慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した<sup>14</sup>C年代, 図1に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり, 今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

<sup>14</sup>C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。<sup>14</sup>C年代(yrBP)の算出には,<sup>14</sup>Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また, 付記した<sup>14</sup>C年代誤差( $\pm 1\sigma$ )は, 測定の統計誤差, 標準偏差等に基づいて算出され, 試料の<sup>14</sup>C年代がその<sup>14</sup>C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお, 暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは, 大気中の<sup>14</sup>C濃度が一定で半減期が5568年として算出された<sup>14</sup>C年代に対し, 過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の<sup>14</sup>C濃度の変動, および半減期の違い(<sup>14</sup>Cの半減期5730 $\pm$ 40年)を較正し



て、より実際の年代値に近いものを算出することである。

<sup>14</sup>C年代の暦年較正には OxCal4.3 (較正曲線データ: IntCal13) を使用した。なお、1 $\sigma$  暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された<sup>14</sup>C年代誤差に相当する 68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2 $\sigma$  暦年代範囲は 95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は<sup>14</sup>C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

### 3 測定結果

以下、2 $\sigma$  暦年代範囲 (確率95.4%) に着目して結果を整理する。

今回の5点の試料の年代測定結果は、いずれも1452～1644 cal ADの暦年代範囲内に収まり、15世紀中頃～17世紀中頃の暦年代を示した。これは、室町時代～江戸時代前期に相当する。

なお、木材の場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると、最終形成年輪から内側であるほど古い年代が得られる (古木効果)。今回の試料 No. 1～3 および 5 はいずれも最終形成年輪が残っていなかったため、測定結果は古木効果の影響を受けていると考えられ、実際に枯死もしくは伐採された年代は、測定結果よりも新しい年代であると考えられる。試料 No. 4 は炭化草本類であり、測定結果は枯死もしくは伐採年代を示すが、試料 No. 1～3 および 5 は、最終形成年輪が残っていなかった。発掘調査所見による遺構の推定時期は中世頃であり、測定結果は整合的である。ただし、17世紀初頭以降の年代も測定結果に含まれており、舞鶴城の造成以降も遺構が存続していたかについては、今回の測定結果のみによる判断は難しい。

表1 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-36498	試料No. 1 遺構：カマド3号(旧2号)	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-36499	試料No. 2 遺構：カマド6号(旧7号)	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-36500	試料No. 3 遺構：カマド9号(旧10号)	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-36501	試料No. 4 調査区：B-5区 遺構：溝6内 層位：炭化物 (断面内) 層	種類：炭化草本類 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)
PLD-36502	試料No. 5 調査区：B-3区 遺構：炭化物集中区2	種類：炭化材 試料の性状：最終形成年輪以外 部位不明 状態：dry	超音波洗浄 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸：1.2N)

### 参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337-360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の<sup>14</sup>C年代編集委員会編「日本先史時代の<sup>14</sup>C年代」: 3-20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hafliðason, H., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869-1887.



表2 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$ )	$^{14}\text{C}$ 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
PLD-36498 試料No. 1	$-28.31 \pm 0.14$	$334 \pm 15$	$335 \pm 15$	1513-1526 cal AD (11.4%) 1557-1601 cal AD (41.7%) 1617-1632 cal AD (15.1%)	1487-1532 cal AD (27.4%) 1538-1636 cal AD (68.0%)
PLD-36499 試料No. 2	$-27.11 \pm 0.22$	$317 \pm 17$	$315 \pm 15$	1522-1575 cal AD (52.2%) 1585-1590 cal AD (4.0%) 1625-1638 cal AD (12.0%)	1496-1506 cal AD (2.8%) 1512-1601 cal AD (72.4%) 1616-1644 cal AD (20.2%)
PLD-36500 試料No. 3	$-27.43 \pm 0.26$	$327 \pm 17$	$325 \pm 15$	1515-1529 cal AD (10.3%) 1543-1597 cal AD (44.0%) 1618-1634 cal AD (13.9%)	1491-1603 cal AD (76.8%) 1614-1640 cal AD (18.6%)
PLD-36501 試料No. 4	$-30.07 \pm 0.11$	$368 \pm 15$	$370 \pm 15$	1467-1513 cal AD (48.4%) 1601-1617 cal AD (19.8%)	1452-1523 cal AD (64.1%) 1575-1624 cal AD (31.3%)
PLD-36502 試料No. 5	$-26.48 \pm 0.18$	$355 \pm 15$	$355 \pm 15$	1478-1520 cal AD (41.3%) 1592-1619 cal AD (26.9%)	1466-1524 cal AD (49.0%) 1558-1632 cal AD (46.4%)

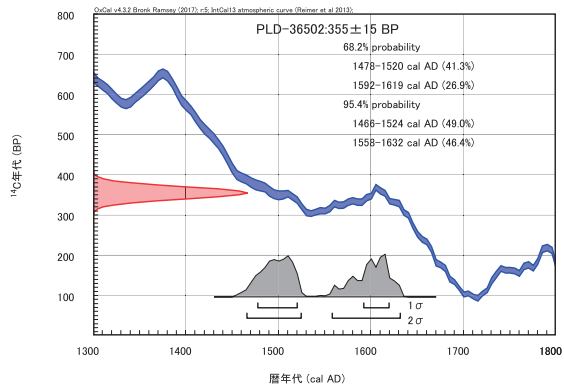
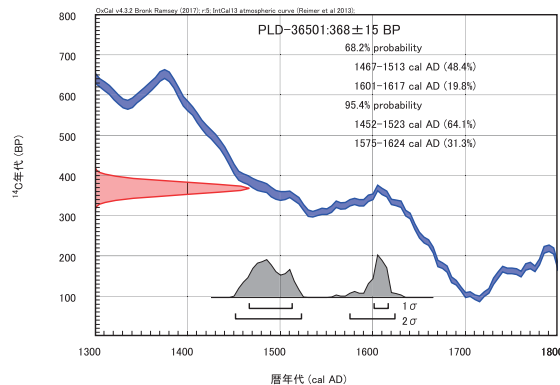
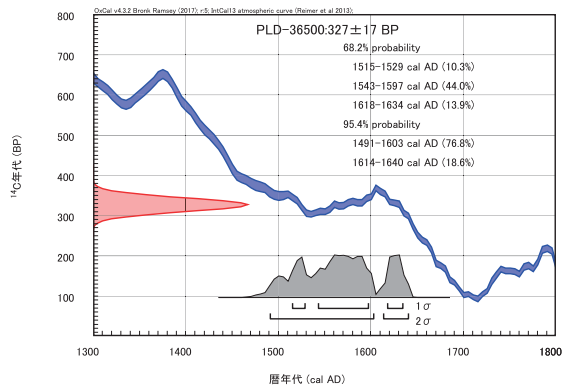
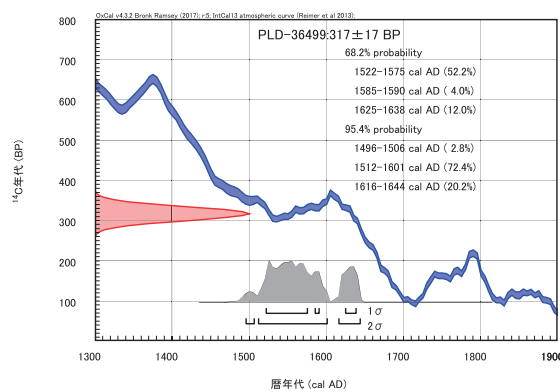
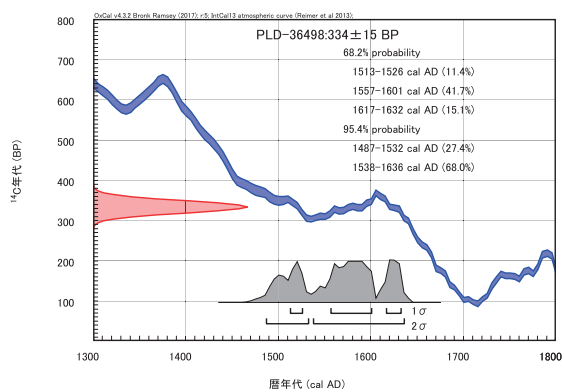


図1 暦年較正結果

### 第3節 放射性炭素年代測定(加速器分析研究所)

#### 1 測定対象試料

鹿児島県に所在する本御内遺跡の測定対象試料は、竈や堅穴状遺構から採取された炭化物合計7点である(表1)。

#### 2 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸(AAA: Acid Alkali Acid)処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l(1M)の塩酸(HCl)を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム(NaOH)水溶液を用い、0.001Mから1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素を、鉄を触媒として水素で還元し、グラファイト(C)を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

#### 3 測定方法

加速器をベースとした<sup>14</sup>C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、<sup>14</sup>Cの計数、<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)、<sup>14</sup>C濃度(<sup>14</sup>C/<sup>12</sup>C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

#### 4 算出方法

- (1)  $\delta^{13}\text{C}$  は、試料炭素の<sup>13</sup>C濃度(<sup>13</sup>C/<sup>12</sup>C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と注記する。
- (2) <sup>14</sup>C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中<sup>14</sup>C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(0yrBP)として遡る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。<sup>14</sup>C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。<sup>14</sup>C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また<sup>14</sup>C年代の誤差( $\pm 1\sigma$ )は、試料の<sup>14</sup>C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。
- (3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の<sup>14</sup>C濃度の割合である。pMCが小さ

い(<sup>14</sup>Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(<sup>14</sup>Cの量が標準現代炭素と同等以上)の場合Modernとする。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

- (4) 暦年較正年代とは、年代が既知の試料の<sup>14</sup>C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の<sup>14</sup>C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり、1標準偏差( $1\sigma=68.2\%$ )あるいは2標準偏差( $2\sigma=95.4\%$ )で表示される。グラフの縦軸が<sup>14</sup>C年代、横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない<sup>14</sup>C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暦年較正年代の計算に、IntCal13データベース(Reimer et al. 2013)を用い、OxCalv4.3較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。暦年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2、図1に示した。なお、暦年較正年代は、<sup>14</sup>C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するために「cal BP」または「cal BC/AD」という単位で表される。

#### 5 測定結果

測定結果を表1, 2に示す。

試料の<sup>14</sup>C年代は、No. 1~4, 6の5点で $360\pm 20\text{yrBP}$ (No. 1)~ $280\pm 20\text{yrBP}$ (No. 3)にまとまっている。暦年較正年代( $1\sigma$ )は、5点のうち最も古いNo. 1が1470~1619cal ADの間に2つの範囲、最も新しいNo. 3が1527~1650cal ADの間に2つの範囲でそれぞれ示される。いずれも中世から近世頃に相当する(佐原 2005)。

試料No. 5の<sup>14</sup>C年代は $1920\pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代( $1\sigma$ )は、57~122cal ADの間に2つの範囲である。試料No. 7の<sup>14</sup>C年代は $1900\pm 20\text{yrBP}$ 、暦年較正年代( $1\sigma$ )は75~126cal ADである。いずれも弥生時代後期頃に相当する(藤尾 2009)。

なお、試料No. 5, 7が含まれる1~3世紀頃の暦年較正に関しては、北半球で広く用いられる較正曲線IntCalに対して日本産樹木年輪試料の測定値が系統的に異なるとの指摘がある(尾寄 2009, 坂本 2010など)。その日本産樹木のデータを用いて2つの試料の測定結果を暦年較正した場合、ここで報告する較正年代値よりも新くなる可能性がある。

試料の炭素含有率は58%(No. 6)~70%(No. 5)の適正な値で、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

Bronk Ramsey, C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360  
 藤尾慎一郎 2009 弥生時代の実年代, 西本豊弘編, 新弥生時代のはじまり 第4巻 弥生農耕のはじまりとその年代, 雄山閣, 9-54  
 尾寄大真 2009 日本産樹木年輪試料の炭素 14 年代からみた弥生時代の実年代, 設楽博己, 藤尾慎一郎, 松木武彦編弥生時代の考古学 1 弥生文化の輪郭, 同成社, 225-235  
 Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000

years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887  
 佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分, 佐原眞, ウェルナー・シュタインハウス監修, 独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集, ドイツ展記念概説 日本の考古学 上巻, 学生社, 14-19  
 坂本稔 2010 較正曲線と日本産樹木-弥生から古墳へ-, 第5回年代測定と日本文化研究シンポジウム予稿集, (株)加速器分析研究所, 85-90  
 Stuiver, M. and Polach, H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363

表1 放射性炭素年代測定結果 (δ<sup>13</sup>C 補正值)

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ <sup>13</sup> C (‰) (AMS)	δ <sup>13</sup> C 補正あり	
						Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-180040	No.1	カマド1号 (旧1号)	炭化物	AAA	-25.29±0.28	360±20	95.62±0.25
IAAA-180041	No.2	カマド4号 (旧4号)	炭化物	AAA	-25.97±0.52	310±20	96.26±0.26
IAAA-180042	No.3	カマド7号 (旧6号)	炭化物	AAA	-26.07±0.29	280±20	96.52±0.24
IAAA-180043	No.4	B-5区 鉄滓上部	炭化物	AAA	-26.72±0.39	340±20	95.82±0.25
IAAA-180044	No.5	竪穴建物	炭化物	AAA	-28.24±0.38	1,920±20	78.70±0.21
IAAA-180045	No.6	B-3区 III層上面 (石列遺構内)	炭化物	AAA	-27.99±0.25	320±20	96.15±0.24
IAAA-180046	No.7	B-4区 炭化物集中区1	炭化物	AaA	-26.98±0.33	1,900±20	78.90±0.23

[IAA 登録番号 : #9048]

表2 放射性炭素年代測定結果 (δ<sup>13</sup>C 未補正值, 暦年較正用<sup>14</sup>C年代, 較正年代) (1)

測定番号	δ <sup>13</sup> C 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1σ 暦年代範囲	2σ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-180040	360±20	95.57±0.24	359±20	1470calAD - 1520calAD (43.6%) 1592calAD - 1619calAD (24.6%)	1456calAD - 1525calAD (50.8%) 1557calAD - 1632calAD (44.6%)
IAAA-180041	320±20	96.07±0.24	305±21	1522calAD - 1574calAD (52.3%) 1627calAD - 1644calAD (15.9%)	1498calAD - 1504calAD (1.3%) 1513calAD - 1601calAD (70.3%) 1616calAD - 1649calAD (23.9%)
IAAA-180042	300±20	96.31±0.24	284±20	1527calAD - 1554calAD (37.6%) 1633calAD - 1650calAD (30.6%)	1521calAD - 1592calAD (55.4%) 1620calAD - 1659calAD (40.0%)
IAAA-180043	370±20	95.48±0.24	343±20	1490calAD - 1523calAD (25.8%) 1559calAD - 1563calAD (2.3%) 1571calAD - 1603calAD (24.8%) 1610calAD - 1631calAD (15.4%)	1470calAD - 1530calAD (36.2%) 1540calAD - 1635calAD (59.2%)

表2 放射性炭素年代測定結果 ( $\delta^{13}\text{C}$  未補正值, 暦年較正用  $^{14}\text{C}$  年代, 較正年代) (2)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正なし		暦年較正用 (yrBP)	1 $\sigma$ 暦年代範囲	2 $\sigma$ 暦年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-180044	1,980 $\pm$ 20	78.18 $\pm$ 0.19	1,923 $\pm$ 21	57calAD - 88calAD (47.0%) 103calAD - 122calAD (21.2%)	28calAD - 40calAD ( 5.3%) 49calAD - 129calAD (90.1%)
IAAA-180045	360 $\pm$ 20	95.57 $\pm$ 0.24	315 $\pm$ 20	1522calAD - 1575calAD (50.9%) 1585calAD - 1590calAD ( 3.8%) 1625calAD - 1640calAD (13.5%)	1493calAD - 1602calAD (74.9%) 1615calAD - 1645calAD (20.5%)
IAAA-180046	1,940 $\pm$ 20	78.58 $\pm$ 0.22	1,904 $\pm$ 23	75calAD - 126calAD (68.2%)	28calAD - 40calAD ( 1.3%) 49calAD - 139calAD (93.0%) 160calAD - 165calAD ( 0.4%) 197calAD - 206calAD ( 0.7%)

[参考値]

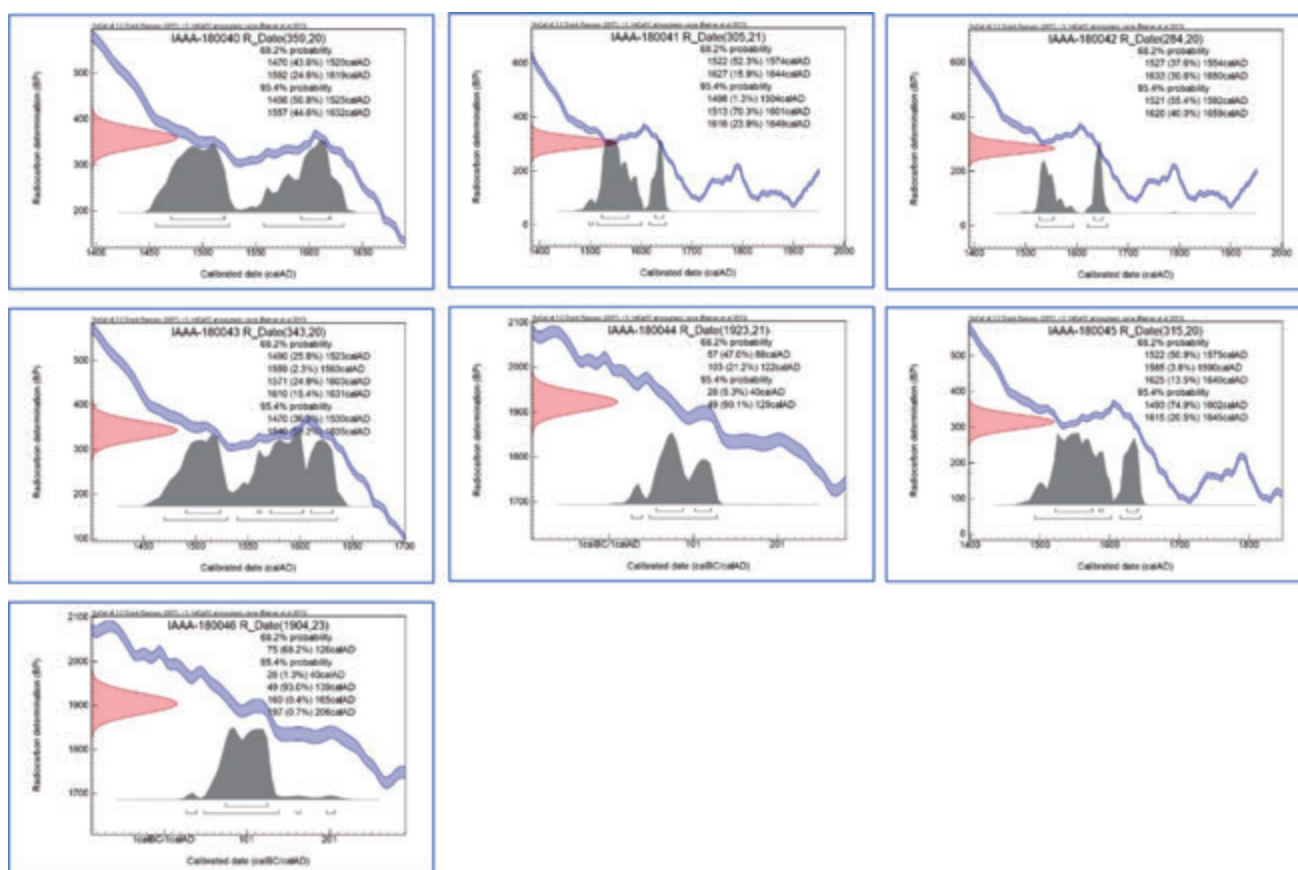


図1 暦年較正年代グラフ (参考)



## 第V章 総括

### 第1節 縄文時代

前回までの調査において、早期～後期の遺物は極めて少なく、晩期の遺物は比較的多い。また、遺構は発見されておらず、今回の調査も同様の結果であった。周辺の遺跡をみても山地の遺跡で早期の遺物が、平地の遺跡では晩期の遺物が多くなる傾向があり、主に晩期以降に平地での活動が始まったと考えられる。なお、遺物の多くは溝内やⅡ層などに入っており、多くは溝掘削により掘り上げられたものと思われ、Ⅵ層以下をさらに掘り下げることにより多く出土する可能性が高い。

### 第2節 弥生・古墳時代

弥生前期と判断できる遺物は極めて少ない。弥生中期においては山ノ口式土器が少量出土している。第4・5次調査区でも同様であり、第1グラウンド付近を中心に何らかの活動があったと推定される。

また竪穴建物や円形の炭化物がⅥ層より出土しており、年代測定より弥生中～後期のものと推定される。円形炭化物は住居等の跡が、古代など後世に破壊された残りと考えられる。弥生後期の遺物量は中期より圧倒して多いことから、これらの遺構も後期のものである可能性が高い。また古墳時代前期の遺構として、溝状遺構が1条検出されている。

弥生後期の搬入品として、現体育館である第2次調査区と同じく、安国寺式と考えられる櫛描波状文を施した二重口縁壺が出土している。また日向系と考えられる胎土や色調を呈した土器も出土しており、第2次調査区での破鏡出土も考えると、この期において東九州側からの交易ルート上にあったと推定される。

包含層についてはⅤ層からⅥ層上面付近が比定され、第9図にみられるように、古代以降における破壊を免れた部分から多くの完形に近い弥生後期から古墳前期にかけての遺物が出土した。またⅡ・Ⅲ層土内や溝等でも、この期の土器片が多数出土している。またこれまでの調査においても、ほぼこの時期の遺物であり、同じく平野部にある園田遺跡でも同様の傾向が見られる。そして北側に位置する城山山頂遺跡では中期以降の遺物が多くみられ、布留式土器など搬入品も出土している。これらの例から、この地を含めた国分平野東北部では、弥生時代後期から古墳時代前期にかけて、東九州方面からの交易ルートを持つなど繁栄したが、中期頃に水害等の自然災害が発生し、平野部から山地へと移動した可能性がある。

### 第3節 古代

古代土師器の坏・皿等や白磁、越州窯系青磁、緑釉陶器、墨書土器など重要な遺物がみられ、布目瓦の出土量も多いこと、大隅国分寺推定値に近いことから、国分寺に関係する場所であった可能性が高い。現在までの調査

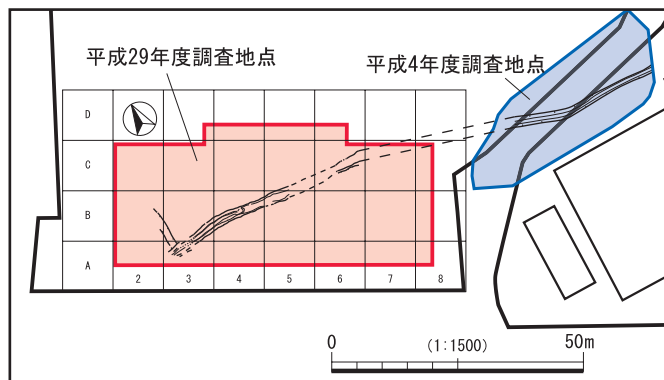
において、国分寺の推定範囲東端は国分小西側であるが、今回の調査区付近も検討に値すると考える。また、今回調査された溝状遺構3号は、平成4年度調査区の古代溝状遺構とつながるものと考えられ、直線ではないが、ほぼ東西方向に伸びている(第65図)。これは国分寺推定南端とほぼ同緯度であり、寺範囲南限の区境である可能性がある。そしてこの溝内には布目瓦がほぼ完全に破壊された状態に入っており、床面に9～10世紀頃の遺物がみられたことから、10世紀頃には埋まり始めていたと考えられる。大隅国分寺は9世紀初頭頃の創建と考えられており、溝の埋まった年代を考えると、創建から1世紀を経ずに建物が崩壊したか、建て直したと推測される。瓦はⅠ類など古い段階のものが多く、これは、大隅国分寺調査範囲の中でも東寄りに古いタイプが多くみられたことと整合的であり、東側から西側へ建物を建て直した可能性がある。

### 第4節 中世

#### 中世1期(Ⅲ層下面)

今回の調査の中心となる時代であり、土塁状遺構に囲まれた武家屋敷と考えられる掘立柱建物が検出されたことは注目される。特に掘立柱建物跡3号は、礎石を持つ3間×3間の総柱で、東西土塁の中央に建てられており、この区画の中心建物である。建物の東側にはカマドや鍛冶遺構があり、東側の土塁状遺構には、溝状遺構6号の排水の役割と共に、出入り口として利用された可能性が考えられる土塁の切れ目がある。

この武家屋敷の平面及び断面を第66図に示した。断面は、第6図①及び第36図断面Aを参考にした。なお、高低差を分かりやすくするため、断面の高さは平面の3倍としている。図をみると、溝状遺構4～7号はほぼ南北方向、8号は東西方向に作られており、古代における条里制区画を利用した可能性がある。断面をみると、溝状遺構4号のみ倍以上の深さとなっている。これは東側に城山が位置し、西側に平野が広がっており、攻めやすい平野側



第65図 古代溝の推定



からの攻撃に備えたためと考えられる。また、版築するなど盛り上げて土塁を作らず、溝の構築や、住居付近を削ることによって土塁状遺構を作っている。これは、この付近が背後の城山や付近の手籠川などからの流水や土砂崩れが多く、盛り上げた土だと崩壊が早いと推測される。削平を受けなかった土塁状遺構の頂部では弥生・古墳時代の遺物が良好に残存している。

なお、Ⅲ層を敷設した中世2期の断面も記載した。検出された状態や土層断面から、建物跡などがあつた上面をやや削り、土を入れ、敷きならしたと考えられる。

なお、第4次調査区Bにおいては、土塁の存在が土層断面より確認され、『国分諸古記』における城壁近くの長屋の可能性が指摘されていた。今回の調査区と重ねると、溝状遺構4・5号間の土塁状遺構の一部である可能性が高い(第66図)。またこのⅧ・Ⅸ層内では、成川式土器が多く含まれ、ほとんどがローリングを受けていると指摘されている。このことから、この部分の地形が低いため、今回の調査区などで削られた土を使って土塁を築いた可能性が考えられる。

土塁に囲まれた屋敷跡としては、同じ霧島市内における鹿児島神宮の4社家である桑幡氏や留守氏の屋敷跡がある。しかし、桑幡氏のものが約90m四方であることなどかなり規模が異なっており、地域の有力者と一般武家との違いと想定される。

また土塁状遺構の内外において、カマドが9基検出された。4基ずつ東と南に焚き口を向けており、1基のみは北である。1・3号や7～9号のように密集して作られているものもみられ、厨房のような役割をしていたと、考えられる。唯一北側に焚き口を向ける7号は、焚き口の上部が残存しており、これは他のカマドも同様の作りであった可能性が高い。6基のカマドは炭化物年代測定を行っており、やや違いはあるが、16世紀から17世紀初頭という結果が出ており、近い時期につくられたものと想定される。

#### 中世2期(Ⅲ層上面)

1期におけるカマド等を破壊し、Ⅲ層土を入れ平坦にならし、上面に開渠や石列遺構を作っている。どちらも主に地域外から持ち込んだと考えられる安山岩を使用しており、庭園風に作り替えようとしたと考えられる。石列遺構の炭化物年代測定では、おおよそ16世紀から17世紀前半という結果が出ている。しかし、これはⅢ層下面のカマドなどとほぼ差は無い。ただし確実に時期差はあるはずであり、Ⅲ層下面は16世紀前葉～中頃、Ⅲ層上面は16世紀後葉～17世紀前半頃と想定される。舞鶴城の造成は16世紀末～17世紀初頭であるので、Ⅲ層上面は城造成直後のものか、もしくは造成後も埋め立てられずしばらくは活用された可能性が考えられる。

#### 板碑について

溝状遺構7号において、板碑が出土した。県内においては地上に建てられているものは見受けられるが、ほぼ完形で遺構等に埋められた状態で出土した例は初である。広い額部を持ち、2文字の梵字を刻む形状は、霧島市隼人町に所在する沢家墓地内の板碑群のものが最も近い。沢家墓地のものは、全て額部に金剛界大日如来を示す「バン」の文字を刻み、下の身部はそれぞれ異なっており、今回出土した板碑も同様である。しかし、横幅が明らかに小さいという点が異なる。なお、沢氏は鹿児島神宮の4社家の1つである。

#### 第5節 近世

今回の調査区は、近世初頭に築城され、現在も石垣が現存する国分新城(舞鶴城)内にあたる。

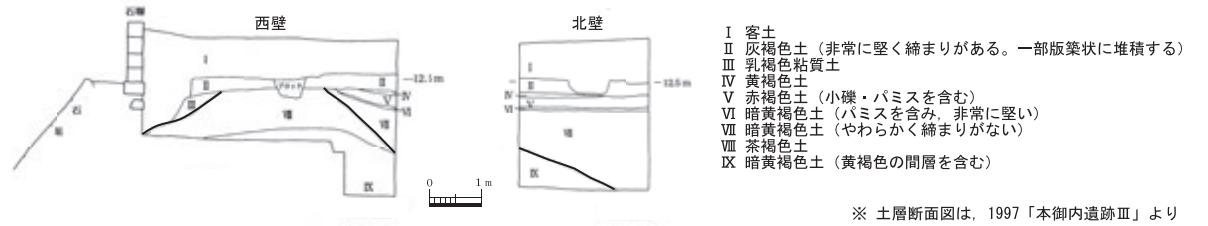
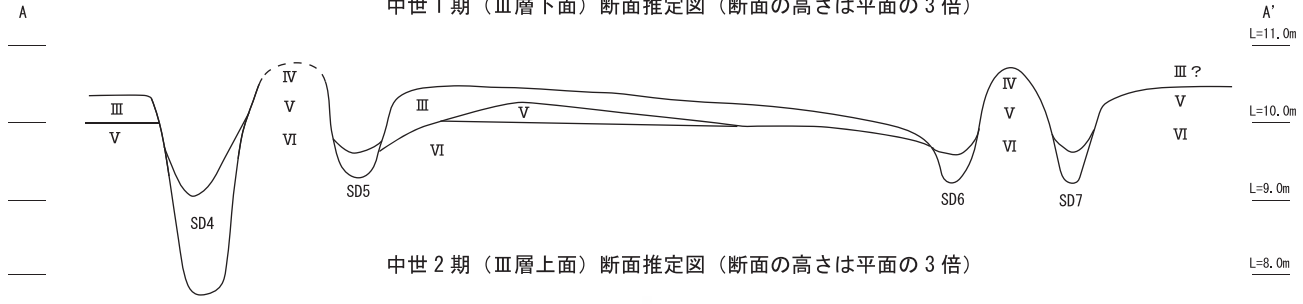
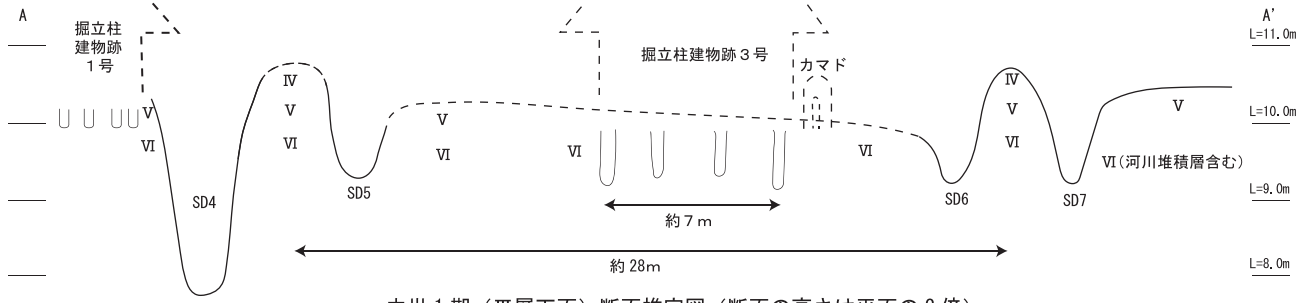
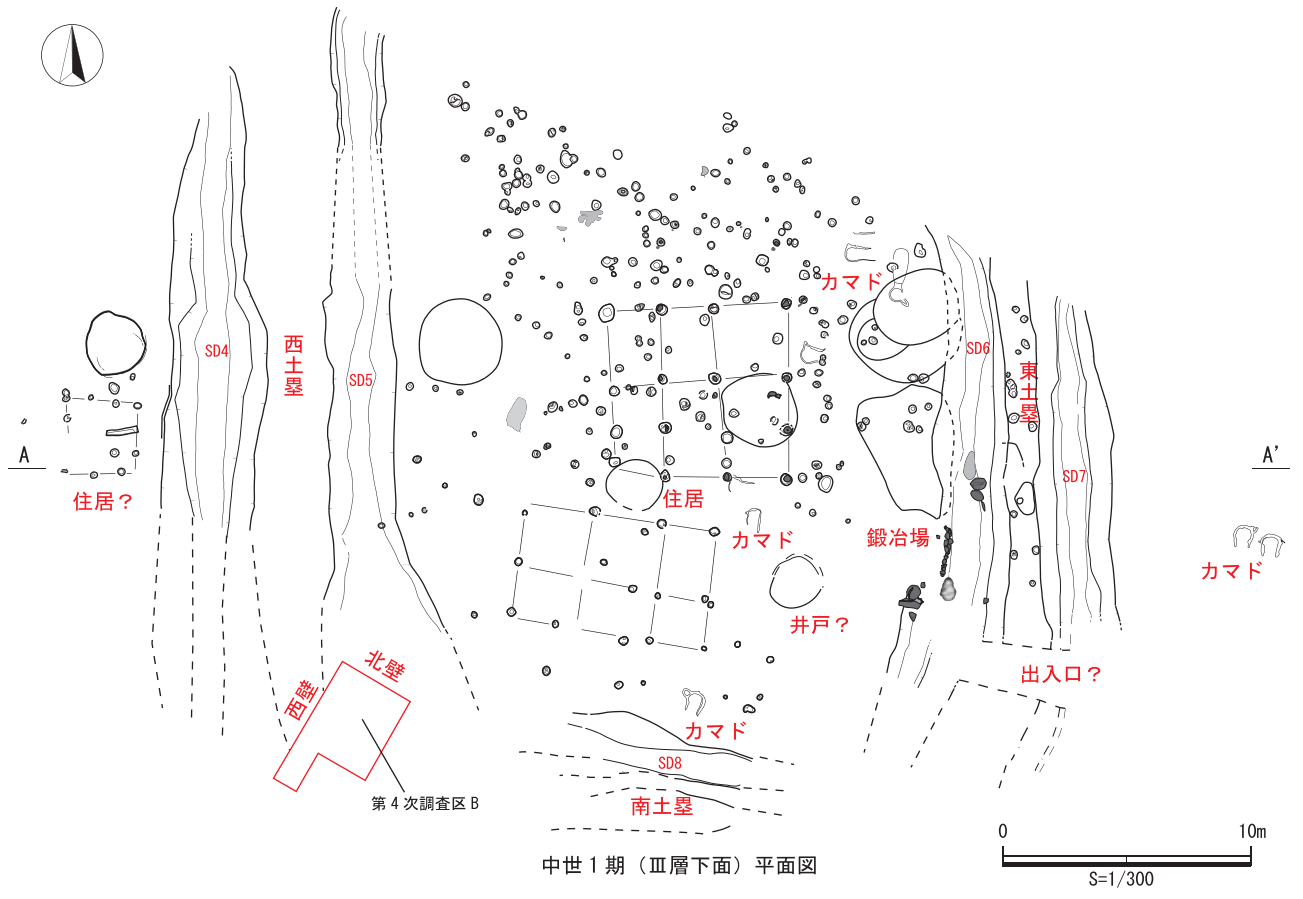
今回の調査では、科学分析によりⅢ層土上面が16世紀～17世紀前半の結果が出ており、その上のⅡ層土が近世の埋土と判断される。第6図断面②における埋土⑨は近世の陶磁器(261)が含まれており、近世に掘り込まれた部分である可能性がある。他のⅡ層部分では、主に南西方向に向け埋め立てられている様子が観察でき、これらの土を城山方面から運んだと考えられる。しかし、Ⅱ層一括の遺物の中には、少量の近・現代遺物が含まれており、これらは紛れ込みや攪乱部分、Ⅰ層断面より落ちて混入したものもあると思われるが、Ⅱ層土が築城当初(近世初頭)・近世途中・近代など、いずれの時期であるかは明確にはできなかった。

現在までの調査区の位置を、最も舞鶴城内の様子を現しているとされる『国分諸古記』の舞鶴城絵図内に示すと(第67図)、第1次調査区において近世後半頃の瓦が出土していること、『国分諸古記』より、その付近に門があつたとされていることから、城入口の門は、近世後半は瓦葺きであつたと考えられる。第4次調査区では時期不明のピット群が検出されており、絵図に建物が記載されていることから、何らかの関係が想定される。

今回の調査区内では、近世の瓦は出土しておらず、遺構も検出されていない。絵図には、「石垣外廻ノ上、長屋有ノ諸」との記載があり、石垣近くに長屋があつた可能性がある。あつたと仮定すれば、石垣と今回の調査区との間は5mあるため、その間に存在したか、今回の調査区内にあつたが、近代以降に攪乱を受けたかのどちらかであろう。また、瓦が1点も出土しなかったことは、長屋が存在したとしても、瓦葺きで無かつた可能性が高い。

#### 第6節 課題及びまとめ

まず今後の調査のため、課題を記述すると、前述したように近世の城造成後に関する不明点が多い。Ⅱ層土は近世以降の造成土であること、北東の城山方面から土を入れていることは疑いないが、近世・近代の遺物が極め



※ 土層断面図は、1997「本御内遺跡Ⅲ」より

第4次調査区B 土層断面図  
第66図 中世推定図

て少なく、城建築時（近世初頭）・近世途中・近代いずれのものか判断できない。Ⅱ層土は現代において強く押し固められており、掘り下げは困難であるが、時間をかけた丁寧な調査が求められる。

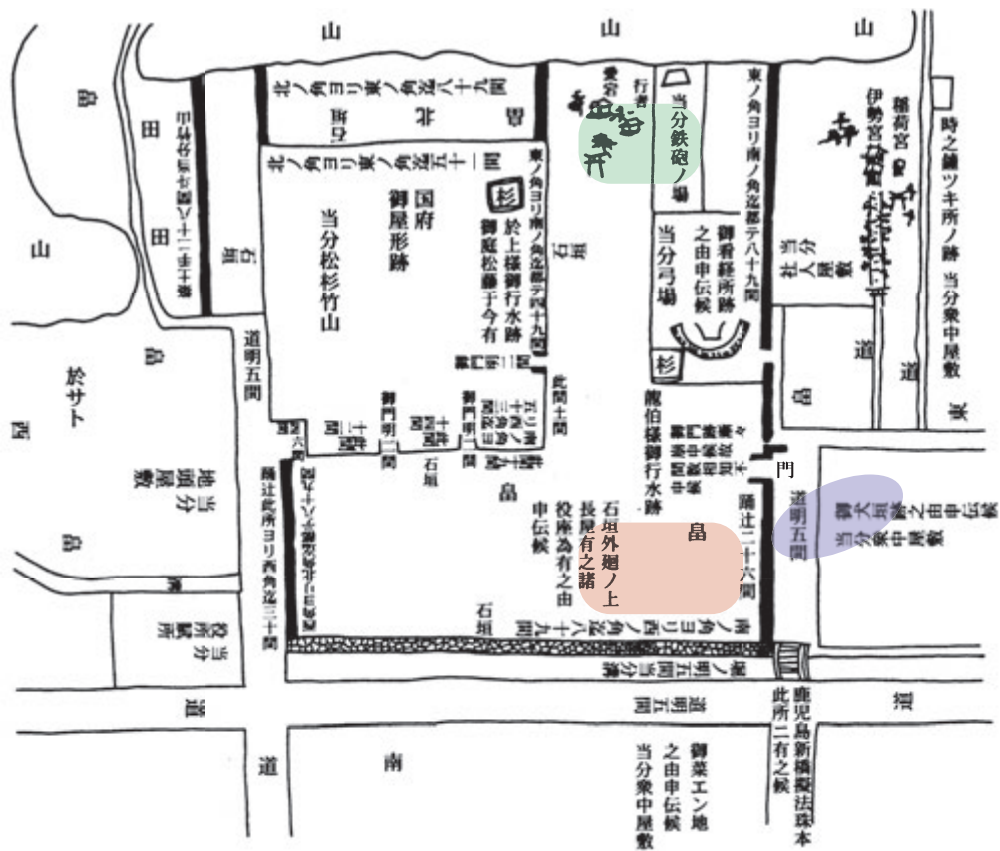
まとめとして、今回の調査によって弥生時代から近世にかけての、多くの情報がもたらされた。まず弥生～古墳時代においては、第2次調査における破鏡出土を裏付けるように多くの遺物が出土し、中世を中心とした時期に大きく破壊を受けていたことが明らかになった。古代では、布目瓦と共に緑釉陶器や古代白磁、越州窯系青磁等の貴重な遺物、東西に延びる大溝が検出され、国分寺や国衙の位置を検討する情報が得られた。中世では、多くの陶磁器や茶臼・石臼・茶釜などの遺物が出土し、溝や土塁状遺構と共に多くの遺構が検出され、県内における武家屋敷の構造の一端が判明した。近世では、城南東部の構造を考える情報が得られた。

国分高校では、今後も建物の建築時、常に発掘調査が行われるであろうが、今回得られた情報を活用し、さらに新たな知見が得られることを期待したい。

参考文献

国分市教育委員会 1985『妻山元遺跡』  
 国分市教育委員会 1985『城山山頂遺跡』

霧島市教育委員会 2010『大隅国分寺跡 遺構編』  
 霧島市教育委員会 2011『留守氏館跡・龍波見氏館跡・埵家屋敷跡・町跡遺跡』  
 霧島市教育委員会 2011『大隅正八幡宮関連遺跡群』  
 霧島市教育委員会 2011『最勝寺氏館跡』  
 霧島市教育委員会 2011『大隅国分寺跡 遺物編』  
 霧島市教育委員会 2015『園田遺跡』  
 国分郷土誌編纂委員会 1997『国分郷土誌 上巻』  
 始良市教育委員会 1999『宮田ヶ岡瓦窯跡』始良町埋蔵文化財調査報告書第7集  
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1994『本御内遺跡』  
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1995『本御内遺跡』  
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 1997『本御内遺跡Ⅲ』  
 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2002『本御内遺跡』  
 乗岡実 2005『備前』『中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』  
 桐山秀穂「日本における茶臼の研究」『古代学研究所研究紀要』第6輯  
 大宰府市教育委員会編 2000『大宰府条坊跡XV- 陶磁器分類編-』  
 上田秀夫 1982「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』  
 森田勉 1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』  
 小野正敏 1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類とその年代」『貿易陶磁研究』  
 昭和49年国分市立国分小学校『舞鶴 創立百周年記念誌』  
 平成15年鹿児島県立国分高等学校『百年誌 舞鶴』



調査区のおおよその位置

第1次調査区（平成4年度） 第4次調査区（平成8年度） 今回の調査区（平成29年度）

第67図 舞鶴城絵図と現在までの調査区

# 写真図版







遺跡上空より

①舞鶴城範囲 ②調査範囲





土層及び弥生時代・古代の遺構

- ① 竪穴遺構完掘 東から  
② 溝状遺構1号 遺物検出 東から  
③ B-2~4区土層断面(土層断面図①) 南西から  
④ 溝状遺構3号 D断面及び全景 西から  
⑤ 溝状遺構3号 C断面 西から  
⑥ 溝状遺構3号 B断面 西から





①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



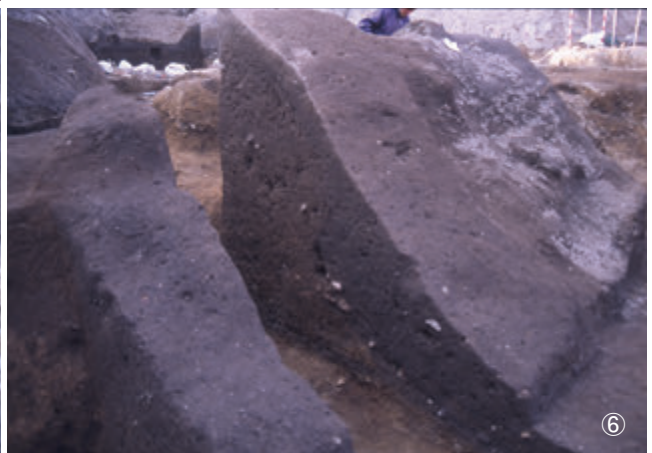
⑧

古墳時代遺物出土状況・大型土坑

- ①2T内 古墳時代大甕(No.35)出土南から  
 ②C-3区 古墳時代壺(No.42)出土北から  
 ③大型土坑1号検出 東から  
 ④大型土坑1号 埋土断面 東から  
 ⑤大型土坑2号 2m下まで完掘 北から  
 ⑥大型土坑3号 埋土断面 西から  
 ⑦大型土坑4号 埋土断面 北から  
 ⑧大型土坑5号 検出 東から



写真図版4



溝状遺構及び出土遺物①

- ①溝状遺構4・5号及び土壘状遺構 南から ②溝状遺構1号検出及び溝状遺構5号土層 ③溝状遺構4号B断面 南から  
 ④溝状遺構5号 C断面 東から ⑤溝状遺構4号 A断面 北から ⑥溝状遺構5号 D断面 南東から  
 ⑦溝状遺構4号埋土内 大型礫・石塔等集中箇所 北から ⑧溝状遺構8号及び土壘状遺構 北から





溝状遺構及び出土遺物②

① 溝状遺構7号及び出土遺物 北東から  
④ 溝状遺構7号 A断面 南東から  
⑦ 溝状遺構6・7号間 C断面 東から

② 溝状遺構6・7号及び土塁状遺構 南から  
⑤ 溝状遺構6号埋土内 炭化物集中区 北西から  
⑧ 溝状遺構6号 D断面 北から

③ 溝状遺構7号埋土内 板碑検出 南東から  
⑥ 溝状遺構7号 B断面 北から





掘立柱建物跡

- ①掘立柱建物跡1号 北西から  
②掘立柱建物跡2号 南から ③掘立柱建物跡3号 南から  
④土塁状遺構間のピット全景 南から ⑤ピット内 礎石転用石臼(No.247)





カマド

①カマド1・2号 西から    ②カマド3号 南から    ③カマド4号 南から    ④カマド5号 東から    ⑤カマド6号 東から  
⑥カマド7～9号検出 東から    ⑦カマド7～9号完掘 北東から





①



②



③



④



⑤



⑥



⑦



⑧

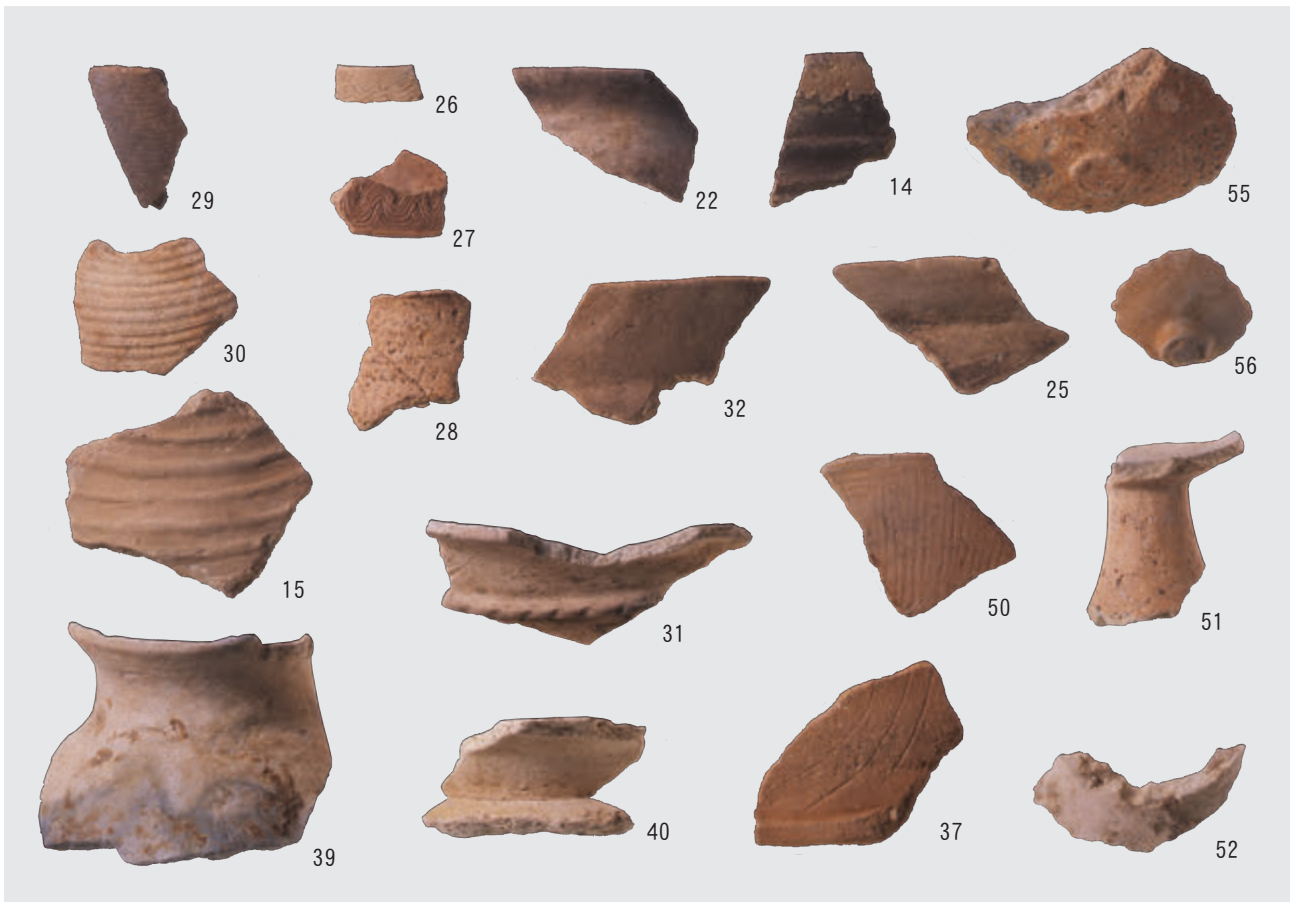
Ⅲ層上面出土遺構

- ①鍛冶遺構検出 北から      ②Ⅲ層上面 溝状遺構9号 西から      ③Ⅲ層上面 石列遺構検出 北東から  
 ④石列遺構内 陶磁器及び炭化物出土 北東から      ⑤Ⅲ層上面 刀子出土 南東から      ⑥Ⅲ層上面 開渠 西から  
 ⑦土坑墓1号 南西から      ⑧土坑墓2・3号 南から



弥生・古墳時代出土遺物





縄文～古墳時代出土遺物



古墳時代・古代出土遺物



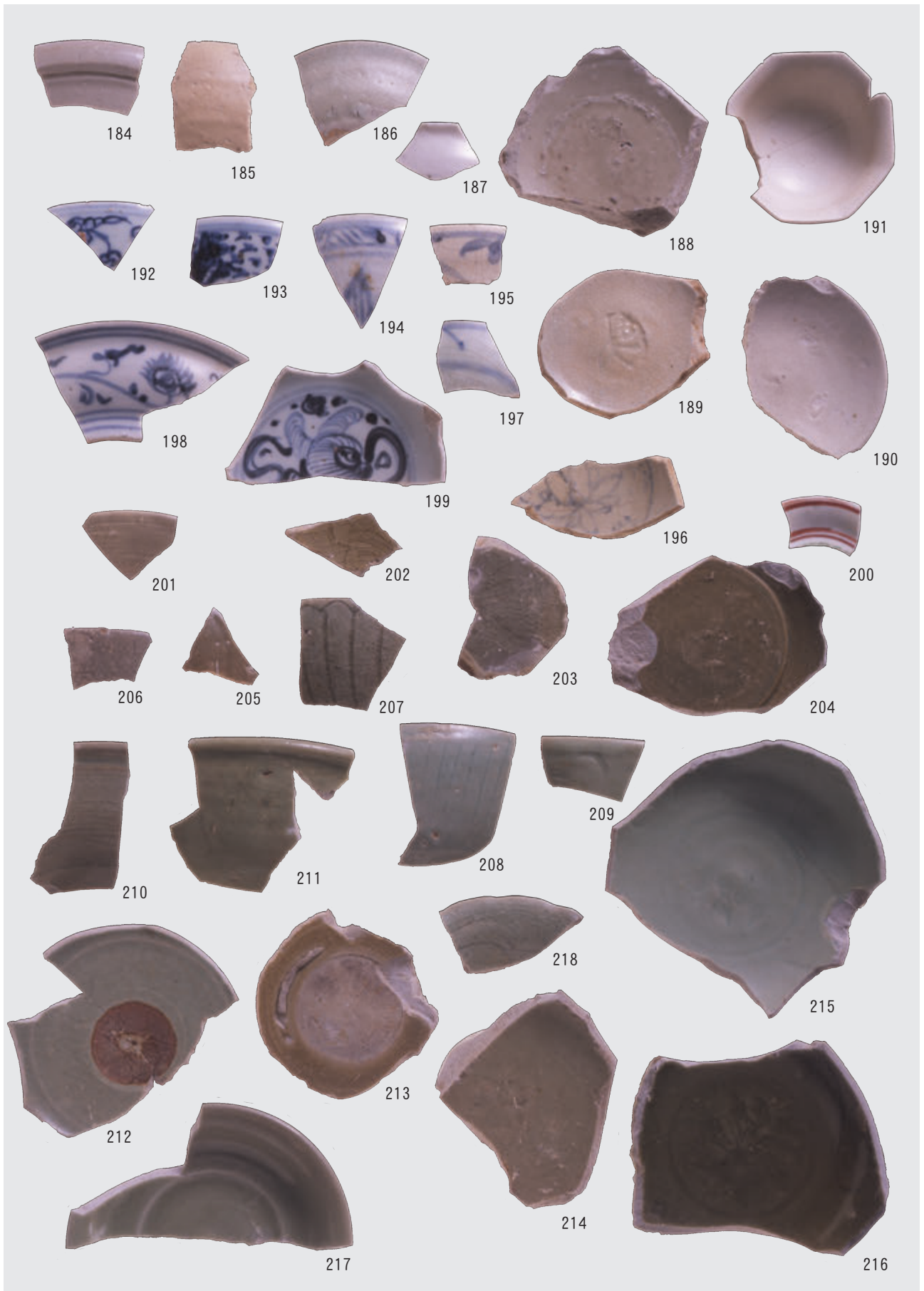
古代出土遺物





古代·中世出土遺物





中世出土遺物



中世出土遺物



中世・近世・時代不明出土遺物

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 (199)  
国分高等学校校舎改築事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

もとおさといせき  
**本御内遺跡 V**  
(霧島市国分)

発行年月 2019年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター  
〒899-4318  
鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号  
TEL 0995-48-5811 FAX 0995-48-5821

印刷 株式会社プリンティング三州  
〒892-0871  
鹿児島県鹿児島市吉野5501番地4  
TEL 099-244-3334 FAX 099-244-6681





鹿児島県